フランスドライブ紀行
（黒マリア、ロマネスクとワイン）
pdf 版

平成１２年１１月１８日
平成 15 年 2 月 1 日(pdf 化)
阿 部 敏 雄(敏翁)

この旅行記は、平成９年（１９９７）５月１９日から６月９日までフランス南部をレンタカーによるドライブ旅行したときのもので、

本テキストの原文は、パソコン通信ネット Nifty-SERVE のＳＩＧ　FEURO の「フランス」会議室に掲載したものですが、それを主体としてそれに画像を加えて纏めました。

尚、「敏翁」とは、小生のニックネームです。

目　次

（見たいところをクリックすればそこにジャンプします）

Ⅰ．概要 3
1.1 ドライブ旅行概略図 3
1.2 旅行の特徴 3
1.3 レンタカー 3
1.4 持参した主な物 4
【1.4.3　**Libretto**】 4
D）Ｚｏｄｉａｑｕｅ叢書 5
1.5 概略行程表 6
Ⅱ．リヨン（ Lyon 今年も初めから波瀾含み） 7
Ⅲ．オーヴェルニュ、黒マリア 13
３．１　ル・ピュイ（Le Puy） 13
３．２シェーズ・ディユー（La Chaise-Dieu） 17
３．３　ブリウッド（Brioude) 19
３．４　イソワール（Issoire） 20
３．５　ベス・アン・シャンデス（Besse-en-Chandesse) 22
３．６　オルシヴァル（Orcival） 23
３．７　ロンジエール（Ronzière）、コラミン（Colamin-sous-Vodable） 24
３．８　クレルモン・フェラン（Clermont-Ferrand） 26
３．９　リオン（Riom）からエブリュイユ（Ébreuil）まで 28
３．１０　スヴィニイ（Souvigny）、ムーラン（Moulins） 32
３．１１　「黒マリア」のまとめ 35
Ⅳ．ブルゴーニュ、ロマネスクとワイン 36

４．１　パレ・ル・モニアル（Paray-le-Monial） 36
４．２　ブリオネ地方（Brionnais） 37
４．３　クリュニー（Cluny）、ベルゼ・ラ・ヴィル（Berzé-la-Ville） 42
４．４　トゥルニュ（Tournus）、ボーヌ（Beaune）、ディジョン（Dijon） 45

ル・ピュイ大聖堂の黒マリア
４．５　アレシア（Alésia）〔アリス・サント・レィヌ（Alise-Ste-Reine）〕 50
４．６　ヴェズレー（Vézelay） 51
４．７　フォントネー（Fontenay） 52
４．８　ボーヌ、オータン（Autun）、ワイン・ツアー 53
４．９　オーセール（Auxerre）、ポンティニイ（Pontigny） 59

Ⅴ．ロワール、シャトーとフレスコ 61
５．１　オルレアン（Orleans）
５．２　シャンボール城館（Château de Chambord）
４．３　モントワール（Montoire-s-le-Loire）、ラヴァルダン（Lavardin）
４．４　アンボワーズ(Amboise)、シュノンソー城館(Château de Chenonceau)
４．５　リジェ（Liget）、サン・テニャン（St-Aignan）
４．６　タヴァン（Tavant）、フォントヴロー（Fontevraud）
４．７　アンジェ（Angers）

Ⅵ．ポワトゥー、サントンジュロマネスクとトラブル 74
６．１　ポワティエ（Poitiers） 74
６．２　ショーヴィニイ（Chauvigny）、車のトラブル 77
６．３　サン・サヴァン（St-Savin） 78
シュノンソー
６．４　サント（Saintes）とその周辺 79
６．５　フェニュウ（Fenioux） 82

Ⅶ．オーネー、アングレーム
７．１　オーネー（Aulnay）
７．２　アングレーム（Angoulême）
Ⅷ．ボルドー、ワインとロマネスク
８．１　ボルドー（Bordeaux）
８．２　ワイン・ツアー
８．３　サン・テミリオン（Saint-Émilion）
８．４　帰国へ
Ⅸ．その他
９．１　ブルゴーニュにおけるネゴシアンの役割り

９．２　まとめ（ロマネスクなど）……97
９．３　私の主観的評価（ワイン）……99
追記（１１月４日）　Libretto 利用技術コンテスト　優秀賞受賞……99

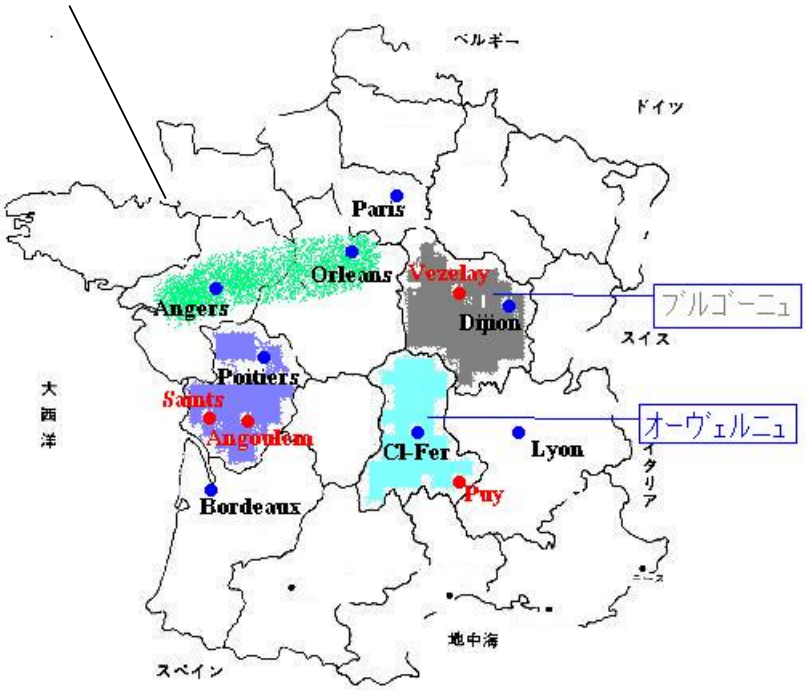
ボルドー　ワインツアーにて

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第１報　　敏翁

Ⅰ．概要

1.1 ドライブ旅行概略図

1.2 旅行の特徴



旅はリヨンから始まり次の地域を回ります。

地域　　主な興味の対象

1）オーヴェルニュ　　ロマネスク、黒マリア、柱頭
2）ブルゴーニュ　　ロマネスク、ワイン
3）ロワール　　シャトー、壁画、タピスリー
4）ポワトウ／シャランテ　　ロマネスク、壁画、柱頭
5）ボルドーとその周辺　　ワイン、ロマネスク

以上の順に約３週間かけてレンタカーで回るというものです。

尚**ワイン**といっても、年金生活者の身で、（超）一級品を飲めるわけはなく、その地域、地域の特徴あるワインを味わおうと言う程度のものです。
又、今回の地域にブルゴーニュ、ボルドーが入っているので、そこで各一日　をツーリスト・オフィスがセットしたワインツアーにあてる事にしました。

1.3 レンタカー

レンタカーは、ＡＶＩＳ、日本で予約、リヨンの市内で借り、ボルドーの空港で返すと言うものでした。
去年と同じルノー　ｃｌｉｏ　１４００ｃｃ　オートマチック　で　全長３．７１ｍ空調及び防犯

装置付き、小型ですがきびきびと良く走りました。
　今年は、大分フランスの事情にも馴れてきたので、普通の路でも時速１２０ｋｍ、高速では１５０ｋｍ位で走り回りました。全走行距離は約３５００ｋｍでした。
　実は、途中で左ウィンドーガラスが吹き飛ぶと言う大問題（？）が発生したのですが、その詳細はショウヴィニィのところで記します。

1.4 持参した主な物

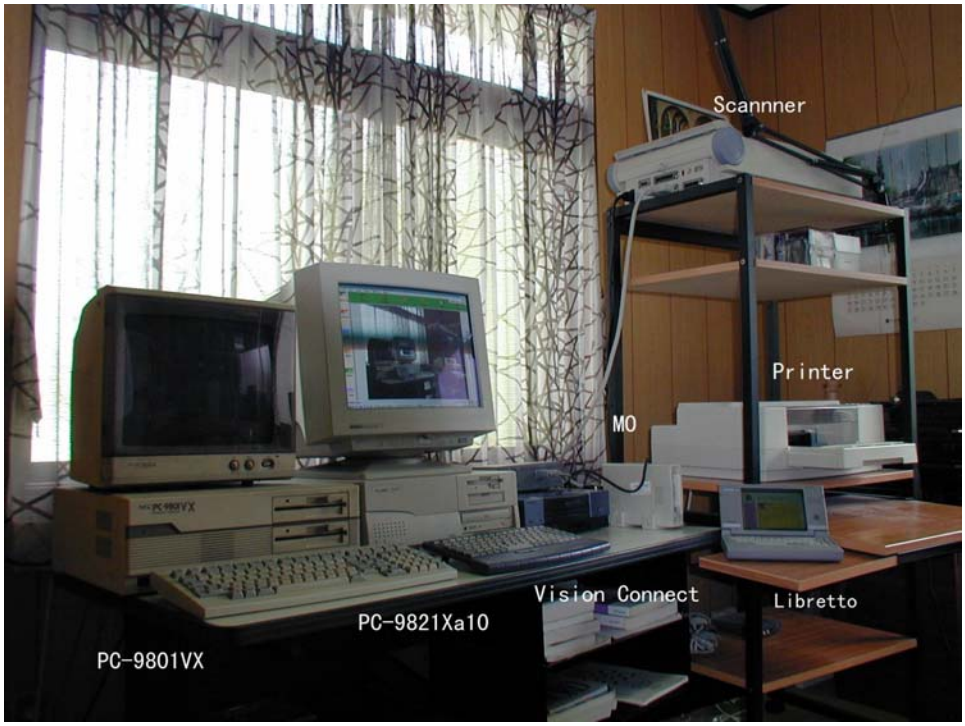
【1.4.1 地図】　ミシュラン　フランス全国地図帳　２０万部の１

【1.4.2 書籍類】

1 ミシュラン・グリーンガイド　Auvergne、Rhône Valley　（英語）
2　〃　Burgundy Jura　（英語）
3　〃　ロワールの城　（日本語）
4　〃　Atlantic Coast　（英語）
5 ミシュラン・レッドガイド　１９９７　フランス　（仏語）
6　田中仁彦「黒マリアの謎」　岩波書店
7 仏和辞典　Le Dico　白水社
8 コンサイス英和辞典　三省堂
9 フランス政府観光局で仕入れた資料類。

【1.4.3　Libretto】

　今回の新しい試みとして、Libretto 50 （東芝製超小型パソコン Windows95, Pentium 75MHZ, Color TFT LC, Wt.=850g）を持って回りました。　（消費税が上がる前、３月末に駆け込みで購入したもの）



　私の主パソコンは、NEC PC9821　Xa10(Pentium　100MZ Windows95）ですが、これにスキャナー、画像圧縮ＪＰＥＧソフト、ＯＣＲソフト（フランス語も読み込めるソフトを最近入手）をつけて、今回の旅に関係しそうな書籍の画、文章を片端から取り込みました。
　それを、RS232C を経由して、Libretto に読み込ませるというものです。
私の<u>パソコンルーム</u>の状況を<u>左図</u>に示します。

（1999 年・年頭の状況）

Libretto に読み込ませた内容を以下に記します。

Ａ）ワイン関係

A1）浅田勝美　「新版　ワインの知識とサービス」
　　柴田書店　１９９１年

A2）ハリー・Ｗ・ヨクスオール「ワインの王様」　（バーガンディ・ワインのすべて）
　　早川書房　昭和５８年

以上のほぼ全文。

Ｂ）日本語美術関係

B1）「ロマネスク古寺巡礼　田沼武能写真集」　岩波書店　１９９５年
B2）世界美術大全集　８　「ロマネスク」　小学館　１９９６年
B3）世界美術大全集　９　「ゴシック　１」　小学館　１９９５年
B4）ハンス・エリッヒ・クーバッハ　「ロマネスク建築」　図説世界建築史　７　本の友社　１９９６年
B5）ルイ・グロデッキ　「ゴシック建築」　図説世界建築史　８　本の友社　１９９７年

以上で関係ある場所の写真と文章。

Ｃ）その他

C1）塩野七生　「ユリウス・カエサル　ルビコン以前　ローマ人の物語　Ⅳ」　新潮社　１９５５

時間があれば、ガリア戦役７年目のジェルゴビアとアレシアを訪れたいと思っているので関係箇所を取り込む。

ＢＣ５２年のアレシアの決戦により、現在のフランスの骨格が形成されたと言っても過言ではないのだそうですから。

塩野さんの本は、カエサル「ガリア戦記」岩波文庫そのものよりは、だいぶ解りやすいのでこれにしました。

以上は総て神奈川県立図書館、又は横浜市立図書館から借りたものです。

Ｄ）Ｚｏｄｉａｑｕｅ叢書

	書籍名	左記書籍にある主な場所
D1)	Forez-Velay Romane	le Puy-en-Velay
D2)	Auvergne Romane	Issoire, Clermont-Ferrand, Mozac
D3)	Bourgogne Romane	Vézlay、Cluny、Autun、Paray-le-Monial
D4)	Val de Loire Roman	Saint-Aignan
D5)	Touraine Romane	Liget, Montoire, Tavant
D6)	Anjou Roman	Angers, Cunaud, Fontevraud
D7)	Haut-Poitou Romane	Poitiers, St-Savin, Chauvigny
D8)	Saintonge Romane	Saintes, Rioux
D9)	Angoumois Roman	Angoulême
D10)	Guyenne Romane	Bordeaux, St-Émilion
D11)	L'Art Cistercien (France)	Fontenay,Pontigny

以上から上記「主な場所」を含む訪問の可能性のある場所の図を主体に取り込む。（説明文は殆

ど英文＜アブストラクト＞。
仏語は必要最小限＜例えばオーベルニュの柱頭の説明＞にとどめた）

Zodiaque 叢書は、今年「日仏会館」（恵比寿ガーデン・プレースのそばにあり、フランス語の書籍４万５千冊を持つ）の会員になり、上記書籍を借り（会員は館外持ち出し１ヶ月借りられる）、取り込んだもの。

読み込んだ画像の数は、全体で１２００を超えます。これは画像データを JPEG で圧縮したことで可能になりました。

本の重量で言うと、B2,B3 は各々4kg 近く、B4,B5 は各々1.7kg、D は各々 7-900g あります。読み込んだ本の全重量を数えてみると２０ｋｇ近くになるようです。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

【1.4.4 カメラ類】

1 ニコン　24-50mm　75-300mm

今年回る地方は、柱頭、壁画で有名なこともあり、新しく 75-300mm の望遠レンズ（シグマ製の軽いもの）を持っていくことにしました。これと外付けのフラッシュ（光の放散の範囲を、標準、広角、望遠と変えられるもの）で高いところにある柱頭などを狙うことにしたわけです。

昨日出来上がってきた写真を見ると、ピント良く写ってはいますが、陰影が全く欠けていて、記憶を呼び戻すには充分使えますが、面白味のない写真が殆どのようです。

2 オリンパスμ　35mm　　　3 シャープ・ビュウカム　　　4 三脚

1.5 概略行程表

日	曜	主要訪問先	泊	備考
５月１９	月	成田－－（ａｉｒ）－－＞		
２０	火	パリ－－（ＴＧＶ）－－＞リヨン	リヨン＊	パリ空港スト
２１	水	リヨン	リヨン＊	レンタカー借りる
２２	木	ル・ピュイ	ル・ピュイ＊	
２３	金	シェーズ・ディユー、　ブリウッド、　イソワール	イソワール	
２４	土	ベス・アン・シャンデス、　オルシヴァル、　コラミン	クレルモン・フェラン	
２５	日	リオン、　モザック、　エンネザ、　エブリウル	クロワ・デ・ボア	
２６	月	スヴィニィ、　ムーラン、　パレ・ル・モニアル	パレ・ル・モニアル	
２７	火	ブリオネ地方、　クリュニー、　ベルゼ・ラ・ヴィル	クリュニー	
２８	水	トゥルニュ、　ボーヌ、　シトー、　ディジョン	ディジョン	
２９	木	アレシア、　ヴェズレー、　フォントネ	ボーヌ＊	
３０	金	オータン、　ワイン・ツァー	ボーヌ＊	
３１	土	オーセール、　ポンティニュイ、　オルレアン	オルレアン	
６月　１	日	シャンボール城館、モントワール・シュル・ル・ロワール、ラヴァルダン、　シュノンソウ城館	アンボワーズ	
２	月	リジェ、サン・テニアン、タヴァン、フォントヴロー	アンジェ	
３	火	アンジェ	ポワティエ	
４	水	ポワティエ、　ショーヴィニィ、　サン・サヴァン	サント	
５	木	リウ、　フェニュウ、　オーネー	アングレーム	
６	金	アングレーム、ボルドー	ボルドー＊	
７	土	ワイン・ツァー	ボルドー＊	

８　日　　サン・テミリヨン　　ボルドー　－－（ａｉｒ）－－＞　ボルドー空港でレンタカー返す

９　月　　成田着

＊：日本でホテル予約済み。　他は総て当日夕方現地で申し込み。満員で断られたのは一回のみであった。

いつもの事ながら仮名表記には自信がない。饗庭孝男「ヨーロッパ古寺巡礼」にあるものは全部それに合わせ、ロワール関係はミシュラン（ここだけ日本語）に合わせたが、一部あやしいものがある。

以上第１報終わり。

旅行の実際は、第２報からはじめます。　　敏翁

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第２報　　敏翁

Ⅱ．リヨン（ Lyon 今年も初めから波瀾含み）

【５月１９日（月）～２０日（火）】

エール・フランスＡＦ２７３便（１９日２１：５５発）で成田からパリ（ｼｬﾙﾙ･ﾄﾞ･ｺﾞｰﾙ）、そこで乗り継いでリヨン（２０日８：４０着）まで行く予定だった。

しかし、成田のチェック・イン・カウンタでいきなり、明朝パリ空港は操縦員の**【スト】**の公算があり、荷物はパリで降ろすほうが良いでしょうと言われる。

パリまでは、順調に着いたが、やはりスト中らしく、又連絡が極めて悪く、降ろした大荷物を抱えて右往左往する。着いたＣ棟のカウンタで聞いても、Ｄ棟へ行けと言われるし、Ｄ棟でも「ここは担当が違う。ＸＸ番（番号失念）のカウンタがリヨンの担当だと言う調子。エール・フランスにもかなり日本人が居るはずだと思うが、一人も見かけない。

私以外にも困っている日本人がいたのだが。彼らはマルセーユで舟を借りて運河（MIDI でカルカソンヌとか）を旅する計画だとか。これも又楽しそう。

見ていると行き先によっては、飛ぶこともあるようである。

リヨン行きは出発の予定時間を大分過ぎて、リヨン行きの乗客を**【ＴＧＶ】**（フランスの新幹線）で送ってくれる事になる。

Ｄ棟の隣（歩いて５分程度）の所がＴＧＶの駅になっている。担当のおばさんが旗を持って引率して連れていってくれる。そこでキップをもらう。

列車は９時４５分発　**【リヨン・ペラーシュ】**駅行きだが、キップは一つ手前の**パール・ディユー**までのもので

３９９Ｆｒのもの（無論無料）。

リヨンにはＴＧＶの駅が以上の２つある。ビジネスの中心は、パール・ディユーに近いが、古い町、観光の中心には、ペラーシュの方が便利のようである。

尚、空港からは、バスで終点ペラーシュまで２７ｋｍ、５０分程度かかるらしい。

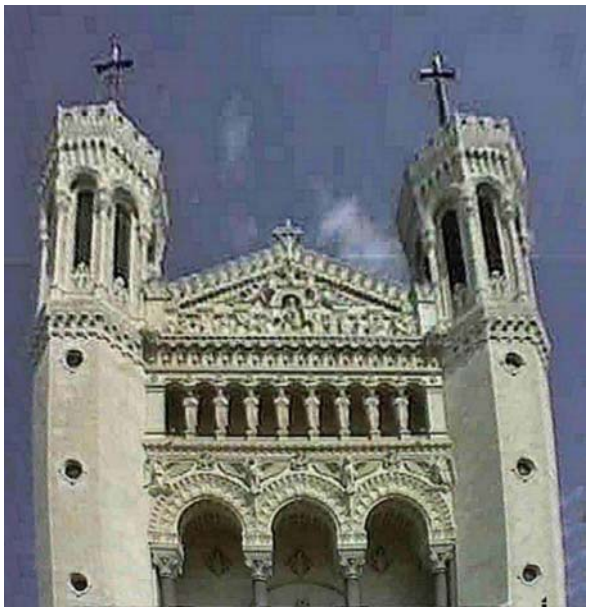
ＴＧＶは、日本の新幹線と比べると、列車は小振りで横幅が狭く（２人ｘ２、通路も狭く私のキャリーに載せた大きいバッグ［トランクとは別］が通らない）。それだけスピードは出しやすいのだろう（今スピードの記録はＴＧＶが持っているはず）。

私の予約したホテルはペラーシュのそばにあるらしい。それで車掌にこの切符で行けるかと聞いてみると、「no problem 」だと言う（と言うことは英会話で用が済んだという事）。料金は同じらしい。実は乗り越し料金を要求されたとき、面倒なことが起こるかも知れないと心配していたのだった。と

言うのは、ストの一件で頭が一杯になっていて空港でフラン（Ｆｒ）への両替を忘れていたからだ。
ペラーシュ駅（１２時頃着）で下車。昨年のトウルーズと違い、エスカレータが付いていて大荷物で悪戦苦闘と言うような事はなかった。
駅のトーマス・クックで両替をする。日本円５万円（現金）が 2255.65Fr(22.1¥/Fr)であった。
すぐタクシー乗り場に行き、後ろに荷物を入れてから、ホテル名の書いた紙を見せると、ホテルは目の前に有るという。なるほど１００ｍほどの所にある。せっかく荷物を載せたのだから走れと言ってもだめだ、この路を行けば簡単だと言うばかり。荷物を転がしてホテルに入った。

Mercure Château Perrache - Lyon Centre である。
駅前の一級ホテルで室内もしゃれた造りになっている。だいぶ古いもので、広告に**アール・ヌーボー**の傑作であると言うようなことが書いてあった。
例えば、洗面所も白い大理石（本物がどうかは解らないが）造りの部屋にしゃれた銀色の丸い洗面器があり、蛇口もその真ん中のあたりに壁から突き出している。全体の構成は実に美的なのだが、顔を洗おうとすると蛇口が邪魔になる。機能と美術のバランスが後者に偏りすぎているのである。この一例だけから論を拡大しすぎるのは危険だが、多分アール・ヌーボー活動の中にはこの様な機能軽視の考えがあり、活動自体も機能重視の時代風潮とも合わなくなり尻つぼみになっていったのではないだろうか？
ミニバーのコークを一杯飲んだ後、今回新たに持参した「投げ込み式湯沸かし器」（１週間前日本橋高島屋旅行コーナーで求めたもの）と日本茶ティー・バッグで、お茶を煎れ、これまた持参の佃煮を肴に飲み一息付く。
本日は、町をぶらぶら歩き、交通感覚を思い出してから明日レンタカーを借りる計画である。

ミシュランとビデオカメラだけ持って、先ず駅の構内（厳密に言うと一寸違うのだが）にある**ツーリスト・オフィス（Office du tourisme**　以下フランスで交通標識にも頻出する　**i**　を四角で囲ったものにちなんで〈i〉と表記する）に行き、市街地図を貰い、観光情報の確認を行う。リヨンはパリに次ぐフランス第二の都市であり、美術館も多いのだが、本日（火曜日）は休みが多く、めぼしいところでは、ここから歩いていける**【織物歴史博物館】**（ Musée Historique des Tissus）と、それに隣接する**装飾博物館**（Musée des Arts decoratifs）くらいのもの。まずそこに行ってみる。
リヨンのキャッチ・フレーズは**絹と美食の町**である。
今回の旅行のルートでは、有名なタペストリー（仏語で tapisserie）を見ることが多くなるはずなので、フランスの織物文化全体を総合的に展示している多分世界でも随一（？）のこの博物館は是非見たかったのである。
中身は、実に素晴らしく、且つ展示内容もヨーロッパに限らず、古今東西に亘っている。例えばコプトのタペストリーの復元品とか、ペルシャ絨毯の古いものから日本、中国のものまであった。
見ていくと、いつの間にか雰囲気が違っている。おかしいなと思ったらそこは装飾博物館に入っていたのだった。ここは１６－１８世紀の家具調度品、宝飾品、タペストリーなどの展示である。
ここを出て、近くに駅のある**【地下鉄】**に乗ってみることにした。２回乗り換えて最後は**【登山電車】**（funiculaire）にまで一枚の切符で乗って、**フルヴィエールの丘**に登ってみた。



駅を出ると、目の前いっぱいに西日を浴びて、**【フルヴィエール教会】**（Notre-Dame de Fourvière）の白い西正面が輝いていた（上左図）。見上げれば一番高いところに聖母子像、その下に数多くの丸彫り（八聖人）、浅彫りの彫刻（天使など）が飾られていて私たちを見下ろしていた。

教会内部も明るく、且つ彫刻、ステンドグラス、絵画と装飾に富んでいる。

又教会横からの見下ろしは、素晴らしい。斜め下に**サン・ジャン大司教教会**（Primatiale St-Jean）西正面（上右図の中央）、その先にソーヌ川とローヌ川に挟まれたいわゆる半島部が１８０度展望できた。（上右図）

又登山電車、地下鉄と乗り継いでペラーシュまで帰る。

夜、ホテルで夕食をとる。メインは牛肉を切ったものをソースをたっぷり利かせて炒めたもの。【ワイン】は土地柄**ボージョレ**(Beaujolais)を所望したところ　Saint-Amour 1995 を薦められる。ハーフボトル(37.5cl 76Fr)にした。

これは、Saint-Amour の　ＡＯＣで、ネゴシアンは Georges Duboeuf である。

ここで、小生のワイン勉強の一端を記す事にする（大したものではありませし、知っている人には目障りでしょうが全く知らない人を前提に今後も記す事にします。）

【ボージョレ】(*)は、ブルゴーニュ・ワイン生産地の中では最南端にあり、その一番南端はリヨンのそばまで伸びている。その関係もあり、昔から大消費地リヨンに強い地盤を持っていた。しかしかってはボージョレーのワインは安酒としてしか取り扱われなかった。それは用いるぶどうもコート・ドール（Côte d'Or 黄金丘陵　高級酒の中心地　詳細についてはブルゴーニュに入ったところで述べることにする）で馬鹿にしているガメイ種である事などによる。

(*):ワイン関係の日本語表記は『浅田勝美　「新版　ワインの知識とサービス」　　柴田書店　１９９１年』による。

『しかし、このぶどうでボジョレは、その美しい濃紫赤色、果実的な香り、爽やかな酸味をそなえるのである。このぶどうは花崗岩系の土壌でよく繁茂する。コート・ドールで栽培されると、金属的な味を帯びて二流品扱いにされてしまうが、ボジョレ地区の花崗岩質の土地まで行くとその不快な味を洗い落してしまうようである。』
（ハリー・Ｗ・ヨクスオール「ワインの王様」）

この事や巧妙な販売戦略、いろいろな人の努力で、近年ボージョレも段々高級酒の仲間に入って来たのであ

る。その中で大活躍したのが、上記ネゴシアン G.Duboeuf であった。この辺の事情は、ご当人達の著作「ボージョレ・ワイン物語」平凡社 1990 に詳しい。
日本のスーパーなどで売っているボージョレも Duboeuf によるものが多いようである。
ＡＯＣは、狭い地域を限定した方が高級と言うことになっている。
Appelation Beaujolais Contorôlée よりも Appelation Saint-**Amour Contorôlée** の方がランクが上になる。
Saint-Amour(サンタムール）と同等な**クリュ**（説明はブルゴーニュのところで）は１０ある。（ボージョレではそれ以上の高級分類は無い）
一番名高いクリュは、Moulin-**à**-Vent（ムーラン・ナ・ヴァン　風車の意）だが、サンタムールも果実味と繊細さで評価（特に女性に）されているようである。

私は、ワインは全くと言っていいほどの素人だが、香り、味、喉越しもなかなかのものである様に思った。

今晩の定食には、チーズが付いていて、車付き台の上に沢山のチーズが並んでいてその中から選択しなければならない。
私は、今回の旅行では一貫して次のやり方を採ることに初めから決めていた。
「私は、チーズに対する知識が乏しいのです。このワインに良く合うチーズ群を選択して下さい」と言って彼らに任せる方式である。
そう言ったらここのボーイは、張り切ってどんどん切り取って皿に並べだした。それで充分だと言っても、これも絶対試すべきであると言って更に２種類計７種類を選んでくれた。せっかく選んでくれたのだからと各種１／３乃至半分は試してみたが、あまり極端な香りのものはさすがに避けてあった。

【５月２１日（水）】

朝７時前に目を覚まし、窓から下を見下ろすと、面白い光景が展開されつつあったのでビデオ撮影する。
それは、日本にもあるが、こちらで **【Auto/Train】** と言われる者で、架台車で乗用車を運び、お客は列車で移動し、目的地で車を受け取るシステムであるが、丁度目の下で、架台車から車を降ろして客に渡すシーンが展開されていたのである。
２０組ほどの客が現れては、車に乗り込み走り去っていった。

その内、ここから他の目的地に車を輸送したい車も２，３台乗り付けていた。　実は、これで Auto/Train という言葉とその意味を理解したのが、後で大変助かることに繋がるのである。
朝食後、地下鉄でパール・ディユー駅に行き、その構内にあるＡＶＩＳオフィスで**【レンタカー】**借りた。
取りあえず、ホテルに戻ろうとしたが、ホテルは袋小路の様なところにあり、何回試みても、うまく到着できなかった。その内道路標識に Auto/Train とあるのを発見、それをトレースして細い小路を通り抜け、朝見下ろしていた場所、即ちホテルのそばに到着することが出来た。
又例のやり方で、日本茶と佃煮で一息つき、町へ出方をホテルに聞き(来た道は一方交通で使えない)、２，３回失敗後、漸く【テロー広場】（Place des Terreaux）近くに到着、路端の駐車可能の場所はいっぱいなので、地下駐車場に入る。

テロー広場は、市の一つの中心地である。この広場は東西に細長いのだが、その東端には市役所（Hôtel de Ville）の美しい建物があり、南は一杯に**【リヨン美術館】**（Musée des Beaux-Arts）が立っている。

広場の中心には、海に向かう大河を象徴する、躍動する４頭の馬の銅像で飾られた噴水（上左図）がある。又、広場の広いスペースにも多数の間欠的噴水の仕掛けがして有り、その間を人々が水を避けながら歩いていたりしていた。（上右図）

一寸散歩してから、美術館に入った。工事中が気になったが、切符を求めようとすると１階しか見られないけど良いかと聞かれる。良いと言うしかない。

ここは、モネ、ルノワール、藤田嗣治などの傑作が有ることで知られているのだが、それらは見られなかった。見られた物の中では、古代ギリシャやコプトの物などに優れた物が有ったように思う。

そこから少し歩いて、ソーヌ河畔からフルヴィエールの丘を見上げたりした後、St-Nizer 教会を覗いてから近くのメルシエール通り（Rue Merciere）（左図）に**【ブッション】**（リヨンの小料理店）を訪ねる事にした。この通りは狭い通り（みんな路に座席を張り出しているので更に狭い）だが両側一杯にブラサリー、ブッション、レストランと名前はいろいろだが、要するに料理店が並んでいる。

ぶらぶら眺めた後、その中では値段が高い（メニューで 50-80Fr が一般）Le Bouchon aux Vins （ここのメニューは 100Fr）に入る。

魚料理を頼み、**【ワイン】**は薦められるままに、マコネの白、サン・ヴェラン（Saint-Veran）のＡＯＣ（1995 13%）、ハーフボトル（65Fr）にする。このネゴシアンも又 G.Duboeuf だった。これも少数例から推論するのは危険だが、リヨンにおける Duboeuf の市場占拠率は相当高いのではないだろうか。

【マコネ】地区は、ボージョレの北に位置し、トウルニュの一寸北からマコンの一寸南の地域で、赤、白、ロゼいずれも産する。

白については、『マコネ地区には多数の村があるが，次にあげる村や村群ではこくや風味の点で秀

逸な独自性が認められるので独自のＡ．Ｏ．Ｃ．が適用されている。
（ａ）　プイイ・フュイッセ（Pouilly - Fuisse）
（ｂ）　プイイ・ヴアンゼル（Pouilly - Vinzelles）
（ｃ）　プイイ・ロシェ（Pouilly - Loche）
（ｄ）　サン・ヴェラン（Saint - Veran）』　　（浅田勝美　「新版　ワインの知識とサービス」）
私の呑んだのは、この（ｄ）である。
以上の中では、（ａ）が一番名が通っているが、（ｄ）もそれに準ずるものとされているようである。辛口で、且つ呑みよいものであった。

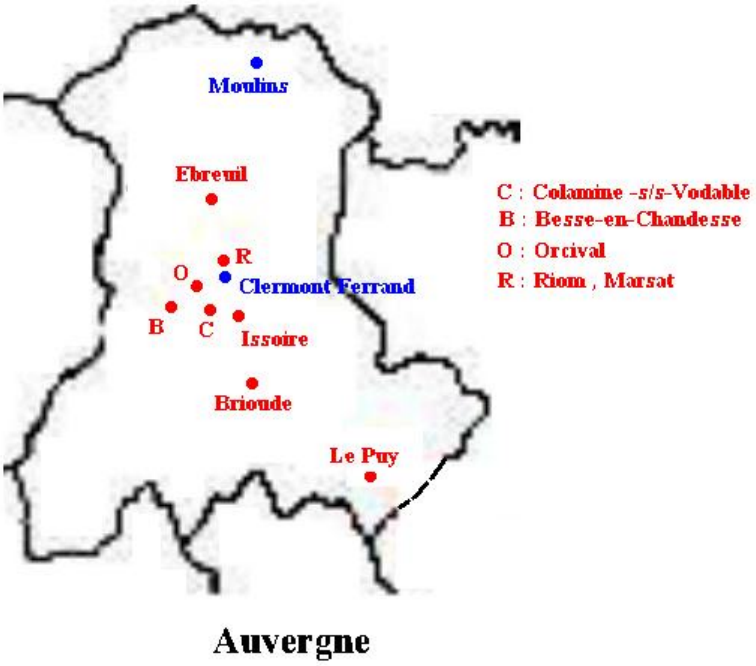
食事後、散歩しながら酔いを醒まし、車でソーヌ川を超え、河畔に建つ**【サン・ジャン大司教教会】**（Primatiale　St-Jean）
(上左図)に向かう。ここも地図の上からは簡単にアクセス出来そうにみえるが、出来ない。見当を付けてそばと思えるところに駐車し、路を聞いてやっと到達した。
西正面は、フランボワイヤン・ゴシック様式だか、均整のとれた美しさを持っている。綺麗なステンドグラスが沢山あるが、祭壇奥のものは１３世紀初期の物という。又ここには、北翼廊に見事な**天文時計（上右図**、１４世紀）がある。

ここからホテルに戻る。食欲も出ないので、夕食は抜く。
レンタカーのオーディオ・システム（Blue Punkt 製）のマニュアル（英語のも付いている）を読んでみると、持参のポータブルＣＤドライブとは接続できないことが解った。実は、昨年借りた車のシステム（Phillips 製）は接続できたのだが、接続コードを持ってこなかったので使えなかったのであった。多分世の中はそうなっているのだろうと、今年は、接続コード、と張り切ってＣＤ６枚を持ってきたのだが無駄になってしまった。
勿論、ルノーの店に行けば、マルチのＣＤドライバーを付けてくれるとは書いて有るのだが、所用時間が心配なのと面倒なのでそこまでやるのは止めにした。
それで、今年はテープは、日本民謡集１本しか持ってこなかったのである。
なんだか急に疲れが出てきて早く床に就いた。

Ⅲ．オーヴェルニュ、黒マリア

３．１　ル・ピュイ（Le Puy）

【５月２２日（木）】



以下の旅行記の理解を助ける為にオーヴェルニュ地方の訪問地を左の地図に示す。

実は、今回のこれも又新しい試みとして、魔法瓶（内容積８００ｃｃ）と、ポカリスゥエットの粉末を持って来たのである。　今朝は、例の投げ込み式湯沸かし器でコップにお湯を沸かし、ティーバツクを浸しては魔法瓶に入れると言うことを繰り返し、お茶でいっぱいにし、喉が乾いたら、それを呑む事にした。

朝、８時２０分ホテル発。St-Étienne 経由ル・ピュイ（参考図）に１１時前に到着。

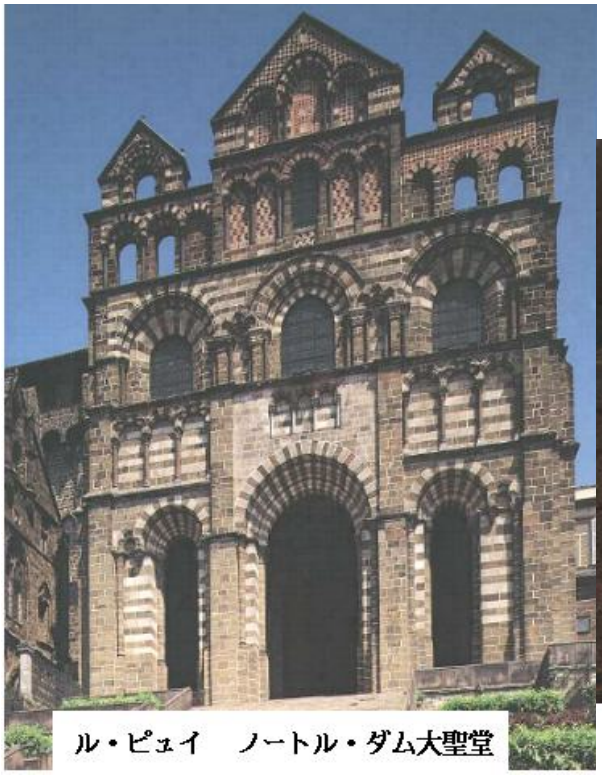
<i>を見つけるのに手間取ったが、そこで市街地図を貰い、ホテルへのルートを聞き、ホテル（ここまでは日本で予約済み）に到着。ホテルの裏の空き地に駐車できる。　**Hôtel IBIS Le Puy St-Lautent**（２星）である。

部屋で例のお茶と佃煮で一息いれ、歩いて**【ノートル・ダーム大聖堂】**に向かう。大聖堂それ自体は、いつでも拝観出来るのだが、回廊と宝物館が１２時半までで１４時までの休みがある。その前にここを済ませたいのである。

ル・ピュイは、**【サンチャゴ巡礼路】**の出発点の一つである。フランス内に発する主要なサンチャゴ巡礼路は４つある。昨年の旅行記にも書いたのだが、再度記して、私の３年間のフランス・スペイン旅行との関係を纏めてみる。

１）アルルのサン・ジルを出発，トゥールーズ（★）、オロロン・サント・マリーからピレネーのソンポール峠を越え、ハーカを経由してプェンテ・ラ・レイナ（☆）に至る。
２）ル・ピュイのノートル・ダーム大聖堂（※）からコンク（★）、モワサツク（★）を通過してオスタバに至る。
３）ヴェズレーのラ・マドレーヌ聖堂（※）を出発、リムーザン，ペリグーを経てオスタバに至る。
４）パリのサン・ジャック聖堂を起点にして、オルレアン（※）、トゥール、ボルドー（※）を経由してオスタバに至る。

以上２，３，４の道はオスタバで集まり、そこからシーズの峠（☆）を越え、ブェンテ・ラ・レイナ（☆）で１）の道と合流して、サンティアゴ・デ・コンポステーラ（☆）へとつづくのである．
☆：一昨年訪問、　★：昨年訪問　※：今年訪問


ル・ピュイ　ノートル・ダム大聖堂

ル・ピュイ　大聖堂　回廊

大聖堂は、丘の上にあり、なだらかな坂道（何本かあるが）の両側は門前町になっていて、たくさんの土産もの屋，聖具を売る店が並んでいる。ル・ピュイ名物の刺繍屋も店先で女性たちが実演しながら製品を売っていた。
大聖堂は、下から眺めるその西正面の姿、色使いだけで、東方、アラブの影響を強く受けていることが解る。**(上左図)**

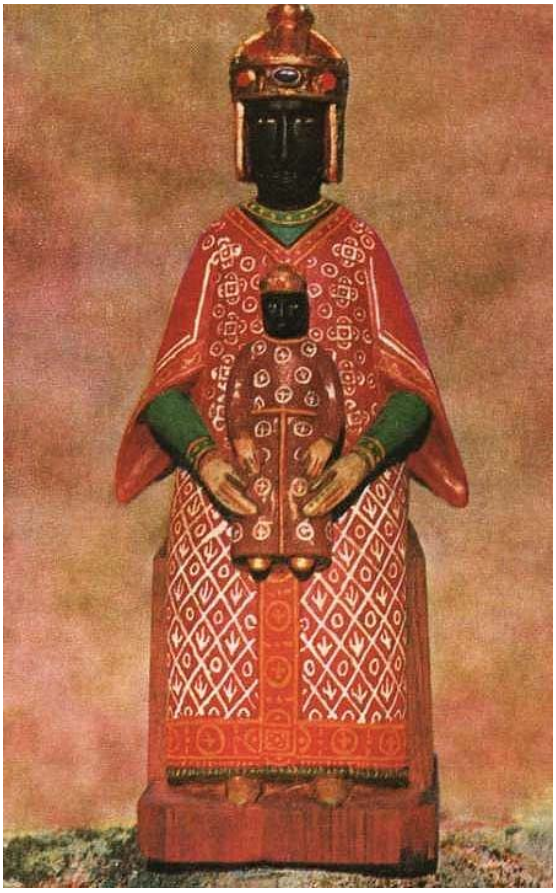
入り口まで行くと、工事中の様で回廊には迂回して行くようにと簡単な地図が貼られていた。
その通り行ったつもりだが、道に迷い、回廊入り口に付いたのは、１２時丁度。あと３０分しかない。
【回廊】の周歩廊の外側のアーチは，灰色，赤，白の三色の組合せで統一され、エキゾティックな美しさをかもしだしている**(上右図)**。
コルドバのメスキータを強く思い起こさせるものがある。

ミシュラン・グリーンにある「大修道院長の笏杖をめぐる争い」を描写した柱頭**(左図)**がなかなか見つけられず、一組（父親と２０歳位の娘）だけいた訪問者に教わって写真をとる。
回廊に接続している**宝物館**に入り、黒マリアを探すが見あたらず焦る。
実は、これは私の早とちりで、ミシュランには、１６世紀に黒マリアが着ていた外套があると書いてあったのだが、焦っている私は、その黒マリアという文字だけ見ていたのであった。客は私一人。

その内、１２時半近くになり、あわてて階段を駆け下りてみると、入り口の鉄の扉が閉まっていた。閉じこめられたのである。扉を強く叩いて、男にやっと明けて貰った。男は他にもう居ないかと尋ねて閉じこめたことに恐縮した様子もない所を見ると度々こんな事が有るのかな等と思った。

回廊入り口近くから**【大聖堂】**へ入る小さな扉があり、そこから入る。

中は大修理工事中であった。内部も、変更が有ったようで、配置その他ミシュランにある平面図とは違っているようで、今もってはっきりしないところがある。



壁際に祭壇があり（暫定的？）、そこに、お目当ての【黒マリア】（上左図）があった。その姿は誠に異様なものである。刺繍で飾られた外套をすっぽりかぶり、腹の当たりの穴から子供のキリストがちょこんと顔を出しているのである。マリアもキリストも顔は真っ黒である。

実は、この黒マリアは二代目で、初代（上右図。後述の絵葉書の絵）はフランス革命の際焼かれてしまって今は存在しない。この初代は、十字軍に参加した聖王ルイによって東方から持ち帰られたものだという。幸いなことに革命の少し前、１７７７年に火山学者フォージャ・ド・サン・フォンによってこの黒マリアは模写と詳細な解析記録がされている。それによると、その姿はさらに異様なものであった。

『漆黒に塗られた異様に長い顔、その中で光っている猛禽類のような小さく鋭い目、ランプの傘のようにひろがつたスカートからカンガルーの子供のように首だけ出している嬰児キリスト。この像を火中に投じる時、ジャコバン党員たちは口々に「エジプト女を焼き殺せ」と叫んだという事だが、実際、一見してこの像は遠い異国からやってきた異教の女神像という印象を与えずにはいないのである。』

（田中仁彦「黒マリアの謎」　岩波書店 1993　本書にそのスケッチがある）

フォージヤは、この像がイシス像であると確信していたようである。

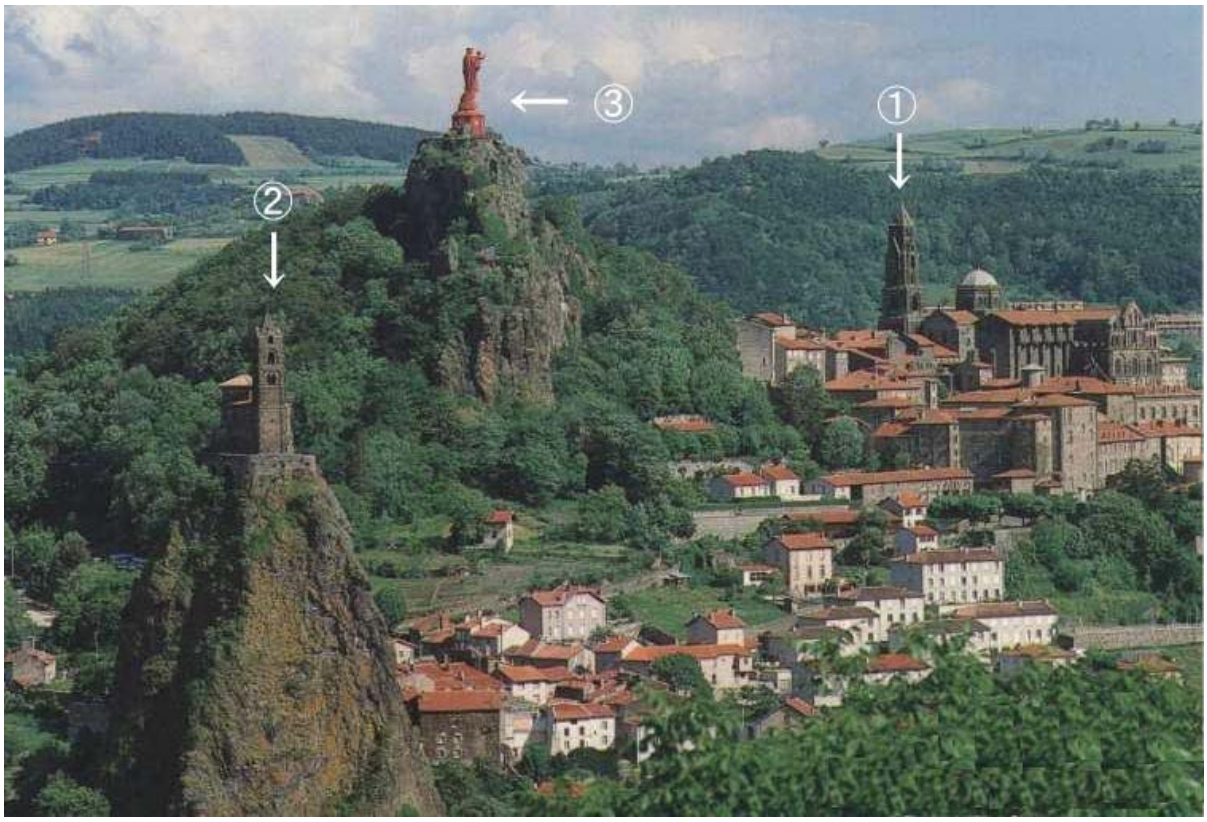
ノートル・ダーム（= Our Lady ）とは、この黒マリアの事なのであった。

この初代と比べると、二代目の表情はおだやかである。

黒マリアの写真を撮り、祭壇左手の扉を開いて細長い礼拝堂に入り、これ又**異様な目つきの鋭い黒マリア**を発見する（これについてはﾐｼｭﾗﾝには記載がない）。

これこそ初代のコピーではないか？しかしここでは狂信的に見える老女がそばで拝んでいて、その気迫に押されて写真を撮れなかったのが残念だった。

後で**絵葉書**を探していて解ったことだが、ﾌｫｰｼﾞｬの記録に基づいた像が彫刻家 Besset によつて作られているらしい（その姿が絵はがきにまでなっているのである：上右図）。今は、この像が礼拝堂に有ったのではないかと想像している。



ホテルに帰り一休み、午後２時開門を待って、車で**【サン・ミシェル・デギュイーユ】**（Chapelle St Michel d'Aiguilhe とんがり岩のサン・ミシェルの意）に向かう。道ばたに車を止め、２６８段の急階段を休み休み登る。

（上図の②。①は大聖堂。③は後述のコルネイユ岩）

一つの巨大な溶岩の塊（岩の大きさは高さ８０ｍ、直径５７ｍ）の上に建つサン・ミシェル聖堂。これは、９６２年に聖ミシェルを記念して小聖堂が建立され、１２世紀中頃になって、回廊と後陣が造られて今日の姿になったのだ。

聖堂内部は、１０ｍ四方にも満たない。天井には１０世紀のカロリング王朝時代のフレスコ画があるが、あまりはっきり見えない。

祭室の傍らに小さな宝物庫があって、1955 年に祭壇の下から発見された１１世紀の十字架のキリスト像など収納されている。カタルーニャ美術館にある Battlo のキリストに似ているように思ったがこちらの方が、小さく素朴である。

とんがり岩の上から、大聖堂、もう一つのとんがり岩（コルネイユ岩、＜Rocher Corneille＞ ：上にピンクの大マリア像＜Notre-Dame de France＞が立つ）など良い眺望が得られた。

車で**【クロザティエ博物館】**（Musée Crozatier）に向かう。

ここは４階建ての大きな博物館である。タペストリーや、この地方の名産手織のレース等も沢山あったが、私が一番興味を引いたのは、展示面積は狭いのだが、**目つきの鋭い黒マリア**を多数集めてあったことである。２０体もあったろうか。大きさは高さ１０ｃｍから３０ｃｍ程度のものばかりであったが、いずれも初代の黒マリアそっくりの風貌である。しかも最後の作品は１９世紀になってからの物であるらしい。これらは大きさから言って家庭で祀られていた物も多かったのではないか。これは初代の黒マリアへの愛着がずっと続いていたことを示す宗教民族学的に重要な資料であると思わ

れる。

ホテルに戻り、今日見たいろいろなものを頭の中で整理（ここで、Libretto のデータが役に立った）したりした後、ホテルの食堂で夕食をとる。
メニュー（サラダ、ステーキ、デザート、コーヒー）に、**【ワイン】**は **Côtes du Rohne** 赤の ＡＯＣ をピシェ（500 CC）で貰う。ＡＯＣワインをピシェで呑むというのは初めての経験であった。
味は、まあまあというものだった。
ミシュラン・レッドによるとワインの主要生産地は次の８地方である。
１）アルザス　２）ボルドー　３）ブルゴーニュ
４）ボージョレー（ここではブルゴーニュと分けている。料理との相性などが異なるためだろう）
５）シャンパーニュ　６）Côtes du Rohne（ローヌ丘陵）
７）ラングドッグ、ルシヨン（昨年大分お世話になった）
８）Val de Loire（ロワール渓谷）
ローヌ丘陵は、リヨンの南からアヴィニョンのあたりまでローヌ川沿いに広がる地域であり、フランスで最も古くから（紀元前数世紀）ワインを作っていた地域である。
今回は、以上の内では、２、３、４、６、８を味わうことになる予定である。

【５月２３日（金）】

３．２シェーズ・ディユー（La Chaise-Dieu）

朝、ホテル近くの**サン・ローレン教会**（St-Laurent）を散歩がてら訪れた後出発、**シェーズ・ディユー**（La Chaise-Dieu）に向かう。
Ｄ９０６を快調に走っていると、なんだか車が全くと言っていいほど減ってきて、それまで標識に出ていた行き先から Chaise-Dieu と言う文字が消えている（書いて有る上に黒いテープを貼ってある）。おかしいなと思って走っていると突然通行止めになる。大工事中らしい。工事の親方らしい男を掴まえて聞くが、英語は通じない。しかしどうも工事区間は長く、一寸迂回というわけには行かないらしいことだけは解った。

ミシュラン地図帳を頼りに大迂回をする事とした。１０ｋｍばかり迂回してＤ９０６に戻り、目的地に到着することが出来た。それでも、**【サン・ロベール大修道院教会】**（St Robert’s Abbey Church）の開門（午前１０時）には間に合った。
シェーズ・ディユーとは、ラテン語の Casa Dei = the House of God 即ち「神の家」の意である。１０４３年聖ロベールによって創建され、その後ここの出身の僧が後、アヴィニヨンの教皇クレメンスⅥ世（1342-52）になった時にほぼ今の形になった。（ペストの大流行期［1347-52］に重なる）

開門の時間には、数組の参詣客が待っていた。

身廊と内陣は内陣仕切りで区切られている。お目当ては内陣だが、そこは有料になっている。先ず内陣の壁の内側全面に架けられた**【タペストリー】（上左図**、１６世紀初期）を鑑賞する。２５枚もの大きなタペストリーは見事なものである。題材は、新・旧約聖書からとったものだが、見ていてどうも解らない。

後で、求めた小冊子を読むと、各タペストリーが**トリプティック**（３面鏡のように折り畳める３面の絵）形式をとっていて（この事がミシュランには書いてない）、中央の大きい部分が新訳から、左右の部分が旧約からとっているのである。例えば、誘惑のトリプティックと称せられる物は、中央に悪魔によるキリストの誘惑、左にイブによるアダムの誘惑、右にエサウの誘惑が一枚のタペストリーの中に描かれているのである(上左図がそれである)。

この事が呑み込めていないものだから、頭が混乱して（そうでなくても私の聖書に関する知識は誠にお粗末）解らなくなったのだと思う。

これらのタペストリーに囲まれて、床にクレメンスⅥ世の墓がある。

しかし、私が今回の旅行で、シェーズ・ディユーを選んだ（ここは幹線ルートから離れていて不便）理由は、この内陣の壁の外側に描いてある**【死の舞踏】**（Danse macabre）**（上右図）**のフレスコを見たかったからであった。

高さ２ｍ、長さ２６ｍに及ぶ３面りのフレスコ（１５世紀）は色は可成り褪せているが良く残っている。

教皇、皇帝、枢機卿などなどの間に一人づつ死者が割り込んでいて死へ誘っているのである。いくら偉くても死を免れることは出来ない（当たり前と言えば当たり前だが）と言うことを皮肉を込めて描写しているのだ。

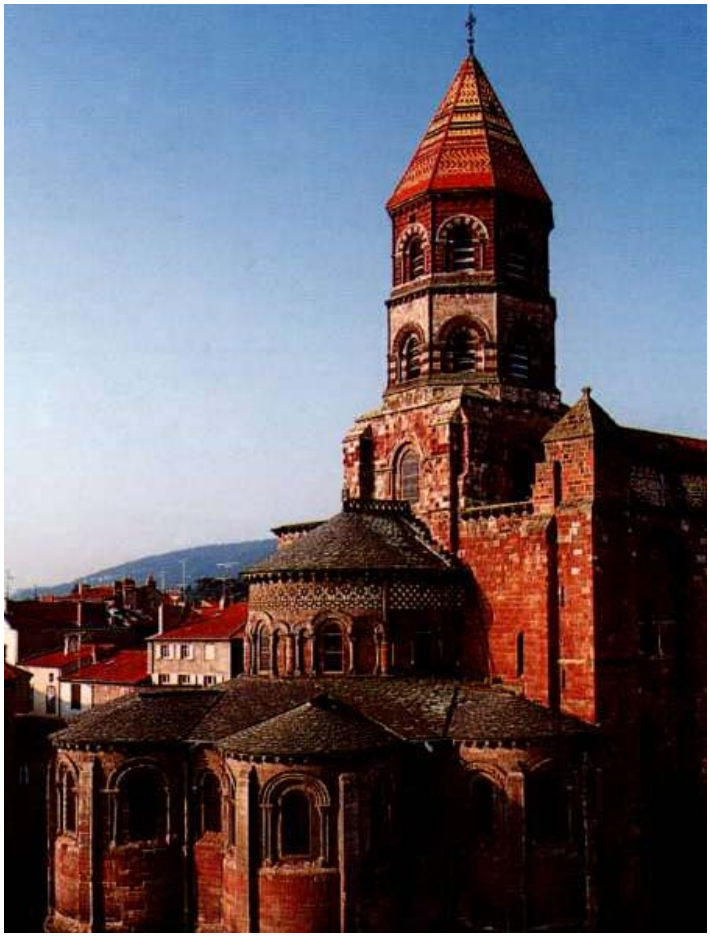
死の舞踏の現れた背景やその意味等については、エミール・マール「ヨーロッパのキリスト教美術」岩波文庫　に詳しい。

『生きたいという願望をなにものも充分には満たしてくれないし、死を免れる事も不可能である。この人間の本性に内在する恐ろしい矛盾が、これ以上の迫力をもって提示されたことはかってなかった』（同書）

回廊を見た後、次の目的地ブリウッドに向かう。

３．３　ブリウッド（Brioude）

地図の上からはシェーズ・ディユーからブリウッドへ、番号の異なる田舎道を選びながら走らねばならない。それで一寸心配していたが、標識に Brioude が出ていて、比較的簡単に到着することが出来た。



【サン・ジュリアン教会】（Basilique St-Julien）は、オーヴェルニュ最大のロマネスク教会（長さ７４．１ｍ）であり、見るべき物も多い。**（上左図 ）**

ここには沢山の良い柱頭が有ることで有名である。そばに車を止め、Libretto を取り出し、Zodiaque 叢書の該当する図を一通り復習してから教会に入る。

柱頭以外で興味を引いたのは、**レプラ姿のキリスト磔刑像（上右図**、１４世紀）、これはかって近くにあったレプラ病院にあったものだという。昔レプラに苦しんでいた人々がどんな思いでこのキリスト像に接していたのであろうか？

又その近くに、出産間近でお腹の大きいマリアの像（１４世紀）があった。腕枕で横たわっている表現がユニークで面白い。

柱頭は立派な物が多い。双眼鏡で覗いては、望遠レンズ＋フラッシュで写真を可成り撮ったが、帰国後出来上がりをみて、がっかり。一応のピントで撮れてはいるがコントラストが付かず気の抜けた表現になってしまい、ゾデイアックの写真に及ばない事はなはだしい。

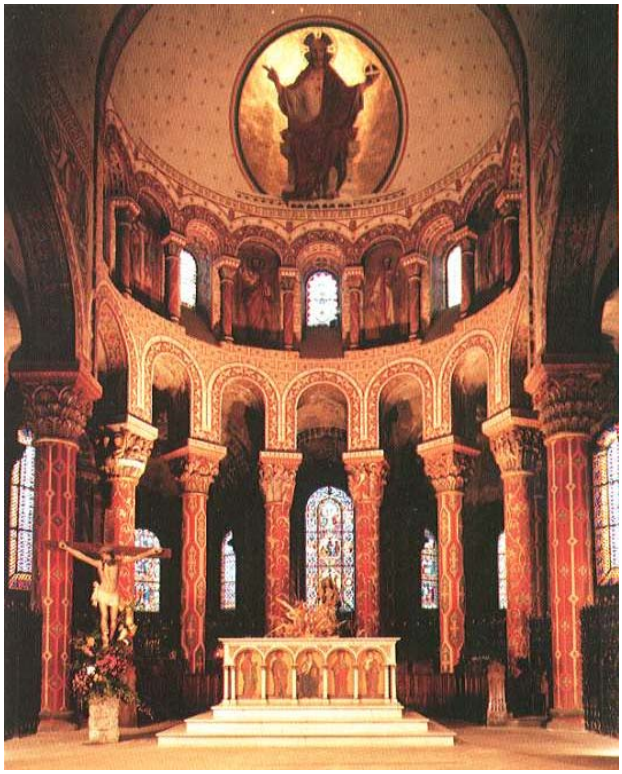
クリプトにある１２世紀のフレスコ（天井にある栄光のキリストなど）の色彩は鮮やかすぎるほどである。（これは色彩表現も可成り良い写真が撮れた）

教会東端近くに流行っているレストランがあり、入ってみた。

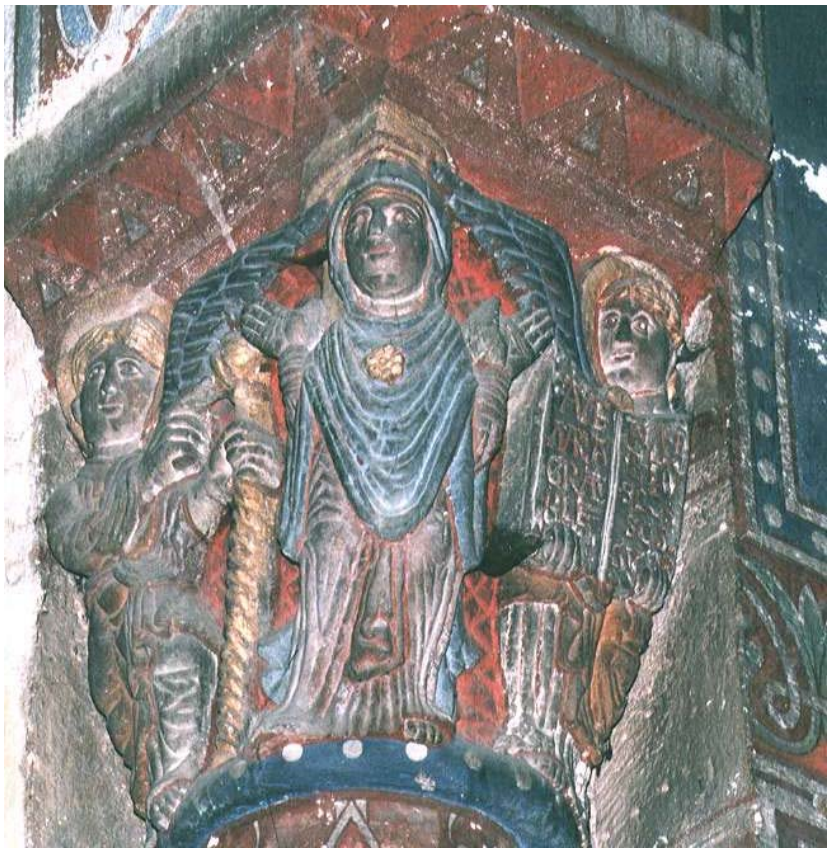
肉料理に、**【ワイン】**は、**Beaujolais-Villages** の ＡＯＣ 1995　赤、ハーフボトルにした。ネゴシアンは、Henry Fessy（有名では無い）である。

『ボージョレ地区のＡ．Ｏ．Ｃには次の３つがある。
１）　ボージョレ（Beaujolais）
２）　ボージョレ・シューペリュール（Beoujolais Superieurs）
３）　ボージョレ・ヴィラージュ（Beaujolais-Villages）
１のボージョレはボージョレ地区全体から産出される白と赤のワインで、ランクは一番低い。熟成が早く，若飲みできるワインとして人気があり、ボージョレ地区の南部の平坦地で大量に生産され，樽出しやカラーフ・ワインとしてレストランや街の酒屋で売られている。
２は１のワインのうち，好天に恵まれた年の最低アルコール度が赤 10 度、白 10.5 度以上あったものに適用される。
３はボージョレ地区の北部にあるボージョレ･ヴィラージュ地帯と呼ばれる４０の村から産出するやや上質のワインに適用される。最低アルコール含有量は，赤とロゼは 10 度，白は 10.5 度，１ｈａ当たりの生産制限量は白が
5500 l，赤とロゼが 5000 l となっている（年間生産量 3 万 5000 kl）。』（「新版　ワインの知識とサービス」）
今回私の呑んだのは、この３であり、これはリヨンで呑んだクリュのＡＯＣより一つランクの低い物である。料理に良く合いなかなかの物だった。
適当に酔いを醒まし、イソワールに向かう。

３．４　イソワール（Issoire）



ブリウッドから少し走って高速（Ａ７５）に入り一走りするとイソワールである。**【サン・オストルモワンヌ教会】**（St Austremoine's Abbey Church ）の東端の前が可成り広い広場になっており、そこに駐車する。そこから見る教会の建物は見事で美しい。**（上左図）**
中にはいると、その**色彩の豊富さ**に圧倒される**（上右図）**。円柱，柱頭，すべてが極彩色に塗られ、かつ円柱は様々な文様で飾られている。ただし現在の彩色は１９世紀の塗り直しである。彩色柱頭の表現（特に最後の晩餐）は可成りリアリズムに近づいている。尚、ここの**柱頭**の写真は旨く撮れていた。**（次頁図）**



内陣の半ドームに描かれた栄光のキリストも印象深いものがある。

ミシュラン・レツドの市街地図を頼りに〈i〉を訪れる。

大きな市街地図、ホテルリストを貰った後、ここからクレルモン・フェランにかけての地域にある黒マリアに関係する情報を得ようとしたが、女性職員は小さな所の情報は知らないようであった。

そこで、私は Colamine-sous-Vodable（ヴォダブル村・大字コラミンと言ったところか）の教会の「尊厳のマリア」を見たいのだが、希望者は M . Phalip 氏へ連絡希望とあるミシュランの記述を上記女性に説明し、彼が英語が理解できないかも知れないから私に変わって電話して貰いたいと依頼した。

この方式は、今回の旅行を通して数回実行した。その状況は、各々そこのところで触れることにする。

ここから、２回ほど電話を掛けて貰ったが氏は不在だった。

あと彼女たち（実は２人）は話し好きで、資料は沢山貰ったが、大分時間を取られてしまった。

それで今日は、この地に泊まることにした。明朝ホテルの主人に又電話を掛けて貰うつもりで、英語が出来ると言う条件（リストに書いてある）のホテルを選んだ。ＳＮＦ（国鉄）駅前のレストラン・ホテル　Le Parc（２星）である。

（ミシュラン・レッドでは、フォーク一つのレストランで泊まることもできるとしてある。）

しかし、駅へ入る道路を間違え、地図から離れた所に迷い込んでしまった。フランス人は実に親切である。そこで困って道を尋ねると、５０がらみの男は、どこかに走っていったと思うと彼の車で戻ってきて、自分の車に付いてきなさいと身振りで言うのである。彼の車の先導で難なく駅前に到着した。彼の親切に大感謝。

夕食は、当然このレストランである。ここの親父は話し好きで、前に泊まった日本人からの手紙を見せてくれたりした。

その日本人は、大阪方面の人だったが、彼の撮ったイソワール教会内の素晴らしい写真が添えられていた。パノラマ写真なのだが、非常な広角（私のは２４ｍｍだが、もっと広角）で、且つ全面に亘って照明されている写真である。

マルチ・フラッシュを旨く使わないととても撮れないものである。私が買った絵はがきなどではとてもここまでの角度をカバーしていない。

かなりのマニアの人なのだろう。そう言えば、どこかでそんな話（イソワールか何処かは全く記憶にないが）を読んだ気がするのだ思い出せない。

料理はフォワグラと兎にし、ワインは親父の薦めで　Saint-Pourçain のＡＯＶＤＱＳ　1994 ハーフボトルにした。

値段は、このクラスとしては７０ＦＲと結構なものである。

ラベルを見ると、Chene（楢？）の樽中で育成とわざわざ書いて有る。確かに香りが非常に強く癖

がある。好き嫌いの出るワインだと思うが、親父の薦め通り私の料理には良く合ったように思う。

一寸古いが１９８９年度におけるフランスにおけるワインの生産内容は
『Ａ．Ｏ．Ｃ．（原産地統制名称）ワイン　２３０万ｋｌ
Ａ．Ｏ．Ｖ．Ｄ．Ｑ．Ｓ．（原産地名称上質指定ワイン）　７万ｋｌ
Ｖｉｎｓ ｄｅ ｐａｙｓ（地酒）　１０８万ｋｌ
Ｖｉｎｓ ｄｅ ｔａｂｌｅ（日常消費用ワイン）　１７６万ｋｌ』
である。この表で上に行くほどランクが高くなる。
ＡＯＶＤＱＳクラスのものが、殆どＡＯＣの方にランク・アップしてしまい今や貴重品みたいになってしまっている状況が解る。
さて、Saint-Pourçain とは、ミシュラン・グリーンに出ていて、厳密には Saint-Pourçain-sur-Sioule でヴィシー（Vichy）とムーラン（Moulins：オーヴェルニュの北端に近い大きな町。三日後２６日に訪れる予定）との中間あたりにあるシウル川（Sioule）添いの小さな市場町であり、フランスにおける最も古い葡萄畑地域の一つ（キリスト教時代の一寸前）である。量より質を重視してやっているらしいが、量はかなり減っているらしい。
それでも、町にワイン博物館があったりして歴史の古さを誇っている。こういう旅の中からの印象だから、ピントはずれも多いだろうが、こんな癖のあるワインを作っていたのでは、好事家には喜ばれるかも知れないが、大きな市場は掴め無いのではないだろうか。
しかし、こういう地方の特徴あるワインは、旅をしなければ味わえないものだろう。ここでレストランの親父に感謝。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第４報　　敏翁

【５月２４日（土）】

３．５　ベス・アン・シャンデス（Besse-en-Chandesse)

朝、朝食の際、ホテルの親父に Colamine-sous-Vodable の Ｍ．Phalip 氏にに電話を架けてもらう。氏は忙しいらしく、午後３時ならＯＫだという。３時に教会の墓地（回りがそうなっているらしい）で合うことにした。
親父は、しきりに 向こうでは small money を渡せよと言っていた。
さて、しかしこれで本日の計画は大変更と言うことになった。
位置関係（そんなに厳密な物ではない）を下図に示す。

◎Clermont-Ferrand
○Orcival
○St-Nectaire
○Besse-e-C
◎ Issoire
● Vassiviere
○Ronzières
○Colamin-s-V

Vassiviere（相当な山の中らしい）に黒マリアがあり、夏の間を除いてベス・アン・シャンデスのサン・タンドレ教会に預けてあるらしい。これは是非見たい。

それで、計画は、Issoire ---> Besse-e-C ---> St-Nectaire ---> Orcival ---> **Ronzières**（ここにもマリア様がいる）

---> Colamin-s-V ---> Clermont-Ferrannd で泊まると言うことにした。

【ベス・アン・シャンデス】の手前でガソリンを入れる。セルフサービスで 6.28 Fr/L。 と言うことは 約 140 ¥/L と日本に比べて非常に高い。

町中に入り、**【サン・タンドレ教会】**（Église St Andre）の前に駐車する。教会全体が鉄骨で囲まれ大修理工事中であった。入り口が何処か解らずそばにいた男に尋ねると、日本人が珍しいらしく、広場に居た杖をついた老人を呼び寄せる。老人は私に握手を求め、かって日本に行ったことがあると言うようなことを言い出した（仏語なので全部は解らない）。彼はコックだったそうだが、１７歳の時マルセイユから日本までコックとして行ったのだそうである。

多分、老人は始終昔話にこの事を語っていたのであろう。それで先ほどの男が覚えていて老人を呼んだのだと思う。私が、**【Vierge Noire de Vassiviere 】**（ヴァシヴィエールの黒マリア、此処ぐらいフランス語を使わないと）が見たいのですというと、彼は杖をつきながら教会内の一番奥、祭壇の裏にあるそれの前まで案内してくれた。

そこでも何か説明をしてくれたが、それは全然解らず。握手して別れる。

見ると、これはまさしく黒マリア（左図）で、姿、形はル・ピュイの２代目に非常によく似ている。キリストがマントから首を出しているところまでは同じなのだが、違いはそのキリストがマントから右手の先（これも真っ黒）を一寸出しているところである。容貌は、目つきがル・ピュイの２代目よりやや鋭いように感じた。尚、「黒マリアの秘密」によるとこの黒マリアも２代目だそうである。

急いで、車に戻り、カメラを持ってきてフラッシュ撮影した。

３．６　オルシヴァル（Orcival）

ここより、**サン・ネクテール**（St-Nectaire）に向かう。ここの参観の条件は５月ははっきりしないので、行ってみるしかない。男約１時間のドライブで１１時頃到着。<i>の若いに聞いてみると、本日は午後２時半～４時半の間だけ参観できるのだという。

これでは諦める他はない。ここからオルシヴァルまでの所要時間を尋ねると近いよ、３０分も見れば充分だろうと言う。フランスの若い男の感覚ではそう捉えられているらしい。

ここからオルシヴァルに向けて山道を走る。眺望が開けて気持ちの良いドライブだった。約４０分で**【オルシヴァル】**に到着。これは日本にいるときより大分飛ばしている積もり（まっすぐな道では田舎道でも時速１１０ｋｍ程度は出している）だが、まだフランス人並にはなっていないことを示している。

ここの**【ノートル・ダム教会】**の見物は、有名な**【玉座のマリア】（前頁図）**である。

聖母子像であるが、表情はまことに端正であり黒マリアが持っている何かどろどろしたものは全くない。同じ聖母子像でもこれほど異なる表現が同一地域の中に存在していると言うことは誠に興味深い事である。

３．７　ロンジエール（Ronzière）、コラミン（Colamin-sous-Vodable）

ここから逆戻りで、コラミンへ向かう。時間の余裕は大分ありそうなので隣村（？）のロンジエールに寄ってからコラミンに行くことにした。

【ロンジエールの教会】にも**【尊厳のマリア】**（Vierge en glorire）があるからである。

教会は、丘の上にあり、その下に車を止めて２０ｍほど坂道を登った所に小さな教会がある。祭壇左の鉄格子の奥に安置してある聖母子像がそれである。

木彫りに彩色の良くあるタイプのものだが、表情はマリアもキリストも大きな目玉をぎょろりと光らせている。「黒マリアの秘密」によるとこの聖母子像も２代目だそうだ。

鉄格子の間からフラッシュ撮影する。

教会のそばは展望台になっていて、眺めも良い。案内図によってコラミンの位置も確定でき、教会も遠望できた。車で５分程度の所のようである。

【コラミン】の教会のそばまで行ってから（２時半には到着）、まわりを少し走り回って観察したりはしたが、回りに人家はほとんどなく、畑と放牧場が広がっていた。

コラミン・スウ・ヴォダブル　の聖母子像

５０分頃、車で、一人の初老の少し気むずかしげな男が現れた。足が少し悪いようだが、教会への草道を歩いて行く。約束した人とは違うように思ったが、私も教会敷地（墓地）に入っていった。男は教会入り口で、閉まっていると言って腕を拡げて見せた。男はぶらりと訪れたものらしい。彼は英語が分かるようなので、私は特別なアポイントを取ってあるので、もうすぐ鍵を持った人が現れる筈だと伝える。彼はドイツ人である。やがて老人夫妻が孫娘（？）二人と現れる。彼らも「ぶらり」組であるようだ。

１０分ほど遅れて、年格好５０歳位の快活な男が現れ、私と握手を交わす。

やがて、説明をし始めるが、実に詳細で且つフランス語しか話さない。先ほどのドイツ人は仏語も堪能なようで、男と自由に質疑が出来、時々私に英語で要約してくれる。説明の中では墓地に立っ

ている「疣」の沢山ついた高さ２．５ｍほどの十字架に興味が引かれた。それは、この地方に数多くある物で、ペスト大流行の際、効き目があるとされたものらしい。
暫く説明が有った後、漸く教会内に入る。小さな教会だが中は充実していた。貰った資料によると、この教会が文献に最初に現れたのは、１０世紀の事だという。内陣は１１世紀の終わり頃、身廊は１２世紀の中頃作られたが、建物の完成は１７～１８世紀らしい。フランス革命の後、衰退してしまったが、1977 年、保存委員会が設立され、1979 年には、７体の彩色像が発見され、直ちに全部「文化財指定」（clasée Monuments Historiques）されたのだと言う。
その中に、お目当ての**【尊厳のマリア】**（１２世紀）も含まれているのである。内陣及びその周辺にその７体が有るので、充実感があるのである。(左図がその像だと思う)

尊厳のマリアは発見されるまで、１８世紀の中頃以降壁に塗り込められて居たのだという。
この尊厳のマリアも木彫り彩色の聖母子像だが、マリア、キリスト共に誠実、素直な性格が滲み出るような良い表情をしている。オルシヴァルのマリアと比べてみると、彼女は誠実且つ気品に満ちた表情を持っており、ここのマリアは農村のどこにでも居る誠実な美しい若い女性と言ったところだろうか。
絵はがき５枚で、small money 30 Fr を置いた。

ドイツ人が、男がもし時間があれば男の家に寄らないかと言っているがどうかと意外な事を言う。そんな経験は滅多に出来ないので、即座にＯＫする。
そこから、車で３～４分、男の車をドイツ人の車と私の車が追う。
男の家の前の小さな広場にも、前述の疣疣の十字架が立っていた。

家では、途中から男の奥さんも加わり、ビールなどご馳走になる。ドイツ人は、かなり上手に仏語を操っているが、私はうまく会話に入れない。と言うのは、男は英語が全然駄目で、又ドイツ人の英語力は、私から見てもかなり低いので、私の英語を男に旨く伝えられない事に原因の大部分がある。
その内、名刺を交換と言うことになる。男は葉書大の名刺をくれる。
ドイツ人が「おう、あなたは偉いひとなのだ！」という。説明を求めると名刺の Maire de Vodable とは ボダブル村（町）の村（町）長と言う意味だという。名刺には、役場（Mairie）と自宅の電話番号が記されていた。
（Mairie が役場だとは、後で辞書でわかった。この事が後で重要な働きをすることになる）
自宅の住所が **La Croix de Nazareth** （ナザレの十字架）となってるところをみると、あの疣疣の十字架はそう呼ばれているのかもしれない。ミシュランに有った連絡の為の電話番号は自宅のものだった。
ドイツ人の名刺の職名 Rechtsanwalt は、lawyer（弁護士）だった。
私の名刺から、私の職業（と言っても昔のだが）を半導体、集積回路関係の技術者だったと言っても、あまりイメージは浮かばないようだった。しかしその村長さんの腕には、集積回路技術の精華であるデジタル・液晶時計がはめられていたのである。

村長さんは、この地域の観光開発にも熱心なようで、今日説明役を務めたのもその為だろう。又この地域 Pay du Dauphine d'Auvergne の観光ルートの道路標識を沢山見たが、これらも彼の努力の一端かも知れない。
私の持っているミシュランを見て、インデックスで Dauphine d'Auvergne を探していたが、見あたらずご不満の様子だった。しかしこれは少し考えれば当然で、Dauphine 地方という大きな地域が、ローヌ川の東岸にある。それと紛らわしいこの命名には無理が有るのではないか。

最後に、誤解を避けるために一言触れるが、私が苦労したのは５月に訪れようとしたからで、７，８月は毎日開いているようである。
ここに大分長居をしてしまったので、ここからクレルモン・フェランまで走ってホテルを見つける

事にした。

３．８　クレルモン・フェラン（Clermont-Ferrand）

イソワールのあたりで高速に入れば、クレルモンはすぐである。近づくと黒い大聖堂が印象的である。しかしここは大都市で、なかなか全体を把握できない。走り回っている内に、ヴェルサンジェトリックスの銅像が見えた。ここが有名なジョード広場（Place de Jaude）と解り、車の止められる所を探す。やっと止められる所にたどり着いたが、何だか場末と言った感じの所だった。そこから人に聞きながら〈i〉に行ってみると、もう終わりになっていた。

がっかりして車の所まで戻って回りを良く見ると、すぐそばにホテルがある。
ミシュラン・レッドで見てみると載ってる（載っていないホテルも沢山ある）。

Hôtel Gallieni（２星）である。

受付の女性は、抜け目が無く、盛んに一番高い部屋（295Fr）を薦める。その一つ下の 270Fr の部屋にした。これでも結構良い部屋であった。

車をホテルの中、一階（階の表記は日本式にする）の奥が駐車場になっている。このホテルで気に入ったのは、ミニバーの冷却能力が高そうなことであった（殆ど冷えないミニバーが置いて有るところが多い）。コップなど容器を総動員して冷水を作り、明日はポカリをボトルに詰めよう。

気に入らなかったのは、ドイツ人の団体客で食堂も一杯になっており、片隅に特別テーブルを置いて食事をしたが、部屋の構造上そのあたりが「エコー・ルーム」の焦点になっているらしく、ドイツ人達のわめき声が拡大されて耳に響き、食事の雰囲気を台無しにしてしまったことである。ピシェの地酒にする。

【５月２５日（日）】

朝の散歩で、先ずジョード広場に行き、**【ヴェルサンジェトリックス】の銅像（左図）**に会う。Vercingetorix（塩野七生「ローマ人の物語」などでは、ヴェルチンジェトリツクスと表記している）は、オーヴェルニュ族（その中心地が現クレルモン）の部族長だったが、ガリア民族がはじめて大同団結して反ローマに起ったとされる紀元前五二年の一大蜂起のリーダーとなり、ここの近くの**【ジェルゴヴィア】**の戦いではカエサル軍に勝つ。

最終的には、アレシアの戦いで敗れ、捕虜となり、最終的にはローマで殺されたのである。

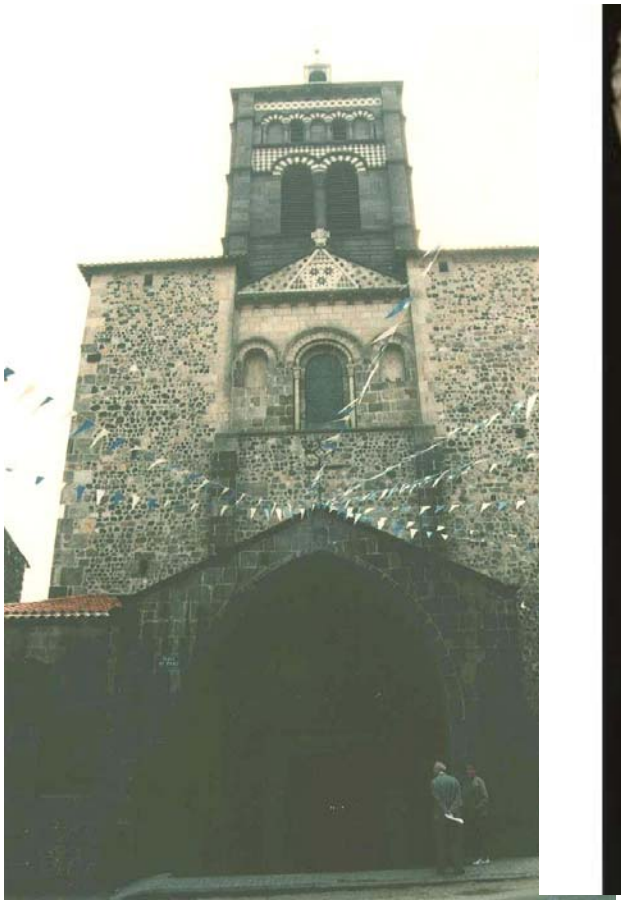
しかし彼は、纏まりにくいフランス人を最初に統合した英雄として、今でもフランス人たちに慕われているのである。

高い台の上の彼は疾走する馬上で短剣を振りかざしていた。台には「ジェルゴヴィアの英雄」と記されている。

そこから近い**【大聖堂】**に赴く。今日は日

曜日で午後しか開かない。実は昨日コラミンから大聖堂に直行する計画だったが、村長さん宅で時間をとられてしまい（得難い経験をして良かったと思ってはいるが）、中は見ることが出来なかった（午後６時半閉門）のである。

回りを回ってその黒い巨大な建物やその町並みとのマッチングをビデオ撮影する。



ホテルに戻り、魔法瓶にポカリスウェット粉末を冷水で溶かして詰め、【ノートル・ダーム・デュ・ポール教会】（Basilique de Notre-Dame-du-Port）に向かう。そばに駐車は難しく、結局３００m位離れたところに止め、又人に聞きながら到着する。

今日は特別な日なのだろうか。（選挙の日ではあるがそれは関係無いだろう）教会の回りは、白と水色の小さな三角旗がついた紐で満艦飾のようになっている。**（上左図）**

続々と人が集まって来、中ではミサが盛大に行われていた。

ここの**柱頭（上右図）**はオーヴェルニユで最も名高い物だが、ミサの最中にフラッシュを光らす訳にもいかず鑑賞だけにする。

クリプトには、小さいがこれも名高い**【黒マリア】（左図）**がある。ここには１３世紀以来有ることが知

られていて、今でも多数の巡礼者を引きつけているという。
　その姿は、ユニークである。マリアは上半身を右に倒して、右手に抱いているキリストに頬刷りをしているのである。木彫りのままだが、全体が真っ黒（鼻の頭とか、衣の襞とか黒が取れたところがあるが）である。
　母の子供への慈愛を表現したものだ。その目的では他の表現も開発されているようで、昨年カタロニアで見た乳を与えている聖母子像などもその一例である。黒マリアと柱頭の絵はがきを求めた。
　次に、アンボワーズの泉(Fontaine d'Amboise)に行って、そこから**【シャンテュルギュ台&】**(Plateau de Chanturgue) を眺めたいと思ったのだがどうしてもたどり着けない。諦めて直接そこに行くことにした。

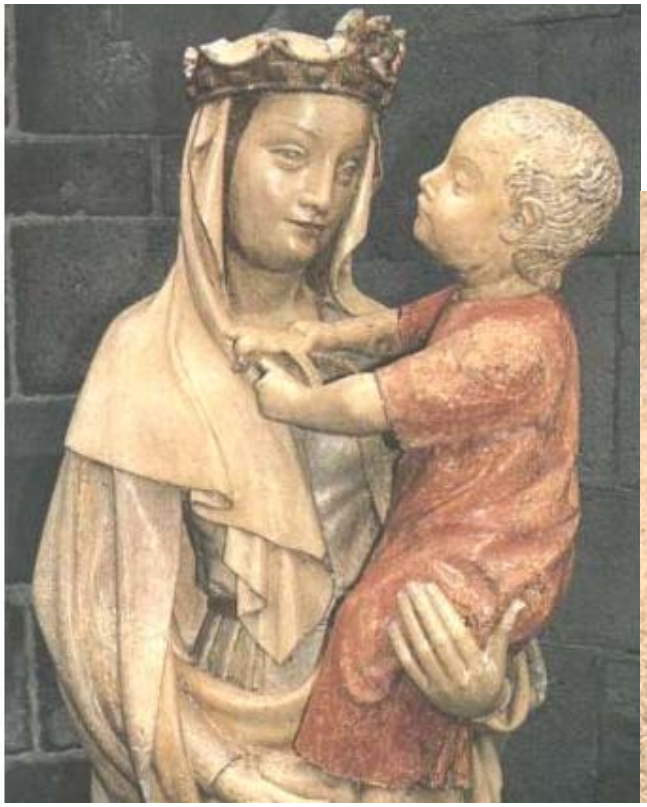
　&：この日本語表記には自信がない。今後も自信の無いときはこのマークを使うことにする。

　実はジェルゴヴィアが今の何処に当たるかについては、暫く前までは、クレルモンの南約７ｋｍにあるジェルゴヴィ台（Plateau de Gergovie）だとされていた。塩野七生さんの本でもそうなっている。
　しかし、最近の発掘調査研究の結果、より確からしいのはクレルモンの約２ｋｍ北のシャンテュルギュ台だという事になっているそうなのである。それでそこを眺めたり、行ってみたくなったのだ。

　だが、そこは観光地になっいるわけではなく、５，６回も道を尋ねてやっと到達した。しかし古い構造物の破片と思われる物が転がって居たりはするが、何の説明文も無く、訳が解らない。もう少し奥に入ってみようと細い道に強引に突っ込んだが、やがて車は全く進めなくなり、バックで戻ろうとしても周りの蔓草等がドアミラーに絡まってしまって大苦戦を強いられた。
　車を離れて歩き回れば、何か有るのかも知れないが、情報もなくそれは効率が悪すぎると考え直し、次の目的地リオンに向かうことにした。

３．９　リオン（Riom）からエブリュイユ（Ébreuil）まで

　幹線に出て北に十数ｋｍ走れば、**【リオン】**の町である。町は直径 5～600 ｍの自動車道で囲まれているが、それはかっては壁であり中世には栄えた町だったそうである。先ず中心にある**サン・タマブル教会**（St-Amable）の前に駐車する。ここも大変な人混みになつている。ミサが終わったのだろう。盛装したした人たち（男は殆どネクタイを締めている）が教会の前に集まっている。
１２～３（？）歳の男女が皆白無垢の盛装をしているのは何なのだろうか？その晴れがましい姿を父親が記念写真を撮っている光景も随所に見られた。
　集団全体が幸福感に溢れている光景は、眺めているだけでこちらの心も暖かくなるようだ。ミシュランによるとそのそばに〈i〉がある筈なのだが見あたらない。



ミシュラン・レッドの小さな地図を頼りに【ノートル・ダーム・デュ・マルシュレ&】（Notre-Dame-du-Marthuret）に赴く。小さな町なので簡単に到達できた。尚、念のため記すと、ミシュラン・グリーンの地図も大きさは同じだが、それには一方交通の情報が無く（レッドにはある）、それを頼りに町中のドライブは困難である。

ここには、聖母子像が二つある。より芸術的価値が高いとされるのは【小鳥を持つマリア】（Vierge à l'Oiseau）（上左図）である。小鳥はマリアに懐かれたキリストが片手に持っている。１４世紀のものものだそうだが、雰囲気は甘美ものものともいえるもので、ゴシックの極をいくものとして良いだろう。

もう一つは、【黒マリア】（上右図、１３～１４世紀）である。真っ黒だがその表情はやはりゴシックの優美さを持っている。

リオンの町の直ぐ西にモザ（ック）&（Mozac, Zodiaque 叢書では Mozat と表記されている）、南に３ｋｍの所にマルサ（Marsat）がある。

先ず【マルサ】に行ってみた。ここも小さな町だが道は曲がりくねっており、分かり難く標識も整備されていないが数回人に聞いてやっと教会に到着した。

この教会にも聖母子像が二つある。一つは普通の聖母子像で、このものの製作年代は（私には）わからないが、カタロニアで良く見られるロマネスク様式のものである。もう一つが【黒マリア】（左図）で、田中仁彦「黒マリアの謎」にも大きな写真が載っている（カバーの写真にも使ってい

る）ものである。
田中氏によるとこの聖母は『オーヴェルニュの数多い黒マリアの中でも最も美しい物の一つであるばかりでなく、6世紀のトゥールのグレゴワールがすでにこの地で聖母崇拝が行われていたことを記しているところからすれば、おそらく最も起源の古いものの一つだろうと思われるが、この黒マリアもまた、近くの都市リオンが9世紀にノルマン人の襲撃を受けたとき、この町を無事に守ったと言われている。』
確かに端正な表情をしているが、私には木彫り彩色像の衣服の鮮やかな赤と、マリア、キリストの顔、手足の真っ黒さのコントラストが印象的だった。

ここから**【モザック】**はすぐである。教会北口近くの広場に駐車、中に入ると仏、英、独語の説明文をお杓文字状の板に貼った物が数枚づつおいてあつた。英語のを持って見比べながらまわる。
身廊西端近くに１２世紀の柱頭が置いて有る。元は今はない周歩廊に有った物だという。見事な彫刻だが、特に「キリストの墓を囲む聖女たち」、「キリストの墓の前で居眠りをしている３人の軍人」や「ひざまずく男像柱」は名高い。じっくりフラッシュ撮影をする。その他高いところにある柱頭にも面白いものがいくつかあった。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第５報　　敏翁

ここから、リオンの町を大きく囲んでいる環状道路で町を迂回し、リオンの東方約１０ｋｍにある**【アンヌザト&】**（Ennezat）に向かった。農村の真ん中、道路沿いに可成り大きな教会があった。
この教会は、身廊、側廊、翼廊は１１世紀のロマネスク、それに大きな周歩廊と放射状祭室を１３世紀にゴシック様式でつけたものである。
ロマネスクの部分には、面白い柱頭がいくつか有ったが、それほどユニークな表現の物は見あたらなかった。
ゴシックの部分の見物は、祭室の中に描かれたフレスコ「３人の生きた男と３人の死者との出会い」（１４２０）である。
印象深い絵であるが、解説が見あたらず意味はわからない。

次の目的地、多分ここで泊まることになる筈の**【エブリュイユ】**（Ébreuil）に向かう。
先ずリオンの方へ戻り、高速（A71）に入り、北へ２５ｋｍほど走って高速を降りるとすぐエブリュイユの町である。
この町は、シウル川（Sioul）添いにある小さな町であるが、有名なシウル渓谷探勝の根拠地となるところであるらしい。
【サン・レジェ教会】（St Leger’s Church）のそばに駐車し、教会内に入る。ここは、フレスコが見たくて来たのだが、それは西端の階上席にあり、そこへの扉は閉ざされていた。ミシュランによるとフレスコを見たい者は、司祭館へ連絡の事とある。
又旅館の親父にやって貰おうと考え、先ず今晩世話になる筈の旅館を探す。この町に Logis de France のホテルが有るはず（ミシュラン・レッドには、この町そのものが出ていない）である。ここは小さな町で、道路添いに簡単に見つかる。しかし驚いたことに本日休業とある。昨年も、モン・ルイで Logis de France を頼りに夜町についたら本日休業で参ったことがあった。誠に困り者である。
これで、途方に暮れ、方策を考えようとそのそばの広場に車を止めると、何と 目の前に Mairie という看板を見つけた。これは昨日勉強したばかり、村（町）役場の意味である。
今日は日曜日だが、人が居るらしい。選挙の後始末でいるのか？

入っていって窮状を訴える。女性職員は、私の持っていたホテルリスト（政府観光局でもらったもの）を見て、この Lalizolle 村にも Logis de France があるじゃないか、ここから１０ｋｍほどだよと言う。ここも休みかもしれないと言うと、ちょっと離れたところにいる男に、番号を読み上げて電話を掛けさせる。やっているというので予約して貰う。

ついでに、教会のフレスコが見たいのだけれどと言うと、今日は日曜だから駄目だと言う。明朝ホテルの親父にやってもらおう。

Lalizolle 村に行くと、ホテルはここから４ｋｍの所にあると看板が出ていた。又４ｋｍ走り、**Croix des bois** と言うところで道路添いに同じ名前のホテルを見つける。周りに全く家もない寂しいところだ。

親父は英語が全然駄目らしい。奥さんの方が積極性は有るのだが、殆ど駄目。仏和辞典持参で食堂に行き、自家製テリーヌと鱒料理にする。**ワイン**は又 **St-Pourçain** の **ＡＯＶＤＱＳ** 1994 ハーフボトルになってしまった。

しかし今晩のは、イソワールのとは違って、ラベルに｢楢の樽中で育成｣などとは書いて無く、値段も 39Fr と安い（イソワールでは 70Fr）。味も極めて普通のものだった。

【５月２６日（月）】

朝､食事後､奥さんに何とか事情を理解して貰って(正確に理解したかどか確かめる事が出来ない)、教会の司祭館に電話をして貰う。話は付いたようなのだが、その内容がさっぱり解らない。奥さんも困って、娘（きっと学校で英語を習っているのだろう）に手助けを頼むが、娘も辞書を持ってうろうろするだけだった。

何とかなるだろうとエブリュイユの町に戻り教会に行ってみたが､やはり階上への扉は閉まっている。

又役場に頼もうと行ってみたが、まだ時間前なのか閉まっている。周りを見ると、向かいが郵便局で開いていた。そこに入っていって、窓口の男に誰か英語の出来る者は居ないかと尋ねる。幸いなことに結構出来る男が奥の方から出てきた。

事情を話して、司祭館に電話をして貰う。１０分待てとのことなので、教会に行って待つが２０分しても誰も来ない。戻って先の男に言うと、司祭館の扉のボタンを押したかと聞かれる。彼の説明も不足だったし、私も勘違いしていたのだ。司祭館の場所など知っているわけ無いだろうと言ってやると、彼は、はっとして（この国の人にとっては、感覚で解ることなのだろう。この変な日本人にはそれは無理と言うことが解ったのだと思う）、教会の西隣にあるよと教えてくれる。

行けば、簡単に解った。広い庭の奥に司祭館があり、サッシ塀の門の横に呼び鈴のボタンがある。それを押すと、待っていたのだろう。がっぷくの良い６０台半ばと言った感じの男が直ちに鍵を持ってにこやかに門の所までやって来た。今朝電話があったがあんたかと問いがあり、私が勘違いして遅れて申し訳なかったと謝る。この人は結構英語が話せるようだ。そう解っていれば自分で接触すれば良かったと思ったが後の祭りである。終わったら、鍵はボタンの横にある郵便受けに落としてくれれば良いとのこと。

感謝して、鍵を受け取り、やっと階上に入ることが出来た。

フレスコは、色は薄くなっているが、可成り鮮明に残っている。

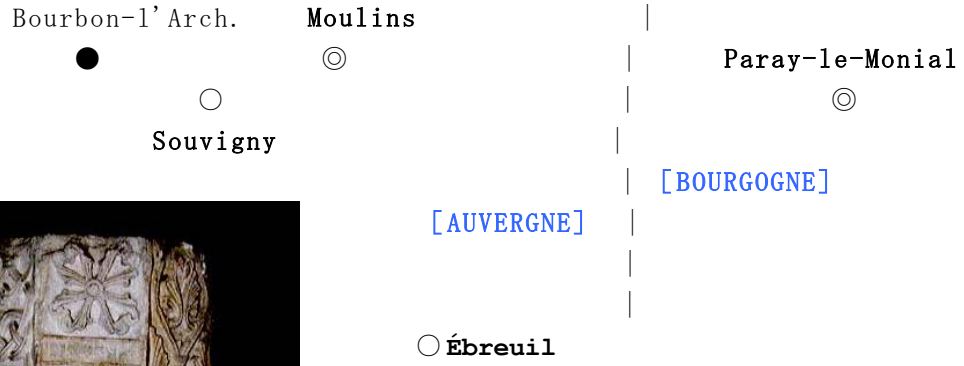
サン・ヴァレリ（Saint Valerie）の殉教の場面（次頁図）で執行人とそれに刀を渡す総督の姿が一番はっきり残っていて表現も面白い。

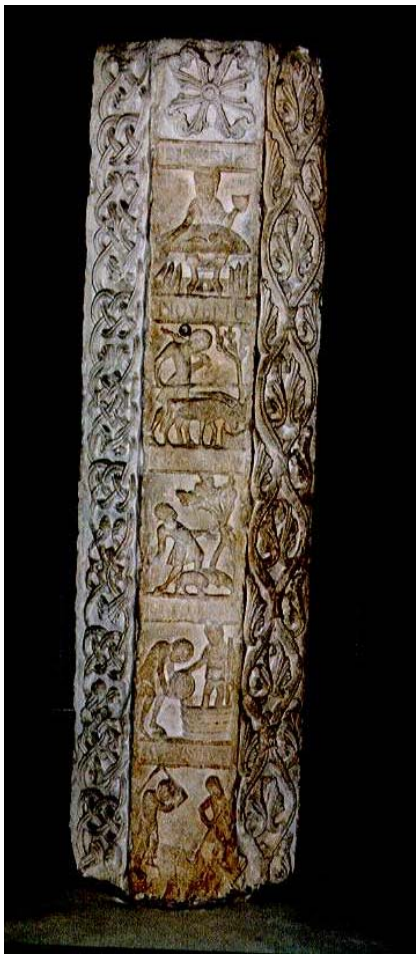
階上は狭く引きが取れず、全体は私の２４ｍｍレンズでも、旨く収まらない。何枚かフラッシュ撮影をする。

出来上がった写真を見ると、私にしてはまあまあの出来に撮れていた。

３．１０　スヴィニイ（Souvigny）、ムーラン（Moulins）

本日関係の所の位置関係を下図に示す。





ブルボン王朝の故地、ブルボン・ラルシャンボー(Bourbon-l'Archambault)の美術館にも、良い聖母子像があると知ったので見たいのだが、条件がはっきりしないところがある。ここは、私の考えているコースから一寸離れるので出来れば、スヴィニイの〈i〉で確認をしたい。

と言うわけで、スヴィニイの町で真っ先に〈i〉を探す。〈i〉は、教会の隣にある【博物館】（ Église-Musée St-Marc ）の受付を兼ねていた。

そこで、ブルボンの件を聞くと、電話で確認してくれ、本日は見学出来ないことが解った。確認して良かった。

時間の制限があるこの博物館にまず入る。

ここの見物は、１２世紀の**【暦柱】**（Colonne calendaire）である。

これは巨大（高さ 1.8m、重量 840KG）な白い石の八角柱であり、その２つの面に、各月の労働の有様と対応する１２宮（Zodiaque）の象徴が彫刻されている美しいものである。しかし、極端な浅彫りで古いこともあり、特に文字ははっきりしない。**（前頁図）**

フラッシュ撮影した写真を、帰国後画像処理で読んでみようとしたが、１１月らしい文字（NOVEMB これは初めからどうやら解る）以外は読めなかった。

教会は大きい（87m x 28m）。中に暫く居て、ミシュランの平面図と見比べながら見ていたが、対応がうまくつかない。どうやら頭が大分疲れてきたようだ。外に出て、前にあるバーに入り、ビール、サラダ、ハム、コーヒーで一休みする。

一休み後、**【ムーラン】**に向けて出発する。

ここの**【ノートル・ダム大聖堂】（左図）**も大修理中である。中には、鉄格子が組まれビニールシートがやたらに敷かれ、黒マリアにもビニールがすっぽり被されている。そのままの状態で、一応写真はとったが。

しかしこの教会の最大の見物は、別室（有料）にある**【トリプティック】（triptyque）（次頁図）**でミシュランも３星を与えている。トリプティックとは前にも一度説明したが、美術用語で３面鏡のように折り畳める３面の絵又は彫刻のことである。

客は私一人だったので、英語の解説をテープで流す。部屋は薄暗く、その一面に、トリプティックが畳まれた状態で飾ってある。白い面に灰色（grisaille）で受胎告知が描いてある。そのままの状態で数分間解説が続く。私がおかしいな、これが本当のトリプティックかなと不安になってきた頃、受付の男が（こちらの腹の内が解っているかのように)にやりと笑いながら、トリプティックを開く。巧みな演出と言えばそうも言える。絵は息を呑むような美しさである。

この作品は、１４９８年に完成したもので、フランスにおけるゴシック絵画の最後の傑作の一つと考えられているが、作者ははっきりしない。
中心の板の真ん中に聖母子像が描いてあるが、全体が素晴らしい色使いであり、甘美な雰囲気に満ちている。
この部屋には、他に２枚のトリプティックなどがある。
帰りに、大判の写真を求めた。

教会と広場を挟んで、**【博物館】**（Musée d'Art et d'Archeologie ）がある。ここはかなり大きく、展示の範囲も広いが、ここオーヴェルニュ最後の場所で極めて面白いものを見つけた。それは地下の展示場に有ったもので、説明も無く（他は説明文もかなりしっかりしていたよう＜仏語なので曖昧にしか言えないが＞であるが）、重要展示とされては居ないもののようだった。
それは、ガロ・ロマン時代にこの地方で作られた大きさ１０～２０ｃｍ程度の真っ白な女性の土偶のようなものである。ヌード姿のものも多かったが、注目すべきは一人又は二人の幼児を抱え乳を与えている母親像が多数有ったことである。
直感的にこれこそ、聖母子像の原型だと思った。それで、帰りに受付の男にあの展示に興味があるのだが、何故説明が無いのかと尋ねた。彼は今作成中だからと言いながらも、どこかからパンフレットを取り出して渡してくれた。
これはＡ５サイズ、８頁ばかりの小冊子である。あれは**【アリエールの白い土】**（de terre blanche de l'Allier）**の小像**と呼ばれている者らしい。
この冊子には、簡単な説明と詳細な作り方（具体的な実験検討の結果確定されたものとして検討者の名前まで記されていた）が書いて有った。驚くべき事は、型を作って作る量産技術になっていたらしいことである。
多分大量の需要（お守りに使った？）があったのだろう。
説明では、キリスト教が入る前に文盲の大衆に広く信仰されていたらしいことが記され、この伝統が中世につながっていったとさらりとかわしていた。（これは後で、辞書を引き引きやっと読んだ内容である）

私は、あの像が、聖母子像に繋がっていったと思うと言うと、男はお前が何を言っているのか解らないと言う。
この男は、場所柄から言っても真面目なカソリックの信者かも知れないし、多分カソリックの正式の

教義では、異教の神が聖母子に繋がっていったと言うようなことは認めていないと思われるので、ここで余計なことを言っても仕方がないとその場を引き上げる。
　しかし、この資料を渡してもらったことで、この男にも大いに感謝しなければならない。

３．１１　「黒マリア」のまとめ

　これから、オーヴェルニュを離れて、ブルゴーニュのパレ・ル・モニアルに向かう事になる。ブルゴーニュにも黒マリアはあり、又オーセールで再び「白い土の小像」を見る事になるが、オーヴェルニュで見た以上の新しい発見は無かった。
　それでここで「黒マリア」関係のまとめをしてみたい。
　その詳細な論考は、田中仁彦「黒マリアの謎」　岩波書店　1993 にある。
他に、柳宗玄「黒い聖母」福武書店 1986 もあるが、宗教民俗学的な点からは田中氏の本が優れているように思う。
　田中氏の本には、フランスの著作、論文がいくつか紹介されている。それらも覗いてみようと、日仏会館の蔵書（４万５千冊と称している）を探したが見あたらなかった。このように、この問題は日本では、関心の低い問題なのである。
　このテーマに関心の深い方には、先ず田中氏の本をお勧めする。

以下のまとめは、殆どこの田中氏の考えに随っているが、私のユング好きのせいもあって、表現はよりユング的なものになっている。

　この地、ガリアのケルト族の地母神像が黒マリアの起源である。それはローマの支配下で変形して、「白い土の小像」なども作られた。
　ユングによる元型（archetype）としての太母（great mother）が地母神だと思うが、それは『地なる母の子宮の象徴であり、すべてのものを生み出す豊穣の地として、あるいは、すべてを呑みつくす死の国への入口として、常に全人類に共通のイメージとして現れる』（河合隼雄「ユング心理学入門」培風館）のである。即ち、ケルト族だけでなく、エジプトのイシス神、ギリシャのデメーテルなどどこにでも見られるものなのである。
　であるからして、その直接的表現としての黒マリアは鋭い目つきを持っているのである。
　これらは、父権的宗教であるキリスト教の支配が強まる中で、抑圧されて行ったが、元型は当然ながら取り去ることは出来なかった。そればかりではなく、民衆の反抗が始まるのである。黒マリア、聖母子像が教会の中に入っていくのである。これがノートル・ダームへの熱烈な信仰となり、フランス中にノートル・ダーム寺院が建立されることになっていく。
　その中で、聖母子像の性格も又変わって行く。
　君臨し審判する父なる神よりも、神にもっと優しさを求めた民衆の願望が聖母をより高みへ、**「神の母」**から**「母なる神」**へと変貌させたのだ。
　そして子供へ慈しみの眼差しを注ぐ優しい母の姿に、さらに小鳥にまで愛情をあらわす姿に変わっていったのである。

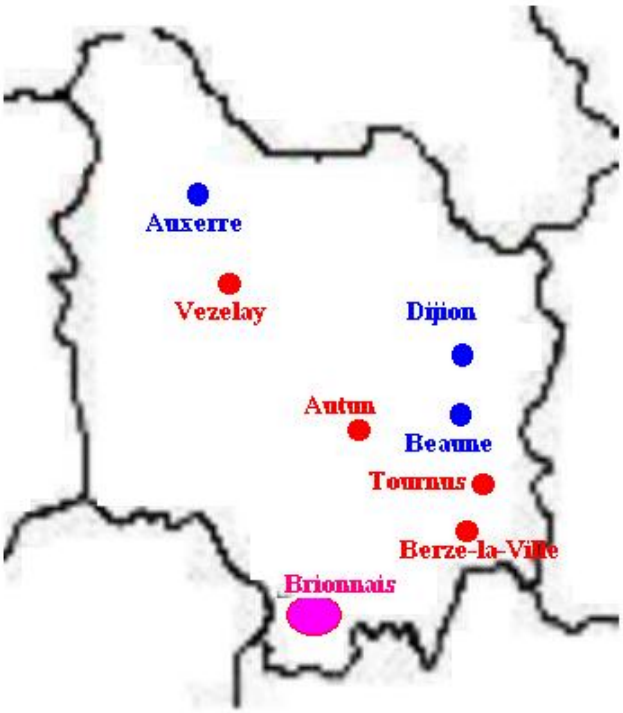
　ここまでくると、これはもう「山川草木悉皆成仏」の考えに近くなっているのではないかと思うほどである。そしてこの変化は、人類の平和に向けての進歩の為にも正しい方向であるようにも思えるのである。
　そして正統カソリックの立場は、それを後から追認するのに終始したのである。例えば、『「聖母の無原罪懐胎」が教理として正式に認められたのは 1854 年のピオ９世の教皇令によってであり、「聖母被昇天」が教理となるのは更にそれから１００年後、1950 年のピオ１２世の教皇令によってなの

である。』（田中仁彦「黒マリアの謎」）
　であるからこの大きな変化は正統カソリックの神学が成したことではなく、人間の心の奥底にある**「普遍的無意識」**が成したと云って良いのであろう。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第６報　　敏翁

Ⅳ．ブルゴーニュ、ロマネスクとワイン

４．１　パレ・ル・モニアル（Paray-le-Monial）



Bourgogne

以下の旅行記の理解を助ける為にフヘルゴーニュ地方の訪問地を左の地図に示す

【パレ・ル・モニアル】の町に入り、**【サクレ・クール教会】**（Basiliquedu Sacré-Coeur ）のそばに駐車し、近くにある〈i〉に行く。（パレ・ル・モニアルは左の地図ではブリオネの中に入っている。）
　町の詳細図、ホテルリストの他に、明日回る予定のブリオネ地方の教会群の情報を仕入れるためである。ブリオネ地方の１１の教会を簡単に紹介しているパンフレット（簡単な地図付き）を貰った。

　先ず、教会に入る。そして内陣近くに進んで、高い後陣半ドームを仰ぎ見た時の強列な印象は、今も鮮明である。この教会の空間は暗い。その空中に浮かんだ様に現れている**「祝福を与えるキリスト？」（次頁図）**（benedictory Christ ）のフレスコ（１４世紀）は、まるで幻を見ているように思えた。

　半ドームにキリストを描いた教会は数多くあり、絵の鮮明さ（ここのはあまり鮮明ではない）では、ここに勝るものも多いが、ここほど人を幻想の世界にまで誘う所は、今までの経験で始めてであった。
　キリストに向けてフラッシュ撮影をしたが、遠すぎて（高さ２２ｍ）光が届かず、全然写っていなかった。夜ホテルで、Libretto の画像（Zodaque 叢書とロマネスク美術）を見たが、あの感動にはほど遠い画像しかなかった。

（追記：この図はある本から見つけた画像に大幅な画像処理を加えたものである。）

この教会は、ヨーロッパ最大のバシリカ聖堂であった第３クリュニー聖堂のやや縮小された再現といわれているが、このあたりがどうであったかについては、解説を見た事がない。

ホテルは、教会から近くの **Hôtel Basilique** ２星にした。
此処も団体客が入っていて騒々しい。夕食のワインは、地酒（500CC で 18Fr ）にする。

【５月２７日（火）】

４．２　ブリオネ地方（Brionnais）

ブリオネ地方とは、パレ・ル・モニアルの南に位置し、ロワール川 (Loire)とソルニン川 (Sornin) に囲まれた地域である。<i> で貰った資料によると、この狭い地域（南北約３０ｋｍ、東西約２５ｋｍ）に１１～１２世紀にほぼ６０もの教会や礼拝堂が建てらた。この密度はブルゴーニュ及び全ヨーロッパでも例外的な事であった。そして今も尚約３０もの完全又は部分的にロマネスク様式のものを見る事が出来る。
特にその中でも１０の教会が注目すべきものであるとしている。私は今回、その中で８つの教会を回ることが出来た。

i）【モンシュー・レトワール&　（ Montceaux-l'Étoile ）】

パレ・ル・モニアルを出て、南に下ると約１２ｋｍほどでこの教会に着く。　小さな教会（１２世紀初期建立）である。中には入れない。タンパン（Tympam 扉の上の半円の壁）と「まぐさ」（Linteau 扉の上の横木・石材）が一体化されている。タンパン中央はキリスト昇天。ブリオネのキリストはいずれもマンドルラ（Mandorla アーモンド形の光背）に囲まれた居る。それを使徒とマリアが見上げている。傑作だが、中央のキリストの頭部と腕が壊されている。(上図)

ii）【アンジィ・ル・デュック（ Anzy-le-Duc ）】

ｉ から南へ田舎道を走ってすぐ（約３ｋｍ）ここに到着する。この教会は、１１世紀の終わりから１２世紀の初めに建てられ、南ブルゴーニュの最も美しい教会の一つである。(上左図)

ここもタンパン中央の栄光のキリストを「まぐさ」の１２使徒が仰ぎ見ている。(上右図)

ｉ のものより浅彫りであるためか、損耗の影響が強く、又キリストの顔は殆ど破壊されている。

キリストを両脇で支えている２人の天使の姿は優美、優雅そのものであるが、やはり、顔は破壊のためか欠落している。

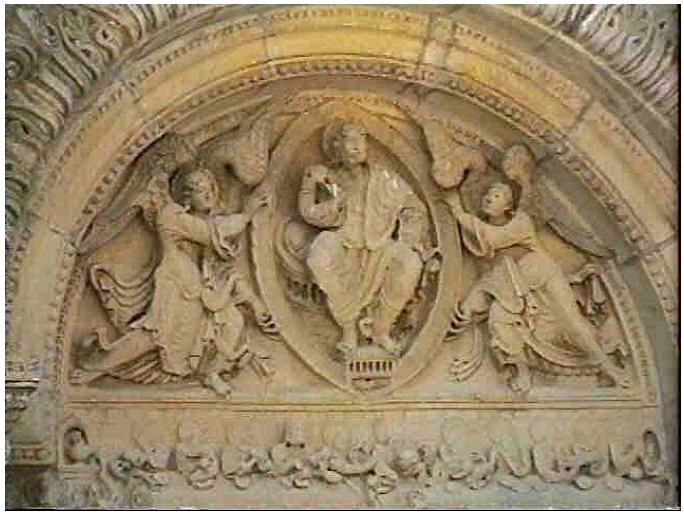
教会内部に入る。後陣半ドームに上とよく似た構図がフレスコで描かれている。構図は違うのだが、パレ・ル・モニアルのそれにやや近い印象を受けた。

ここの敷地はかなり広く、その外壁に小さな扉口があり、ここのタンパンにアダムとイブ、マギの礼拝などが有るというのだが、ここは雨風の影響をより受けやすい所であったためか、彫刻自体はかなりの深彫りであるのだが、損耗の程度がひどく、どこがそうなのかはっきり認識することが出来なかった。**(左図)**

iii) 【セミュール・アン・ブリオネ（ Semur-en-Brionnais ）】

ii から南へ直線距離８ｋｍばかりのところにこの町はある。やや大きな町でかってのブリオネの首都であった。教会はかなり大きく１２世紀、ロマネスク教会として建てられた最後の一つに数えられ、ゴシックへの過渡期に属している。

ここの西扉口タンパン、**「まぐさ」**の彫刻は修復され良く残っている。**(上左図)**
『タンパンの栄光のキリストと「４福音書記者の形像」（Tetramorph）は後者が大きすぎバランスが悪い。「まぐさ」の人物達の表情も表現が漫画的である。衰退期の極にあるものである。』と Zodiaque 叢書 は手厳しい。**(上右図)**



iv）【サン・ジュリアン・ド・ジョンジィ（ Saint-Julien-de-Jonzy ）】

iii から東南へ５ｋｍのところにある町である。教会は１２世紀に建てられたが、残っているものは少ない。扉口は残ってるもの一つである。　教会の周りは一面の墓地になっている。(上左図)

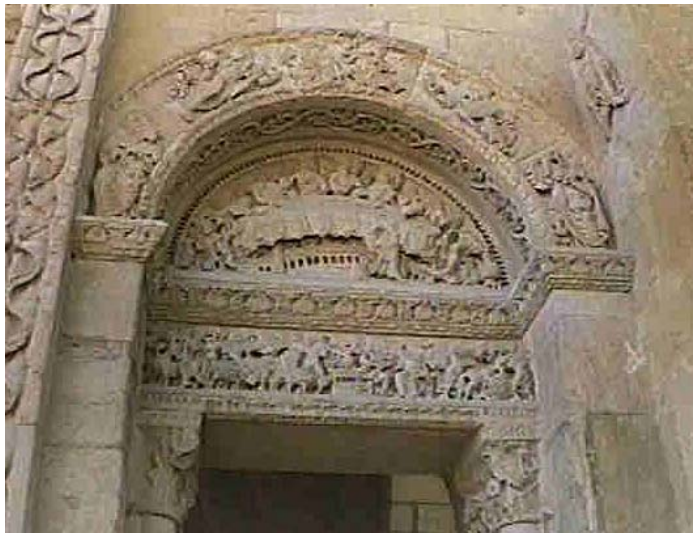
タンパンの復活したキリストとそれを支える２人の天使は良く残っている。しかし、「まぐさ」の最後の晩餐は、全員頭部が破壊されている。(上右図)

（教会に置いて有ったパンフレットによると、ユダだけは破壊を免れているとなっているが、私にはどうしてもそうは見えない。）

v）【イグランド（ Iguerande ）】

iv から西南へ約６ｋｍ（iii から真南に直線距離約６ｋｍ）にあるロワール川東岸の丘の上にある町。教会は１１世紀のもので、ブリオネにおける最も純粋なロマネスク様式教会の一つに数えられる。

教会の中は、実に明るく、簡素な美しさに満ちている。



vi）【シャルリュウ（ Charlieu ）】

v から東南へ約８ｋｍのところにある大きな町である。僧院は 872 年に創立、 932 年にクリニーに属し、1050 年に修道小院（Priory）に変わり、それを囲んで要塞化された町が発展した。教会

は大きなものだったが、フランス革命後殆ど破壊されてしまった。廃墟は鉄柵で囲まれて保存されている。残っているのは、ナルテックス（ 西扉口と身廊との間の玄関廊）のみである。

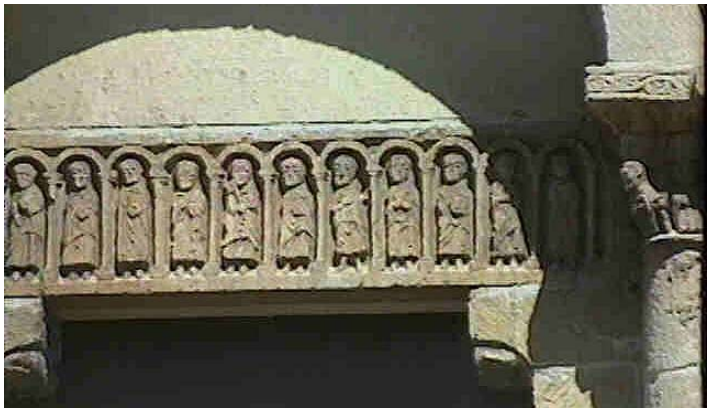
西扉口のタンパン（キリストと２人の天使）、「まぐさ」（１２使徒）は簡素な表現である。

北側に２つの扉口がある。

【大きな扉口】の彫刻（１２世紀）は傑作である。タンパンではキリストが「４福音書記者の形像」と２天使の中に座っている。「まぐさ」では１２使徒とマリアが座っている。彫刻は細かい表現まで残っているのだが、残念なことに全部頭部が破壊されているのである。**(上左図)**

大きな扉口のすぐ右に**【小さな扉口】**（１２世紀）がある。ここの彫刻も素晴らしいものである。タンパンには、カナの結婚祝宴、その上のアーキボルトにはキリストの変容、「まぐさ」には古代の犠牲をささげるシーンが彫られている。しかし、ここでも総ての頭部が破壊されている。**(上右図)**

あらためてフランス革命の際における民衆（全員では無いが）の教会、キリスト教の伝統に対する怒りの大きさを感ずることが出来る。



vii)【シャトウヌフ（ Châteauneuf ）】

シャルリュウがブリオネの南端で、そこから東北へ８ｋｍのところにあるソルニン川東岸の丘の上にある町。

教会は一段と高いところにある**(上左図)**。１２世紀の創建だが、１５世紀に百年戦争の被害修復のため完全に変わってしまっている。

南の小さな扉口の**「まぐさ」**に素朴な愛すべき表情の１２使徒像（１１世紀）がある。**(上右図)**

viii)【ブワ・サント・マリー　(Bois-St-Marie) 】

ここがブリオネの東端で、vii からほぼ東北に１５ｋｍの所にある。教会は１１世紀の終わりから１２世紀の初めに建てられた。その後廃墟と化したが、１９世紀に中世建築の研究、修復で有名なヴィオレ・ル・デュク（Viollet-le-Duke）の弟子、ミレー（Millet）によって修復され 1862 年に文化財に指定されている。(上左図)

その修復は、使われている石材の色使いなど古い感じが実に良く出ている。可成りの数の柱頭がある。その造りは荒いが、ロマネスク初期の感じが良く出て周囲と良くマツチしている。

扉口・タンパンには全く新しい感覚の彫刻（驢馬に乗った少女とそれを曳く農夫？　何を意味しているのか解説が無く解らない）があった。(上右図)

以上でブリオネの教会巡りを終えて、クリュニーに向かう。

今日は快晴で気温も可成り上がって来たようでやたらに喉が乾く。此処までも今朝ホテルで入れたお茶を呑み呑みのドライブになった。

４．３　クリュニー（Cluny）、ベルゼ・ラ・ヴィル（Berzé-la-Ville）

【クリュニー】の旧大修道院は、大きすぎどこからアクセスして良いか迷う。<i>は昼休みに入っていて使えない。看板から先ず【オシエ博物館】（Musée Ochier ）に行って共通のキップを買う必要がありそうな事が解った。博物館のそばに駐車し、午後の開場（午後２時）を待つ。

博物館には、古い扉口の部分とか柱頭とかが多数展示されていた。

次に、【旧大修道院】（Ancienne Abbaye）に入る。

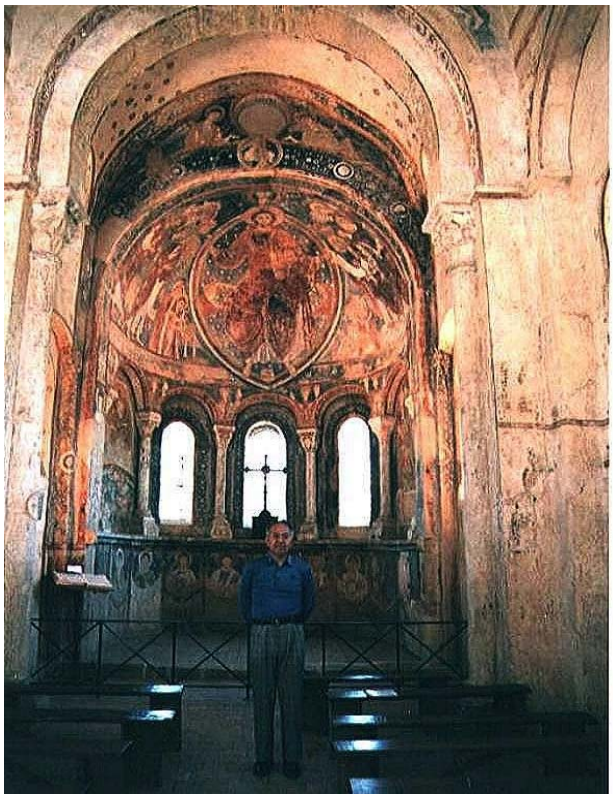
この大修道院（Cluny Ⅲ と呼ばれる）は、1088 ～ 1130 年間に建てられたもので、ローマのサン・ピエトロ教会以前には、世界最大のキリスト教・教会だった。（長さ 177 ｍ、ドーム高さ 32 ｍ）しかしフランス革命後、1823

年までに大部分が破壊され、今はわずかに南翼廊の一部とそれに付属していた「聖水の鐘楼」(Clocher de l'Eau Benite 高さ 33 m）が残っているに過ぎない。
ここの後陣の半ドームには、パレ・ル・モニアルにあったようなフレスコがあったのだろうか？　30 mのところに巨大なキリストが描かれている様子を想像してみた。

そこを抜け、庭園を通って**穀粉貯蔵庫（Farinier）**に向かう。これは１３世紀の後半に建てられたもので、１３世紀初期の製粉所に接続している。
この２階に素晴らしい**柱頭**が展示されている。教会の内陣にあったものでほぼ昔の配置のままに8ケが半円状に置かれている。
いずれの柱頭も素晴らしく、柱頭の彫刻もここまで来たのかと感じ入ったが、これはもうロマネスクを越えてしまっているとも感じた。

『注目したいのは，コリント式柱頭の中央にアーモンド形メダイョンを配する柱頭である。**(全頁図)**制作年代に関しては長く論議されている。（中略）クリュニーのメダイョンは実に深々と彫り下げ，大穴を開け，人物が自由に動ける空間を確保してある。一般にロマネスク彫刻は建築から課せられた枠に順応するために，人体を引き伸ばしたり縮めたりしてさまざまな変形に至った。ところが，ここでは自由な立ち姿，座像，歩く姿を配する。人物像の自立である。十分な空間のなかで，「春」の女性は小首を傾げ，裳裾を翻して佇む。「天国の四つの川」の林檎の木などは，柱頭の地から完全に浮き出ている。彫刻技術の進歩，透かし彫りの効果，アカンサス葉をはじめ木々や水の流れや衣の翻りや，彫られるもの自体への興味がみてとれる。人間のプロポーションを尊ぶ新しい自然主義の芽生えがある。同じことがヴェズレーの柱頭にも，はっきりと観察できる。「第２音」の女性の翻る裳裾と，ヴェズレーの「昇天」のキリストの裳裾の扱いは，同じ手になるようだ。』（世界美術大全集　８　「ロマネスク」　小学館）

日差しが強く、疲れたがここの柱頭には満足した。旧大修道院を出、<i>で、町の地図とホテルリストを貰う。
先ずホテルを予約し、一休みしてベルゼ・ラ・ヴィルに行って来る事にした。
ホテルは、レストランが付いていて、２星となると　**Hôtel de l'Abbaye** になった。
部屋で、今朝入れた残りのお茶を呑み、ベッドにひっくり返って一休み後、レセプションの女性に幹線道路への出方を聞いて出発した。



【ベルゼ・ラ・ヴィルの小修道院】は、ぶどう畑の中にあった。（上左図）

「新版　ワインの知識とサービス」によると、ここの「白」は、「Mâcon＋村名」のＡＯＣにランクされるものらしい。（今晩の夕食のところでやや詳しく説明する予定）

Appellation Mâcon-Berzé-la-Ville Contorôlée と言う白ワインを見つけたら呑もうと思ったが、結局どこのホテルのワインリストの中にも見つけることが出来なかった。

教会とは思えない狭い入口から階段を登って礼拝堂に達する。参観者は誰も居らず、窓口の女性が本を読みながら番をしていた。

ここのフレスコは実に色が鮮明で、見事な美しさである。

【礼拝堂】は１２世紀のものである。後陣の半ドームの中央に栄光のキリストがマンドーラに囲まれている。その周りには、使徒、僧正などがいるが、キリストはパウロに律法が書かれた羊皮紙を手渡している。

『もはや字は識別できないが、クリュニーの守護神でもあるこの使徒に命令を与えていることは間違いない』

（饗庭孝男　「ヨーロッパ古寺巡礼」）

後陣南壁にはサン・ブレーズ（Saint-Blaise）の殉教、北壁にはサン・ヴァンサン（Saint-Vincent）の殉教のシーンのフレスコ（いずれも１２世紀初期）がこれも良く保存された姿で残っている。

フラッシュ撮影は駄目なので、絵はがきを求める。

受付の女性に、**栄光のキリスト**をバックに記念写真（上右図）を撮って貰った。

クリュニーのホテルに戻り、一休みして食堂で夕食をとる。

夕食の**ワイン**は、マコネの白、**Mâcon-Cruzille** のＡＯＣ 1995 ハーフボトル 65Fr にした。

『マコネ地区で産するワインのＡ．Ｏ．Ｃには次の５つがある。

１）　マコン（Mâcon）（白，赤，ロゼ）

２）　マコン・シューペリュール（Mâcon Superieur）（白，赤，ロゼ）

３）　ピノ・シャルドネ・マコン（Pinot Chardonnay - Mâcon）（白）

４）　マコン・ヴィラージュ（Mâcon - Villages）（白）

５）　マコン・（村名）（Mâcon＋村名）（白，赤，ロゼ）
１のマコンがランクでは最下位で２，３，４と次第に上級になっている。その５はマコネ地区内にある特定の村でできたワインに「マコン何々」とマコンの文字に村名をつけ加えたＡＯＣで、最低アルコール度が赤１０度，白１１度，１ｈａ当たりの生産制限量は白が６０００ｌ，赤が５５００ｌと規定されている。』（浅田勝美　「新版　ワインの知識とサービス」）

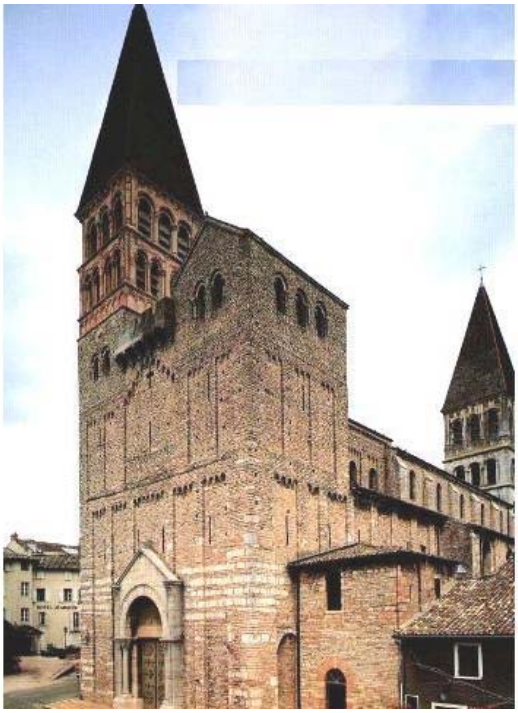
今回のは、この５である。ベルゼ・ラ・ヴィル産もこのランクに入る。
これは、リヨンのブッションで呑んだサン・ヴェランよりは、一寸ランクは低いと見なされて居る者であるが、値段は同じだった。
味は、日数が経っているので、比較はし難いが、ほぼ同様なものだった。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第７報　　敏翁

４．４　トゥルニュ（Tournus）、ボーヌ（Beaune）、ディジョン（Dijon）

【５月２８日（水）】

２９，３０日のどちらかをコート・ドールのワイン・ツァーに当てる計画である。いろいろなメニューがあり、ボーヌ、ディジョンの〈i〉から出発しているらしいので、今日はそれらについて〈i〉で情報を集める事を主眼にした行動計画を建てた。　即ち　ホテルーー＞トゥルニューー＞ボーヌーー＞シトーーー＞デイジョン
何処で宿泊するかは、何も決めないで出発した。



トゥルニュの黒褐色の聖母

クリュニーからマコンに出て、高速Ａ６に乗り、３０ｋｍ強北上すれば【トゥルニュ】である。古い町並みの中に突然大きな教会が現れる。

【サン・フィリベール修道院】（St-Philibert）である。（前頁左図）

ここには１２世紀の【黒褐色の聖母】（Notre-Dame-de-la-Brune）（前頁右図）と名付けられた聖母子像がある。その名の示すとおりかっては黒マリアであつたのだが、しかし今は金色に輝いているのである（１９世紀に塗ったのだという）。

又高速に戻り、約５０ｋｍ北上すれば、【ボーヌ】である。高速を降りてすぐのところに、明日と明後日泊まるホテル（Novotel）が見えた。

ここから２ｋｍほど町に近ずくと、町を直径７～８００ｍで囲んでいる一方交通の環状道路に突き当たる。ここから、町になかなか入れずぐるぐる回った後、道路添いの駐車場に車を止め、町の中心に歩いて行った。

施療院（Hôtel-Dieu）のあたりが最も人通りの多いところである。施療院の真ん前に〈i〉がある。ここで、【ワインツアー】のパンフレツトを貰う。

現在やっているメニューはそれほど無く、ミニバスによるツアーが２種類と４輪馬車によるものが１種類だけだった。後者は水、土、日の朝出発なので私の旅行計画と合わない。

前者は毎日やっていて、１つが１２時と１４時半に出発する Côte de Beane と Hautes Côtes de Beaune を２時間回るもの。もう一つは１７時に出発する Côte de Nuits を２時間回るもの。いずれもワインの試飲が含まれている。

〈i〉の前からの出発で、予約は出発の１時間前までとの事である。

私が勝手に想像していたものよりお粗末な感じがしたので、やはりディジョンの〈i〉も調べてみることにした。

ボーヌ　施療院（Hôtel-Dieu）

それはそれとして、【施療院】（上図）の見学をする事にした。

この建物は、１４４３年フィリップ・ル・ボン（ディジョンの項で詳述）の大法官ニコラ・ローランとその妻が貧しい者を無料で施療するために作ったものである。

黄、赤、黒、緑などの色タイルで幾何学模様を飾る屋根を持つこの建物は、その中庭から見るのが一番美しい。この屋根は、ブルゴーニュ独特のもので、町でも所々に見ることができた。
中庭を囲んで建物がある。「**貧しき者の大ホール**」（長さ５０ｍ）には、真っ赤なカーテンで仕切られた２８台のベッドがあり、これは１９５９年まで実際に使われていたものだという。
他にも、当時の薬局など実用的なもの、「最後の審判」の細密画など美術品にも見るべき者が多い。
町の様子も大体解ったので、車を町中に入れ、**【ノートル・ダーム教会】**（Collegiale Basillique Notre-Dame ）の前に移す。
ここにも「**黒マリア**」があり、やはり、町を幾度と無く危機から救ったと伝えられている。

そのそばにある**【ワイン博物館】**（Musée du Vin Bourgogne）に行ってみた。
館の前の小屋に大きな古い圧縮機などが置いてあった。
建物は、１４～１６世紀のもので、ブルゴーニュ公がディジョンに移る前に住んでいたものである。中にはワイン作りに関する種々の展示があり、初学者には大いに参考になった。

ボーヌの町を出て、Ｄ９７３、Ｄ９９６と乗り継いで約３５ｋｍほどで**【シトー】**（Cîteau）につく。しかし修道院への入り口が解らない。何回か道を往復してやっと小さな標識を見つけ、修道院の門の外の駐車場に車を止める。
ここは、中世にクリュニー修道会とともに、ヨーロッパ・キリスト教に極めて大きなインパクトを与えた**シトー修道会**発祥（１０９８年）の地である。
教会と思える建物の扉を開けて入っていく男達がいるのでそれについて入って行った。男達は受付の修道僧と何か言葉を交わしどんどん中に入っていく。
私の番になると、修道僧は何の用ですか？と尋ねる。訪問したいのですと答えるとそれは出来ませんと言う。未だ状況が把握できない私はいろいろ質問をしている内に、ここは修道院内部の訪問は出来ない事、オーディオ・ビジュアル室があり、そこと売店だけがアクセス出来る場所だという事が解った（ミシュランの記述は、あとから読むとそうとも取れるが紛らわしい）。
ＡＶ室に行ってみると、訪問者は私一人、英語のボタンを押して２０分ほどのビデオ画像で、シトー派全体の歴史とここの歴史と現在が紹介される。
画像はなかなか綺麗だが、中身は大体知っていることだけだった。
そばにある売店の中に、若干ここの遺跡の展示があった。ここも修道僧が番をしていた。絵葉書を購入。
ここは、フランス革命で徹底的に破壊されて、残っているのは、図書館の遺跡くらいのものらしい。

まだ午後３時だが、何だか気分が落ち込んでしまい、直接ディジョンへ行きそこで泊まる事にした。

来た道Ｄ９９６をそのまま北上すれば約２５ｋｍほどで**【ディジョン】**に到達する。しかしこの町は大きい。町の中心とおぼしき大きな教会のそばの路傍の駐車場にようやく潜り込む。サン・ベニィニュ大聖堂（Cathédral St-Bénigne）だった。そこから徒歩で少し離れたところにある〈i〉に行く。ここの受付は上品な中年の女性で、実に流暢な英語を話した。例によって町の地図、ホテルリストを貰った他にワインツアーに関する資料も貰った。
ここは、１日前に予約が必要だ。宿でゆっくり検討しよう。
駐車場そばの**【サン・ベニィニュ大聖堂】**に入ってみる。内部も大修理中だった。クリプトに入ってみる。
此処だけがロマネスク時代のものらしい。古拙なプレ・ロマネスクの柱頭（奇妙な姿勢で祈る男など）がある。

ホテルは、近くて、レストラン付きの３星　Philippe le Bon （フィリップ善良王）にした。ここにはフォーク３つのレストラン　La Toison d'Or（金羊毛）がついている。
ホテルは、近いところにあるのだが、道が複雑で、ここでも道を聞きながらやっと到着できた。

ここで、一寸歴史に触れる。ブルゴーニュ公国が、フランス王に対抗して最大の権力を持っていたのは、１３６４～１４７７年の間である。フィリップ善良王の御代は１４１９～６７年であった。この時代ブルゴーニュは勿論だが、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、フランドル、ピカデリーなどが彼の支配下にあった。彼は「金羊毛」団と称する結社を創設した。３１名からなるこの排他性の極めて強い結社は、深紅の上着の上に毛皮で縁取りされたやはり深紅の外套を着け、特製の胸鎖を着けて集まったという。

この故事に随って、「金羊毛」と言う名の公園もあるが、このホテルは、その名も、レストランの名もそれらの歴史に因んだのであろう。

レストランは、ホテルの裏、中庭を介して小綺麗な作りである。

雰囲気も良いので、**ワイン**も少し奮発した。

Chambolle-Musigny の赤　ＡＯＣ　１９９１年　13% である。ハーフボトルで 130Fr と今まででは一番高級なものである。

シャンボル・ミュジニィは、コート・ド・ニュイ（**Côte de Nuits**）にあるコミューン（村）名のＡＯＣ（赤のみ）である。

ここでブルゴーニュのＡＯＣについて簡単に触れる。

『数あるブルゴーニュのＡＯＣは通常次の４つのカテゴリーに分けられている。

(1)　総体的な地方名のＡＯＣ　　例　Bourgogne Ordinaire

(2)　限定された地域と地区名のＡＯＣ　　例　**Bourgogne Hautes Côtes de Beaune**

(3)　コミューン（村）名のＡＯＣ

ここだけは、やや詳しくコート・ド・ニュイの全村を挙げる

Marsannay　（赤と白とﾛｾﾞ）
Fixin　（白と赤）
Gevrey‐Chambertin　（赤のみ）
Morey‐Saint‐Denis　（白と赤）
○　Chambolle‐Musigny　（赤のみ）
Vougeot　（白と赤）
Vosne‐Romanee　（赤のみ）
Nuits または Nuits‐Saint‐Georges　（白と赤）

(4)クリマ名のＡＯＣ

例　Chambertin

Romanée‐Conti』（「新版 ワインの知識とサービス」より抄録）

勿論、(1),(2),(3),(4)の順にランクは高くなり、(4)に至っては、あまりお目にもかかれないものが多い。

今回、私の泊まったホテル、や利用したレストランのクラスでは、ロマネ・コンティを置いて有るところは一ケ所も無かった。

今回のは、(3)の○印のものである。

『四五○エーカーほどの畑からとれるここのワインは、バーガンディの北部ものとしては珍しく柔かい性格をもち、事実コート・ド・ニュイの中ではもっとも柔かなワインである。クロ・ヴジョーがすみれ、エシェゾーが西洋松露、そしてここのワインは黄母の香りがするといわれている。こんな微妙な差を利きわけられないところをみると、私の嗅覚もあまりたいしたものでないのかもしれない・・・。』　（ハリー・W・ヨクスオール「ワインの王様」）

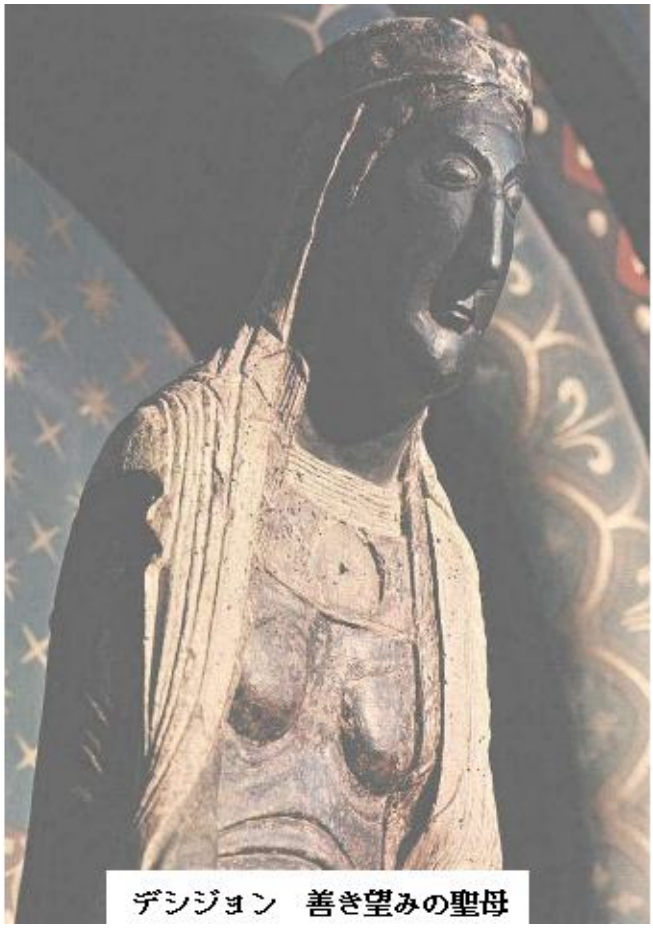
私にも良い香りであることしか解らなかったが、確かに、「こく」があり且つ口当たりの良いワインであった。

夜、ワインツァーを含めた明日、明後日の計画を決定した。明日、明後日は日本でボーヌにホテルを予約して有る。
ここで、溜まった洗濯物をクリーニングに出す予定である。

ディジョン発のワインツアーはボーヌ発のものよりは多少バラエティが多く２時間コースと３時間コースがある。しかし前者は朝９時にデイジョンを出発なのと、最低２人集まらないとツアー不成立の点に多少の心配を感じたので、ボーヌ発のツァーを午後２時半発と午後５時発を連続して参加する事にした。

それで、計画は、次の様にしてみた。
５月２９日　　ディジョンーー＞アレシアーー＞フォントネーー＞ヴェズレー　ーー＞（ソウリュウ）ーー＞ボーヌ
５月３０日　　午前中　オータン　　午後～夕方　ワインツアー
５月３１日　　ボーヌーー＞オーセールーー＞ポンティニーーー＞オルレアン

【５月２９日（木）】


デシジョン　善き望みの聖母

ディジョンでは、ノートル・ダームだけは見たいと思い、ホテルで行き方を尋ねると、道は複雑過ぎるので歩いて行くことを奨められる。
それで、ビデオカメラとミシュランと市街地図だけ持って散歩に出かけた。
細い道を、地図と見比べながらやっと壮大な**【旧ブルゴーニュ公宮殿】**前の自由広場に到達できた。高く聳えているのが**【フィリップ善良王の塔】**である。
宮殿は東側が美術館となっていて、見たいものも多いのだが時間の関係で割愛した。
この宮殿の裏に**【ノートル･ダーム教会】**がある。
教会を入ると、Ａ４・２枚裏表に平面図付き英文のハンフレットが置いて有り、それと見比べながら参観出来た。
ステンドグラス（１３世紀）も素晴らしいが、私にとってのお目当てはやはり、**【善き望みの聖母】（左図）**（Notre-Dame de Bon-Espoir）と呼ばれている黒マリアである。こう呼ばれる様になったのは、「９日間の祈り」（novena）の後、１５１３年９月１１日、この町がスイス人傭兵隊による包囲から解放されると言う事があってからと言う。この事を記念して作られたタペストリーは美術館にある（見られないのが残念）。第二次大戦の時も、１９４４年、月日は何と９月１１日、ドイツ軍の降伏とディジョンからの撤退があった時も、市民の novena が有ったのだという。これを記念したゴブラン織りのタペストリーは、南翼廊に見ることが出来た。
この聖母の顔は、元は黒くは無く、長い時間の間に何回と無く、黒くしたり明るくしたりしたのだと言う。

これは、人々の心の揺らぎを示していて、極めて興味深い。

４．５　アレシア（Alésia）〔アリス・サント・レィヌ（Alise-Ste-Reine）〕

紀元前５２年、カエサル軍６万人と、ヴェルチンジェトリックス率いるアレシアの丘に立て籠もるガリア連合軍８万人、及びガリアの各地からの救援軍２５万人が参加したガリア戦争の最後を飾る大決戦の場が直線距離にしてデイジョンの西北約４５ｋｍにある現在のアリス・サント・レィヌのあたりである事は、発掘調査などで確からしい。

この決戦で、ガリア軍は、カエサルの頭脳と、ローマの技術力の前に徹底的に負けたのである。ここで改めて文明の力を思い知ったガリア人は、以後大規模の反乱などせずに、ローマ化していったのである。ガロ・ロマン（gallo romaine ローマ化された
ゴール＜ガリア=フランス＞）時代である。

塩野七生　「ローマ人の物語　Ⅳ」からの孫引きであるが、『現代イギリスの研究者の一人は、書いている。
「アレシアの攻防戦が、ブリタニアもふくめた、ピレネー山脈からライン河に至る地方の以後の歴史を決定した」と。』

それで、フランス／ヨーロッパの歴史の原点とも言える此処を訪ねてみることにしたのである。

Ｄ９０５を進むと、頻繁にアレシアとフォントネーの標識が現れる。それでアレシアは、クレルモン・フェランの時のジェルゴビアみたいな事にはならないであろう事が確信された。

【アリス・サント・レィヌ】の町に入り、初め何処に行ったら良いのか全然解らないので、博物館に行ってみた。

腰の低い若い女性が受付をしていて、申し訳なさそうに入ることは出来ない。先ずガロ・ロマンの町の発掘の場に行って貰いたいと言う。簡単な説明付き地図を貰い、それに随って発掘の場に赴く。

【発掘の場】は広大で、道のそばに受付の建物がある。ここの女性は、さっきの女性とは全く違い、インテリ風で、態度が大きい。

ここと博物館共通のキップを貰うときに、博物館にも行くかと聞かれ、行くというと国籍はと聞かれる。答えるとそのキップに Japon と書き込んだのである。　一体何のためにこんな事をするのか解らない。

発掘に関するかなり詳細な資料（仏文）とそのアブストラクト（英文）、及びもう一枚（仏文）のアレシア攻城戦に関する資料を貰った。

英文資料に急いで目を通すと、攻城戦の後、ここにローマ化された小さいが繁栄した町が出来た。１９０５年以来の発掘で、ここは、ガリアの北部では、**ガロ・ロマンの町**としては最も完全に残っているものである事が解ったとある。あとはこの広大な発掘の場の説明が長々と続く。円形劇場有り、神殿有り、フォーラム有り、アイテムは１１０に及ぶ。これを全部見ていたら日が暮れてしまう。そして戦争の遺跡の記述は全然出て来ない。

これですっかり焦ってしまった。私が見たいのは違うのである。上述の一枚の仏文資料が攻城戦に関するものらしいのだが、仏文で殆ど読めない。

やむを得ず、発掘の跡を少し回った後、「展望台」に登り、周りをビデオ撮影して終わりとした。さっきの女性に、この「一枚資料」は英文が無いのかと尋ねてみたが、無駄だった。英米人の興味の対象は私と違うのだろうか？

後で、ゆっくり辞書を引き引き読んでみると、展望台のあたりが、ガリア軍の立て籠もったところである事、又そこからの景観とガリア戦記の記述の関係などが良く記されていた。その資料と撮影したビデオ映像と比べてみたが肝心の所が写ってなかった。今回の旅の中で仏語力の弱さの欠点が最も

顕著に現れた場所であった。

又、博物館に戻り、中を見学した。発掘物などが沢山展示されていた。
この地を紀元前のアレシアと同定（違う場所の説もあった）するのに最も有力な武器は、航空写真であったそうで、その何枚かも展示されていた。
ここまで想定以上に時間を取られ、１１時半近くに成ってしまった。ここからフォントネーは近いが、１２時から１４時は休みである。それで、ヴェズレーに先ず行き、それからフォントネーに戻ることにした。
今日は、記録的な長距離ドライブになりそうである。
ソーリュウは訪問を諦める他はなさそうである。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第８報　　敏翁

４．６　ヴェズレー（Vézelay）

アレシアから**ヴェズレー**迄は、直線距離にして５０ｋｍ強、Ｄ９５４、Ｎ６、Ｄ９５７と乗り継いで近ずくと、丘の上に聳え立つ教会と町の家並みが見えてくる。　町に入り、教会から１００ｍほどのところにある駐車場に車を止める。
【サント・マドレーヌ教会】（Basilique Ste-Madeleine）は、サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路の出発点の一つである。

ヴェズレー　サント・マドレーヌ教会　　ナルテックス　　タンパン

柱頭　神秘の粉挽き車

ここも歴史は古く、９世紀まで遡ることが出来る。１１世紀の中頃、マドレーヌ（=聖女マグダラのマリア）の聖遺骨がこの寺にあるという噂が広まり、数多くの巡礼を引き寄せた。
栄光の極にあったのは、１１４６年３月３１日、シトー派の聖ベルナールが、ここで第２回十字軍の為の説教演説を行った頃であったろうか。１３世紀の終わり、南仏のサン・マキシマンで、マドレーヌの他の聖遺骨が発見され、ヴェズレーは俄に衰退していった。１９世紀、「カルメン」の作者としても有名な文化財調査官プロスペル・メリメが修復の必要を説いたときは、建物は崩壊寸前であったらしい。
西正面のファサードは堂々としているが、これはヴィオレ・ル・デュクにより再建されたものである。
そこの右扉口から入ったナルテックス（玄関廊）は１１３２年のものだが、実に大きくて立派である。そしてここの

【タンパン】（前頁左図）は、ブルゴーニュ・ロマネスク芸術の傑作である。
中央の巨大なキリストは、可視的存在ではなく霊的存在であることを感じさせ、その広げられた手の指先から光線のように霊気が動揺する使徒たちの頭上に降り注いでいる。
「まぐさ」やタンパン外周に諸職業の人々、諸国人が刻まれている。その又外周には一年の労働と「黄道十二宮」（Zodiaque）が描かれている。
これら全体で中央のキリストが全宇宙の時間と空間を統治する全能者である事、即ちこの時代、１２世紀に捉えられていた世界像が見事に表現されている。
身廊に入ると、天井の横断アーチの色使い（白と黒の迫石を交互に配色している）と構成の見事さに、ル・ピュイほど直接的ではなく抑制されてはいるがモスレムの影響とその後の進展の跡を見る事が出来るように感じた。
又ここは、**柱頭の宝庫**である。高低合わせると１００近くになるらしいが、『植物文様を入れ、聖書、聖人その他の伝承を刻み、さながら身廊全体を中世の象徴の森と化している感がある。』（ヨーロッパ古寺巡礼）
ここの柱頭の表現力は、リアリズムに近く、又動きを良く捉えており、クリュニー、オータン（明日行く予定）と合わせて、柱頭芸術の到達点を示していると思われる。
ぼんやり眺めていてもここの柱頭は変化に富んでいて見ていて飽きないが、解説で意味を知ると一段と味わいが深くなる。
例えば、世界美術大全集　８　「ロマネスク」によると、『そのなかで宗教性の最も高いものが、**「神秘の粉挽き車」（前頁右図）**の柱頭である。マントを羽織り膝までの衣を着て靴を履いているのは預言者モーゼで、彼が入れつつある穀物は、シナイ山で受け取った旧約の教えである。神秘の粉挽き車は、十字を付けた車輪が示すようにキリストが受難によってその粒を挽き砕き、潰して粉にする。粉を袋に受けるのは聖パウロである。裸足で長衣を着て、額が禿げあがっている。粉は，当然新約の教えであり、彼が伝道に当たるという極度に象徴的な表現である。』

夢中になって、フラッシュ撮影をした。
帰国後、ここの柱頭は彫りが深いせいか、ある程度コントラストが付いた写真が撮れており、又さらにパソコンによる画像処理を加える事により、相当良い画像表現（Zodiaque と比べると未だ不十分だが）が得られることが解った。
(上右図がその例である。)

４．７　フォントネー（Fontenay）

来た道を戻り、途中からＤ９８０でフォントネーに接近する。この道は、朝アレシアに行ったＤ９０５にほぼ直行する道である。私には思いこみがあった。地図上ではＤ９８０は目的地のそばを通っており、又朝頻繁にフォントネーの標識を見たのであるから、今度も近づけば、必ず標識があると言うものである。
しかし、距離的には当然そばに来ているはずなのに標識が現れない。おかしいなと思い、車を止めて地図と見比べると、何と１０ｋｍ以上も行き過ぎていた。又来た道を戻り、多分この辺との勘を頼りに細い道に入った。やがてその道がＴ字路に当たり、左フォントネーの標識を見てほっとした。しばらく森の中の細い道を走って**【フォントネー修道院】**に到着した。駐車場には、広い道が付いており、私の来た道は裏道らしかった。
受付に行くと、ここはガイド付き参観しかなく、今度は午後５時であり、所用時間は１時間であると言う。
ここは、ボーヌから１００ｋｍも離れている。受付嬢からテレカルト（tele-carte フランスのテレフォンカード）を借りて、そばの電話機からホテルに遅れるかも知れないと連絡を入れた。ホテルの方では全然気にして居なかった。

ここは、１１１８年、聖ベルナールが創建した**シトー派の修道院**である。**(上左図)**

ここも紆余曲折があり、現在は民間の物となっているが、実に良く古い状態を保っている。

ガイドは首にセーターを巻き付けた若い女性だが、説明はフランス語だけ。貰ったＡ４一枚の英文資料を頼りに集団（約２０名）に付いて行った。

林で囲まれた境内は、芝生で覆われ、打ち水機が勢い良く飛ばす水線が夕日にきらきらと輝いていた。。

ここは、その名前が泉（Fontaine）に由来するように水が豊富（シトー派修道院立地の必須条件）で、境内にも水流があり、水面が揺れていた。

教会もシトー派らしい簡素な美しさに満ちていた。入り口にも何の飾りも無い。内部も柱頭には何の彫刻も無く、**ステンドグラス(上右図)**も薄緑色に濃褐色の模様が有るだけである。それでいて、何か心に満たされるものがあるのである。

シトー派精神の力強さがここに現れている。しかし歴史はこの精神が長くは続かなかったことを示している。

大寝室、会議室、回廊、鍛冶場など良く残っている。回廊もシトー派らしい精神のたくましさと優雅さを併せ持った建築である。その中庭も芝生に草木が幾何学模様に配置されているだけだが、整然とした美しさがある。

午後６時、駐車場を出発、ボーヌに向かう。

４．８　ボーヌ、オータン（Autun）、ワイン・ツアー

高速に入るまで、少しもたもたしたが、高速は１５０ｋｍで飛ばす。　段々、フランス人並みになって来た。

午後７時１０分過ぎには、ボーヌの高速降り口近くのホテル　Novotel ３星に入る事が出来た。

ここは、モダーンなホテルである。

部屋で、一休み後、ホテルのレストランで夕食をとる。

ここのレストランは、今まで見なかったサービスをしていた。即ち一本（７８０ｃｃ）～２００Ｆｒクラスのワインを、１５０ｃｃに小分けして～４０Ｆｒで飲めるようにしているのである。これは、私のような一人旅の者には有り難いサービスで、又割高に成っていないところが気に入った。

料理は、アントレに自家製テリーヌ、メインに子牛のステーキにしたので、白、赤の２種類を味わうことにした。

選択は、明日ワインツアーで訪れる予定の地域の中からにした。
白　**Meursault**　のＡＯＣ 1993 ″Les Tillets″　150CC　40Fr
赤　**Pommard**　のＡＯＣ 1993 ″Les Noizons″　150CC　41Fr

以上はワインリストから書き写したもので、テーブルにボトルが来るわけではないので、これ以上の情報は得られなかった。

ムルソーもポマールも、コート・ドールの南半分に当たるコート・ド・ボーヌ（Côte de Beaune）の有名な村である。
しかし、後で Les Tillets 、Les Noizons が「クリマ＊」の名前ではないかと思い、「新版　ワインの知識とサービス」にある一級のクリマ（ポマールに２５、ムルソーに２２ある）のリストを探してみたが、当然かも知れないが見あたらなかった。

＊　クリマはブルゴーニュ独特の用語で，気候，地質，その他の生産条件を同じくする同一地域内のぶどう園のことで通常「定地」と訳している。

一級のクリマのムルソー白は、この町の南部にあるピュリニィ（Puligny）とシャサーニュ（Chassagne）の町の白ワインとともに，「ブルゴーニュの白」を代表する世界的な銘醸酒である。
私の今晩のムルソーは、それほどのものではない筈なのだが、口に含んでその今まで経験したことのない独特の香りの強さに驚いた。
初めは、異様と思われるほどに感じたが、やがてそれがたまらない良い香りとして認識されて来るのであった。
『ムルソーの白ワインの特色は，次の５つに要約できる。
- 辛口であるが，果実的な質を備えている。
- シャブリ（Chablis）のような硬さ，厳しさがなく，柔和で繊細な味わいがある。
- はしばみやナッツを思わせるブーケがある。
- 味わい深く、飲んだ後もここちよさが残る。
- 鶏料理，魚料理に最適である。』（「新版　ﾜｲﾝの知識とｻｰﾋﾞｽ」）

ムルソーのすばらしさを更に味わいたいものと、帰りにパリの空港で、一級クリマの中でも特別と言われる**レ・ペリェール**（Les Perrières ネゴシアンは Louis Max）1990 を 300Fr で求め、帰国後、父と呑んだのだが、あの素晴らしい香りは全く無かった。

『**ムールソー**の村名白ワインは、醸造元次第でかなり質にちがいが出る。とはいうものの、その水準は平均的にみても推奨するに足る高さのものである。いうなれば、まず安心して買える。ただし、長持ちはしないワインで、六年も寝かせたら飲み頃にはおそすぎる。もっとも、優れた銘醸ものは、もっと持続力をもっているが…。私はペリェールの五九年ものを何本かとってあるが、1967 年にそのうちの一瓶を抜いてみたら、いまだ極めて優れた状態だった。』（「ワインの王様」）
私のペリェールは、醸造元に問題があったのか？　ワインとの付き合いは本当に難しい。

『**ポマール**のワインは比較的に色が濃く，こくがあり，アルコール度も強く長期の保存にたえる。あと口もサッパリとして健やかなワインである。ポマールは，輸入国のアメリカ，イギリス，日本で不思議と珍重され，実際の価値以上に評価されて高価になりがちである。しかし，少なくともボーヌやヴォルネのワインより上位に置くのは誤りである。』
（「新版　ワインの知識とサービス」）
この表現の通りのワインであった。
本日の走行距離は、３８０ｋｍ。今回の旅行の中では最高だった。

【５月３０日（金）】

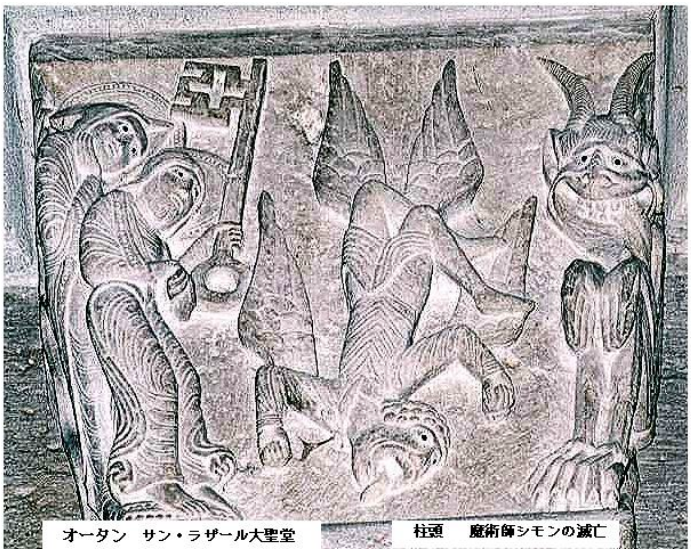
—

朝、大きな袋に２つ、洗濯物をラウンドリーに依頼する。

午前中にオータンを参観、ボーヌに戻り〈i〉でワインツアー申し込みと言うことにした。

ボーヌの町を出ると、Ｄ９７３沿いに、ポマール、ヴォルネ、モンテリとコート・ド・ボーヌの葡萄畑が連なっている。更に進みもう少し高度が高くなったところが、オート・コート・ド・ボーヌ（Hautes Côtes de Beaune）で、葡萄畑が点在する。そこも抜けて更に３０ｋｍばかり走ると**【オータン】**の町である。

町の中の道は狭く珍しく大渋滞だった。



オータン　サン・ラザール大聖堂　　柱頭　魔術師シモンの滅亡

柱頭　　エジプト逃避

【サン・ラザール大聖堂】（Cathédral St-Lazare）のそばに駐車する。

この教会は、１２世紀に建てられたものだが、外観はその後の修正で大きく変わっている。

最大の見物は、中央扉口のタンパンであ。

この**タンパン**の特徴は、多くの銘文が残っていて、作者名、彫刻の意味などが明確に成っていることである。しかしそれらは、ラテン語（？）であったり、損耗が有ったりして、我々一般参観者には解らない。中世の文盲の信者達にもどういう意味があったのか。

　中央の巨大な「栄光のキリスト」は、裁きの神である。四隅では天使が角笛を吹き鳴らし、「最後の審判」の光景が詳細に表され、キリストの左右に天国と地獄の光景が広がる。外側のアーチは、月々の労働、「黄道十二宮」などが，地上の営みと宇宙の時間を表し，審判者キリストが全能者であることが示されている。

　ヴェズレーとは、違った表現だが、結局同じ世界観を現している。

　ここの**柱頭**は、ヴェズレーに比べると数は少ないが、やはり傑作揃いである。例えば**「魔術師シモンの滅亡」（上左図）**の彼が真っ逆様に墜落する光景の動きや表情の表現、又**「エジプト逃避」（上右図）**の驢馬にのり、キリストを抱えた聖母マリアのあどけない顔の表情など、

表現は多彩であり、又見事である。

教会西正面のそばにある**【ローラン美術館】**（Musée Rolin）に入る。
ここには、素晴らしい彫刻と絵画がいくつかある。
彫刻では、何と言っても**「イブの誘惑」（前頁下図）**である。
これは１８世紀に当時の美意識に合わなくなったとして取り外された大聖堂旧北扉口の「まぐさ」の一部である。まるで海藻漂う海底を這う様に進むイブは、罪ある女の象徴である長い髪を靡かせ、左手は腰のあたりで知恵の実を掴み、右手はそっと頬に当ててアダムに向かって囁きかける。実に独創的、大胆な構図と素晴らしい表現力である。
残念なことに、アダムの部分に関する情報は残っていないらしい。
絵画では、ムーランの親方（Maître de Moulins）によるキリスト降誕図（１５世紀）が見事である。

来た道をボーヌに戻る。
<i> に１２時過ぎに到着。２時半と、５時に出発するツアーを予約する。
二つ申し込んだので、少し割引になって３３０Ｆｒの料金だった。
そこの女性に、ツアーで飲み過ぎて車の運転に問題が生じる事が心配だと相談すると、ホテルに車を置いて､歩いてここにいらっしゃいと言う｡帰りは､ツアーの車でホテルまで送ってくれるとの事。ホテルまで２ｋｍもあるよと言うと、２ｋｍ位歩きなさいと素っ気ない。　外は、快晴で炎天下である。

取りあえず、ホテルに戻り、レセプションでホテルと町の中心間の公共の交通機関の有無を尋ねたが、それは無くタクシーしか利用できるものは無いという。
部屋で一休みの後、レストランで軽い昼食を取り、タクシーで　<i> のそばまで行く。チップ込みで５０Ｆｒ。
早く着きすぎたので、周りを散歩する。ワインや関連の器具を売る店も多い。

下に、今日**【ワインツアー】**で回るコート・ドールとその関連地区の略図を示す。
（普通の地図と違い、右が北である事に注意）　o 印はコミューン（村）を示す。
コート・ドールはブルゴーニュの中心地であり，最良質の赤・白ワインの産地としてあまりにも有名である。フランス語の**コート・ドール（Côte d'Or）**は「黄金の丘」という意で，なだらかにうねった丘のぶどう畑に収穫間近いぶどうの実が秋の太陽の直射日光を浴びて照り映え，黄金色にひかり輝いている姿を形容した言葉である。

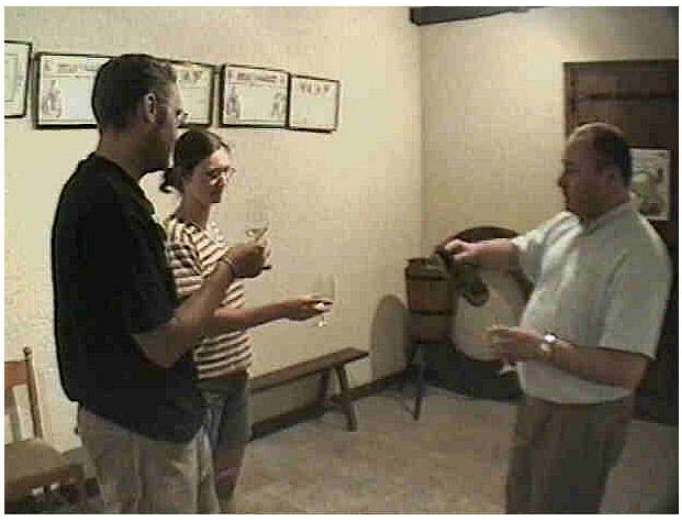
```
<---HCB---x---------> <-------------HCN---------->                          W
                     |                                          |
 1o   2o  3o     4o5o|       6o    7o 8o  9o  ao                -------> N
            ◎            ◎                      ◎              |
          Beaune      Nuits-St-Georges          Dijon            E
```

<Côtes de Beaune>
1: Puligny-Monrachet　2: Meursault　3: Pommard　4: Aloxe-Corton　5: Ladoix-Serrigny
<Côtes de Nuits>
6: Vosne-Romanee　7: Vougeot　8: Chambolle-Musigny　9: Gevrey-Chambertin　a: Fixin

HCB : Hautes Côtes de Beaune　HCN : Hautes Côtes de Nuits　x : Meloisey

このコート・ドールは、その北半分をコート・ド・ニュイ、南半分をコート・ド・ボーヌと呼ぶ。それは、各々の中心地が**ニュイ・サン・ジョルジュ**と**ボーヌ**であることに依る。
コート・ド・ニュイからは、シャンベルタン（Chambertin）やロマネ・コンチ(Romanée - Conti)など最高級の赤ワインが産出する。
又コート・ド・ボーヌからは、コルトン・シャルルマーニュ（Corton - Charlemagne）やモンラッシェ（Montrachet），ムルソー（Meursault）など偉大な白ワインとかなり優良な赤ワインを産出する。

コート・ドールは南北はおよそ 60 ｋｍあるが、幅は平均で 650 ｍしかない。
葡萄畑はそこだけではないわけで、実際にはその西側(高度が高い)に可成りの幅で存在している。それが、図に
〈-----〉で示した「オート・コート・ド・ニュイ」と「オート・コート・ド・ボーヌ」地区である。
ここは、有名ではなく、あまり本などでも触れられて居ないが、そこに住む人々はコート・ドールと複雑に絡み合って生活しているのである。



２時半を少し過ぎた頃、ミニバス（１０人乗り）が現れ、横にワインツアーの看板を立てる。早速乗り込んだが、今回は客は私の他はカナダから来た若夫婦だけであった。
運転手、兼ガイドは、５０がらみの背の低いでっぷり太った男である(**上左図**の右の男)。

あとで解ったことだが（私の想像も入っている）、彼はオート・コート・ド・ボーヌのメロワゼ（Meloizey　上図に x で示したあたり）に醸造所を持っていて、副業（どちらがそうか解らないが）としてこのガイドをやっているのではないかと思われる。

ボーヌの町を出、ポマールの丘の中腹に一面に広がる葡萄畑の中の道にバスを止め、コート・ドールの概要、そこから見える景色（ムルソーの教会が遥かに見えて美しい）などの説明をする。(上左図)
男の英語は、かなりしっかりしたもの。カナダ人夫婦がいるものだから、話すスピードがどんどん上がっていき、聞き取れないところも多かった。
それから、男は畑の中、村の中の曲がりくねった道を曲芸的に車を操る。
それも助手台のカナダ人（夫の方）の方に顔を向け話しながらである。
顔見知りも多いのだろう。道ですれ違う男達とも一言、二言声を交わす事も屡々だった。
いろいろ連れ回され、（車から降りる事は無かった）ハッキリしないことが多いのだが、ムルソーの教会（かなり立派）、ヴォルネの小さな教会を見た事と、シャトウを一つ見た事は覚えている。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第９報　　敏翁

それから、車は丘の上にどんどん登っていく。オート・コート・ド・ボーヌに入ったのだ。殺風景な、日本で言うなら町工場の裏みたいなところに車を止め、（そばに葡萄畑専用の耕耘機（？）が置いて有った）、そばの扉の錠をあけ中に入る。
そこは醸造所であった。一通り工程に随って説明が有った後、地下の貯蔵所（相当多数の大樽や推定１万本以上のボトルがあった）の脇の部屋で、男の解説を聞きながらの試飲である。**(前頁右図)**
部屋の壁には、Domaine Mazilly Pere et Fils と **Proprietaires à Meloisey** と書かれ紋章も描かれていた。それで、この村はメロワゼで、この醸造所は Mazilly らしい事が解ったのである。
男は、白、赤いろいろなワインをテイスティングのやり方の指導とともに飲ませてくれ、これはムルソーの一級なみであるとか、これはポマールのＡＯＣなみとか説明する。しかしボトルにラベルが貼ってあるわけでも無く、疑い出すと味覚などと言うものは、気分次第のところもあるのであろうか、残念ながらあまり上等のものであるとは評価出来なかった。
私は、昨夜ホテルで呑んだワインのデータを見せて評価して貰った。良い物だが、町で買えば値段は１／２～１／３だよとの事であった。　（レストランの値段と町で求める値段の比はこんなものが常識らしい）

ここでもワインは買える。50～80Fr 程度と記憶している。夫婦は２本ほど買っていたが、私はワインを持ち運ぶ準備（アイス・ボックス的な物が必要と思う）がないので、やめた。
ワインが入ると口が滑らかになる。帰りの車の中の若夫婦との会話で、彼らはこれから、ドイツ、東欧と全体で２週間の旅行を楽しんでいる事が解った。　私のスケジュールを話したところ、彼らにはフランスだけで３週間も滞在する事が理解できないらしかった。
ボーヌの **<i>** の前に戻り、若夫婦と互いの旅行の幸運を祈念して別れる。

１５分ほどの後、同じ車、同じ男で「**午後５時からのツアー**」が始まった。
今度の相客は、スェーデン人の中年の夫妻である。バスはとあるホテルに立ち寄る。ここで、東洋系（ベトナムあたり？）の若い女性２人が乗り込み、今回は全部で５人である。

今度は、**コート・ド・ニュイ**が行き先であり、前よりもロング・ドライブである。**ロマネ・コンティ（左図）**（Vosne-**Romanée** 村にある）、シャンベルタン(Gevrey-Chambertin 村にある）の畑、シャトウ等を見たが、説明を聞きながらそばを通り過ぎるだけだ。
又、悪いことにさきほど試飲したワインが利いてきて、１／３位は居眠りをしてしまう始末だった。

やがて帰り道に就き、場所は後で考えてもハッキリしないのだが、オート・コート・ド・ボーヌの北端あたりと思われる小さな醸造所に入る。男の説明では、経営者が先年亡くなり、娘が後を継いでいるの

だそうだ。
　地下の貯蔵所も、前のところより大分狭い。その一隅にテーブルを置いてそこがテイスティングの場所である。小柄のすこしやつれた感じの４０歳位（？）の女性が、挨拶に出てきた。さきほどの後継者であると紹介があった。
　此処でも大分呑んだが、どうもコート・ド・ニュイ（これが夕方のテーマであった筈）のワインとの関係が理解できなかった。
　ここの裏庭には、女性の経営者のためか、丈を伸ばした小さな葡萄の木が植えてあって（ワイン用に剪定したぶどうの木は高さ５０ｃｍ以下）、やや風情があった。そばにはやはり、専用耕耘機が置いて有った。

　帰りは、ボーヌの駅（SNCF）に立ち寄り、東洋女性が降り、<i> の前でスエーデン人と別れる。私はホテルまで送ってもらった。

　振り返って見ると、期待が大きすぎたためか、このワイン・ツアーからは幻滅を感じる事が多かった。

　ホテルに戻り、先ず洗濯物を受け取る。これで着替えはもう終わりまで大丈夫だ。
　大分飲み過ぎて、食欲があまりない。
　ホテルのレストランで、軽い夕食にした。アントレは「海の幸」の入ったサラダ風のもの。メインは鱸が炒めたほうれん草の上に乗った物である。
　ワインは、例の１５０ｃｃ一杯だけ
　Chablis Premier Cru ″Les Vaucupins″ 1994 のＡＯＣ 36Fr である。

『シャブリ地区はブルゴーニュの最北端のヨンヌ県内にあるシャブリの町を中心としたぶどう栽培地であり，ディジョンの北方１３４ｋｍの地点に位置し、他のブルゴーニュのワイン産地とは、ここだけ飛び地になっている。
　シャブリのワインはフランスの白ワインのなかでもトップ級に格付けられる。色は明るい緑がかった黄金色で，洗練された芳香を備え，味わいは非常に辛口であるがスッキリと清澄である。シャブリは切れ味のスッキリした酒質なので，魚料理，牡蠣料理，それにあらゆる白身の肉料理には絶好の伴侶となっている。
シャブリ地区で産するワインのＡＯＣには次の４つがある。
1)　シャブリ・グラン・クリュ（Chablis Grand Cru）
2)　シャブリ・プルミェ・クリュ（Chablis Premier Cru）
3)　シャブリ（Chablis）
4)　プティ・シャブリ（Petit Chablis）
　ここでは、4,3,2,1 の順にランクが高くなる。1,2 は特定のクリマ（ぶどう園）のワインに対して適用される。』
（「新版　ワインの知識とサービス」より抄録）　今回のは、この 2）である。すっきりとした呑み口で、今日飲み過ぎの胃にも抵抗無く収まった。疲れが溜まり、ベッドで着替えもせずに眠ってしまった。

【５月３１日（土）】

４．９　オーセール（Auxerre）、ポンティニイ（Pontigny）

本日は、オーセール、ポンティニイを訪れた後、ロワールのオルレアン迄進みたい。今日は初めからロング・ドライブの積もりである。
魔法瓶にお茶を仕込んで出発する。
直ぐ高速（Ａ６）に乗り、１６０ｋｍほどでオーセールへの出口である。
ヨンヌ川沿いに走ると、丘の上に大聖堂がそびえ立っている。その道沿いの<i> を訪ね、市街地図など資料を貰う。そのそばの細い坂道を登っていくと、**【サン・テティエンヌ大聖堂】**（Cathédrale St-Etienne）の西正面前にある駐車場に到達する。
このゴシックの大聖堂は、１３～１６世紀に建てられた。　西正面は４層のアーケードから成る重厚な物だが、１６世紀の宗教戦争で殆ど完全に破壊されている。
内部では、ステンドグラスが素晴らしい。
クリプトのみが１１世紀のロマネスク時代の教会の遺物である。１１～１３世紀のフレスコがある。

オーセール 「サン・ジェルマン博物館」
ガロ・ロマン時代の 「白い土の小像」

近くの**【旧サン・ジェルマン大修道院】**（Ancienne abbaye St-Germain）には道が複雑で２度ほど道を間違え、ぐるぐる大聖堂の周りを回った後やっと到達した。
ここは、オーセール５世紀の司教 St Germanus の墓の上に、６世紀にベネディクト派の大修道院として建てられたものだが、上部は１３～１５世紀にゴシックに建て替えられた。その後１９世紀初頭内陣の西の部分が破壊され、いまでもそのままである。
クリプトは、ガイド付き参観になっている。ここには St Germanus の墓があり、又フランスで最も古いフレスコ
（８５０年）に属するものがある（サン・テティエンヌの殉教・他）。色は大分薄くはなっているが画像としてはしっかりしていた。

隣にある**【サン・ジェルマン博物館】**（Musée St-Germain）に入る。
ここは、この地区の考古学的な展示が多く、ガロ・ロマン時代の建築、習俗、宗教など広範囲に亘っている。
ここで再び、ムーランの博物館で見た**「白い土の小像」（上図）**が展示されているのを見つけた。ここは撮影出来そうだったので、フラッシュ撮影した。
ガラス越しなのであまり写りは良くないが、これは、私のアルバムでも資料価値の高いものとなった。

ここで、車に戻り、ゆっくりお茶を飲み、少し休んだ後、ポンティニイに向かう。
【ポンティニイ】はオーセールの北約１７ｋｍにある。
ここは、シトー派の中でも重要な位置を占める**大修道院**である。

『１１１２年に老若３０人の信者とともにベルナールがてシトーの修道院に入った。後にクレルヴォーの修道院長として全西欧にその名を馳せる聖ベルナールの一行である。この時からシトーは急速に発展を開始する。以後８年間に１２の修道院が新設される。そのうち、最初の４修道院、すなわち１１１３年建設のラフェルテ、**１１１４年のポンティニイ**、１１１５年のモリモンド、１１１８年のクレルヴォーが「**父修道院**」と呼ばれる特別の地位を後々まで占め、「母修道院」であるシトー修道院とともに、傘下の「娘修道院」を統轄する、修道会の要石となるのである。』

（今野国雄　「修道院」　近藤出版社　１９７１　より）

そのポンティニイである。しかもここは、ほぼ昔の姿を留めているのである。　西正面からまっすぐに伸びる広い参道の脇に駐車、参道の両側の高い木が作る涼しい木陰を歩いて正面に向かう。シトー派であるからここも飾りなど殆どない。扉口から内部に入って、その異様なまでの明るさに驚いた。総ての壁面が真っ白に輝いているかのように感じた(上図)。

教会内部の飾りのない簡素な美しさと、この明るさは、見る者の精神にすがすがしさと一種の精神の高揚を与えてくれる。

こんな経験も始めてであった。

ほぼ午後１時である。これから、ロングドライブでオルレアンに向かう。

Ⅴ．ロワール、シャトーとフレスコ

５．１　オルレアン（Orleans）

以下の旅行記の理解を助ける為にオーヴェルニュ地方の訪問地を下の地図に示す。

オーセール方向へ１０ｋｍ程戻り、Ａ６に入る。

又、思いこみによる間違いをしてしまった。てっきり、オルレアン方面降り口と言う標識が現れると思っていたが、何時まで経っても出てこない。

パーキング・エリアに出て、そこの売店でサンドイッチとスプライトを買い車の中でランチを取り一息入れる。売店にワインも沢山売っていたので、その品質レベルも知りたくなり、**Bourgogne Aligoté** のＡＯＣ 1994 ハーフボトル 20Fr を購入してみた。　今晩、ホテルで試してみよう。

『Bourgogne Aligoté はぶどうの種類としてアリゴテのみ、もしくはシャルドネとの混合でつくられる白ワインにのみ用いられる』第９報で記した「総体的な地方名のＡＯＣ」即ちＡＯＣとしては最低ランクのものである。

又暫く走ったが、どうも様子がおかしい。
再びパーキング・エリアに出て、地図を調べたが良く解らない。見るとこのエリアの中に、メルキュール・ホテルがある。そこに入って行って、尋ねた。４０ｋｍも行きすぎていると言う。この地方は初めてかと聞かれ、それでは無理もないと頷かれる。同じ様な事がちょくちょくあるのか？　このすぐ先のインターチェンジを降り、逆方向に走り、Dordives 分岐と言うのがあるから、そちらへ入り、後は Montargis を目指して行けばその内オルレアンの標識が現れる筈と教えてくれた。Montargis が重要だという事は全く解らなかった。（その先の Châteauneuf と言う町が重要と考えたのだがその標識も高速には出なかったように思う）
とにかく教えられた通りに走り、どうやら午後５時近くになってオルレアンに到着できた。
オルレアンは大都市である。ここの <i> は、アクセスが難しそうなので、そばの地下駐車場に入り、２本の道路を跨いで建っている建物の中にある <i> に行き、市街地図、ホテル・レストランのリストなどを貰った。

面倒くさくなってきたので、ホテルはそばにしたい。そこから歩いて３，４分のところにあり、駐車可能となっている　**Hôtel Abeille**（蜜蜂）２星に決め、歩いていって予約する。駐車はホテルの前の道路にすれば良く、そこは一般には有料だがホテルの客は無料になっている。地下駐車場からここに到達する道順（一方交通ばかりである）を教わり、車を持って来た。

本日の走行距離　３９４ｋｍ　一日の記録を更新した。

ホテルに入って、高速のパーキング・エリアで買ったワインを見てから、栓抜きを持っていないことに気づく。またこのホテルは、ミニバーが付いてない（冷却出来ない）事も解った。ワインは水で多少とも冷やす事にし、町に散歩がてら栓抜きを探しに出かけた。
ホテルの横は、一番（？）の目抜き通り（レパブリック通り）であり、丁度夕方の混雑時であった。とある土産物店で栓抜きを見つけたが、それはワイン（土産用に派手なラベルの付いたものだった）に付属しているものでワインは３００Ｆｒだと言う。栓抜きだけが欲しいのだというと、Carrefour（十字路の意、<i> が入っている建物 ）の中に売っている店が在る筈と教えてくれた。
そこで、スクリュウ式（スクリュウを押し込んでいくと、自然に栓が持ち上がってくるタイプ）の栓抜きを６５Ｆｒで求めた。
ホテル（レストラン無し）から歩いて３分ほどの所にミシュランのフォーク２つのレストランがあり、行ってみると今日は予約で一杯だと言われる。

レパブリツク通りの突き当たりが**【マルトロワ広場】**（Place du Martroi）で、**ジャンヌ・ダルク像**がある事で有名だが、周りにレストラン、ブラサリーの類が集まっているらしい（ <i> で貰った資料より）。それでそこまで足を伸ばすことにした（７,８分）。見て回った後、広場に面した大きなレストラン　La Chancellerie （ミシュラン　フォーク２つ）に入る事にした。

アントレ、メインに各々小さなカップ（１００ｃｃ程度）のワイン（地酒？）がついているメニュウにした。ホテルでは例のワインが待っているからである。　この２つフォークの店は、大きいのだが、ざわざわしていて、ワインは催促しないと持ってこないなど雰囲気があまり良くなかった。
暗い中に立つ騎馬に跨ったジャンヌ･ダルクの銅像(参考図)の周りを散策してから帰路についた。

明朝もう一度明るいところで見てみることにした。

ホテルで、例のワインを開けたが、白としては、やはり冷え方が不十分な為か充分楽しむ事は出来

なかった。

【６月１日（日）】　終日風強し。

レバブリック通りは、一方交通で、マルトロワ広場には直接行けない。

それで、先ず**【サント・クロワ大聖堂】**（Cathédrale Ste-Croix）に行ってみると、ミシュランでは何時でも開いている筈なのだが、９時半開門と書いて有る。

大聖堂西正面からまっすぐ伸びているジャンヌ・ダルク通りを通って、マルトロワ広場に行き、ビデオ撮影などで時間を過ごす。**ジャンヌの銅像(左図)**は１８５５年のものである。

時間になり、大聖堂西正面そばに戻り駐車する。このゴシック大聖堂の工事は１９世紀まで及んだのだという。ファサードの構成、彫刻とも素晴らしい。

内部は、５列の身廊を持つ広大な空間である。内陣左手の**ジャンヌ・ダルク礼拝堂**では、高いところに剣を持ってすっくと立っているジャンヌ・ダルクの斜め右下に、ジャンヌ崇拝を広めたトゥーシェ枢機卿の彫像が彼女の方を向いて立っていた。

５．２　シャンボール城館（Château de Chambord）

折角ロワールに来たのであるから、日本でも評判の高い**ロワールの城館**をいくつか見ることにした。全部見るには時間が足りないので、最も大きいシャンボール、と私にとってその名前に懐かしさのあるシュノンソー（理由はそこで話します）、及びアンジェ（厳密にはロワールの城館に含めない）を選んだ。

町を出て、ロワール川の北岸に沿うＮ１５２でシャンボールに向かったが、この道は、信号が多く、まるで日本の「一国」を渋滞時に通って居る感じで失敗であり、並行して走る高速を使う

べきであつた。
　さすがにここは敷地も広い。門らしいところを入ってから、これ又広い駐車場に到着するまで車で、５分もかかったろうか。日曜でもあるためか、駐車場もほぼ一杯になっていた。

　幅１５６ｍ、奥行き１１７ｍの規模を持つ【シャンボール城館】（前頁図）は、ロワール河畔の城の中で最も広く、巨大さの点でヴェルサイユ城館の登場を予告する存在である。
　城館を取り巻く庭園は、現在は国立狩猟公園になっているが、総面積 5500ha に及ぶ広大なもので、そのうち 4500ha が森林である。
　この城館は、フランス国王フランソワ一世（1515-1547）が金に糸目を付けずに作らせたものだが、後継者アンリ二世（1547-1559）の死去の時も、未だ未完成だった。ルイ１４世(1643-1715)も良く滞在し、大改修工事を命じている。
　とにかく規模が大きく、この城館には４４０の部屋があるという。
　以降、歴史的に紆余曲折があったが、現在は国有財産である。

　その外観が目に飛び込んできた時には、その異様さに驚いた。城館の上には目に入るだけでも２０以上の大小様々な形をした塔が見る者を圧倒する様に聳えている。まさしく王の権威・力そのものの建築による表現だと思った。
　ヴェルサイユでは、表現はより穏やかな者になっていくのだが。

　城館内の居室群は、タペストリーや絵画で飾られ、豪華なベッドがあり、部屋毎に色調など工夫が在る。確かにルイ１４世の居室などは立派である。
しかし私の様な歴史に疎い者には、それぞれの居室住人にあまり馴染みがないためか、２，３見るとあとはもう飽きてしまった。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第１０報　　敏翁

４．３　モントワール（Montoire-s-le-Loire）、ラヴァルダン（Lavardin）

　これから、ル・ロワール川沿いにある、フレスコで有名な教会（いずれも小さい）の中から２つ選んで訪れたい。
　尚、ル・ロワール川（le Loire）は、大河ロワール（これは　la Loire)の北方をほぼ並行に流れる支流で、アンジェの南で合流する。

　シャンボールより、ブロワを抜けＤ９５７でヴァンドームの町に入る。
　ここはかなり大きな町で、〈i〉がある。そこで情報を得ようとしたが、日曜で休みだった。今日は〈i〉を頼らずに行動しなければならないだろう。　そろそろガソリンが心配になってきたが、ガソリンスタンドも休みだった。

　町を出て、Ｄ９１７でモントワールにガソリンスタンドに気をつけながら向かった。そして、カードで出来る完全な無人スタンドを見つけた。操作がフランス語のディスプレイを見ながらなので、自

信は無いがやってみた。すると、入れたカードが出てきてしまい、「あなたのカードは使えない」との表示が出た。困っていると、後からまた一台車がやってきた。その男に事情を話すと（幸いなことに英語の上手な男だった）、自分がやってあげようと私のカードで操作してくれる。しかし状況は変わらなかった。すると男は、自分のカードで入れてあげるけれど、その分現金を渡してくれるかと聞く。当然ＯＫし、彼のカードでガソリンを入れることが出来た。

お礼の積もりで、＋アルファの金を渡そうとしたが絶対受け取らなかった。感謝と握手で別れた。

モントワール・シュル・ル・ロワール
サン・ジル礼拝堂

【モントワール・シュル・ル・ロワール】（Montoire-sur-le-Loire）の町に入り、ル・ロワール川を渡るとすぐ、

【サン・ジル礼拝堂】（Chapelle St-Gilles）の標識が見えた。車の入らない細い道の奥にあるらしい。道ばたに車を止め、行ってみると、まことに小さな礼拝堂があり、塀の門に、M.Chereau,33 bis rue St-Oustrille à droite、en quittant la rue Saint-Gills　の所に鍵があると書いた紙が貼ってあった。

これを写し、車に戻って辞書を引きながら探し方を考えていると、細い道の入口あたりで標識を見ている私と同年輩の夫婦を見つけた。早速話しかけた。彼らはフランス人だが、男は英語が達者でやはり、目的は同じだった。

彼は、すぐその場所を見つけてくれた。私の車を止めた場所から３０ｍほど先にある土産物屋であった。そこで鍵を男と、私と別々に預かる。（一つでも良いような気がするのだが、フランス人の個人主義の現れか？）

礼拝堂は、ロマネスクのもので、小さいが誠に趣がある(上左図)。

中は、後陣、北翼廊、南礼拝室に分けられ、各々が年代の違う**フレスコ壁画**で飾られている。後陣（１２世紀初頭）が最も古いのだが、画は一番良く残っている。天使達を従えた**「黙示録のキリスト」（上右図）**だが、コントラストのはっきりした画像である。南礼拝室のキリスト像(12 世紀）には、ビザンチンの影響がハッキリと見える。北翼廊のキリスト(13 世紀）が一番保存状態が悪いが、ミシュランによると、この地方の一派の誕生を示しているとある。私には素養が無いためか、どこがそうなのかさっぱり解らなかった。フラッシュ撮影をした。

土産物屋に戻り、鍵を返す。フランス人夫婦にこれからラヴァルダンに行く事を伝えると、既に行って来たようで、今日は特別の展示が町役場であるので楽しみなさいと言うような事で別れた。

【ラヴァルダン】はル・ロワール川の対岸隣町である。近づくと、丘の上に巨大な廃墟の城が現れた。道添いの町役場の一階広間では何か個人の絵画の展示があり、眺めていると、男（役場の人か？）がラヴァルダンの町を紹介したカラー写真入りの小パンフレツトを渡してくれた。

そこから**【サン・ジュネ教会】**（Église St-Genest）は歩いてすぐの小高いところにある。小さな町にしては立派な教会（１２世紀）である。

中には、１２世紀～１６世紀の**フレスコ壁画**が多数存在している。
後陣奥の半ドームにはマンドラ内のキリストを４福音書記家の形象が囲んでおり、その両脇の壁面には、右にキリスト受難、左に洗足式の場面が描かれているが、いずれもかなりはっきりと残っている。
他に側廊にも、いくつかフレスコがあった。フラツシュ撮影。

モントワール、ラヴァルダンのフレスコは、たっぷり見たと言う感じで大いに満足した。

４．４　アンボワーズ(Amboise)、シュノンソー城館(Château de Chenonceau)

ロワール川（大きい方）河畔のアンボワーズに宿を取り、そこからシュノンソーに往復する事にした。
ラヴァルダンよりアンボワーズまで約５０ｋｍである。
河畔の〈i〉のそばが駐車場に成ってる。車を止めて覗いてみたが、やっぱり休みだった。ミシュラン・レッドで道順を研究した後、町中に入って行き、 **Hôtel Blason** ２星　の前の小さな公園に車をとめる。ここも有料駐車場だがホテル泊の者は無料となっている。 午後４時を回っていたが、ここを予約してからシュノンソーに向かった。
ホテルからシュノンソーまでは約１０ｋｍ程度である。

【シュノンソー】を選んだのは、全く個人的な理由からであった。
西新宿のセンチュリー・ハイアットにシュノンソーという高級フランス料理店がある。ここは、私のいた会社（本社がそのそばにあった）が、ここを接待や、役員慰労会などに良く使っていて名前だけは知っていたのである。
そこのメニューなどには、シュノンソー城館の絵が描いてあったように記憶している。
そんな事で、ここを選んだのである。

ここは、日本人にも人気が高いのであろう。受付で日本語のパンフレツトを貰った。そこからプラタナスの並木道を通って**【城館】（上左図）**に至るのだが、段々に城館が見えてくるのも気持ちが良い。
シャンボールと比べると、ここは非常に女性的な感じがする。
それも当然、ここは奥方たちの城館（Le Château des femmes）とも呼ばれ、多くの女性たちがヒロインを演じた舞台であったのだ。

それは、アンリ二世の寵愛をほしいままにした彼より２０歳も年上だった永遠の美女**ディヤーヌ・ド・ポワチェ**と正妻でアンリ二世死後は摂政となった**カトリーヌ・ド・メディシス**（彼女も相当な女。サン・バルテルミーの大虐殺と彼女の関係には謎が多い）の女の戦いなど、数々の波瀾に満ちた物語で満ちあふれている。

城館は、シェール川（Cher　ロワール川の支流、トゥールのやや下流で合流する）をまたぐ形で建っている。**（前頁右図）**

上記の二人の使っていた部屋などを見た後、長い（６０ｍ）回廊によりシェール川を渡り、対岸の森の中を散策した。

森の奥に、やはりヒロインの一人であった**デュパン夫人**の墓がひっそりと建っていた。彼女のサロンがきっかけとなってジャン・ジャック・ルソーの教育論「エミール」が執筆されたのだという。

ホテルに戻ったのは、午後７時半だった。

ホテルのレストランで夕食をとる。

アントレは、フォワグラ（ソーテルヌでマリネ）、メインは羊の肉の炒め物、　チーズとデザート付き。

ワインは、Val de Loire　Touraine の赤ＡＯＣ　1992 12% 750cc 75Fr（少しアルコールにも強くなった感じなので、今回から気分に乗ればフル・ボトルにすることにした）

『ロワールのぶどう産地はロワール流域に点々と続いている。そして，そのぶどう園から生まれるワインはどれもこの地方の温暖な気候と日当たりのよい地形が影響して，種類の豊富さと繊細な味わいを誇っている。ロワールのワインは全体的には軽く口当たりのよいものが大半である。確かにその味は魅力的で良質であるが，ボルドーやブルゴーニュに勝る秀逸性はない。それらのワインは栽培者やシャトー名で売られることは少なく，だいたい地区やコミューン（村）のＡＯＣ名称をつけて売られている。

ロワールのワイン産地は次の４つに分けられる。

1)　中央フランス地区（Centre France）

2)　トウーレーヌ地区（Touraine）

3)　アンジュとソーミュール地区（Anjou et Saumur）

4)　ナント周辺地区（Pays Nantais）』（「新版　ワインの知識とサービス」）

今回のはこの 2）である。

この地では、フォワグラにソーテルヌ（ボルドー・ソーテルヌ地区で出来る貴腐ワイン）の一杯が付くと言うことは無いのか？その代わりに、ソーテルヌでマリネしてあるのだろう。

ワインは、今までのものと比べて安価すぎ、多少不安も感じたが、今晩の　トーレーヌは、口当たりと香りが良く、フル・ボトルも難なく平らげた。

【６月２日（月）】

４．５　リジェ（Liget）、サン・テニャン（St-Aignan）

リジェのサン・ジャン礼拝堂のフレスコ壁画を見るには、マダム・アーノルドに事前に電話予約が必要らしい。（ミシュラン）　それで、今回もホテルの親父に電話で連絡をして貰った。訪問時間の設定が必要らしいので、これから直接行くとして１０時頃とした。　親父は彼女が修道院で待ってい

る、又彼女は英語が少し出来るようだと言う。

本当は、先にサン･テニャンへ行ってからリジェの方がその後を考えると能率が遥かに良いのだが、それでは到着時間が読めないので、先ずリジェとせざるを得なかった。

Ｄ３１を南下約３０ｋｍで、ロッシュ（Loches）の町に至る。ここでＤ７６０に入り東進１０ｋｍでリジェに行くことが出来るのだが、ロッシュの町が複雑でここで道に迷い、２０分ほどロスをする。

ロッシュの森を抜けると、Ｄ７６０沿いに**リジェ・カルテジオ会修道院**（廃墟）の大きな壁が建っている。立派な門があり、そこを入っていくと、中年の女性が大きな黒い犬を連れて待っていた。マダム・アーノルドであった。

建物の一部が事務所の様になっていて彼女は受付（？）として、務めているのではないかと想像する。そして女一人の護身のために何時も大きな犬と一緒にいるのだろう。

その事務所のような所で、鍵を預かり、道を約１ｋｍ戻り、細い道に入っていくと畑の中にぽつんと丸い小さなお堂が建っている。 **【サン・ジャン礼拝堂】**（Chapelle St-Jean　１２世紀）**（上左図）**である。

カルテジオ会修道院を創設した最初の修道僧達が住んでいたところらしい。（かっては身廊があったのだが、破壊されて今は全く無い）

小さな扉の錠を開けて中に入ると、７つの窓があるが、その間に**６面のフレスコ**が一杯に描かれて居る。その６面は聖母マリアを中心とした六つのエピソード（エッサイの樹，キリスト降誕，神殿奉献，十字架降下，キリストの墓を訪れる３人のマリア，聖母の死）で構成されている。**（上右図）**

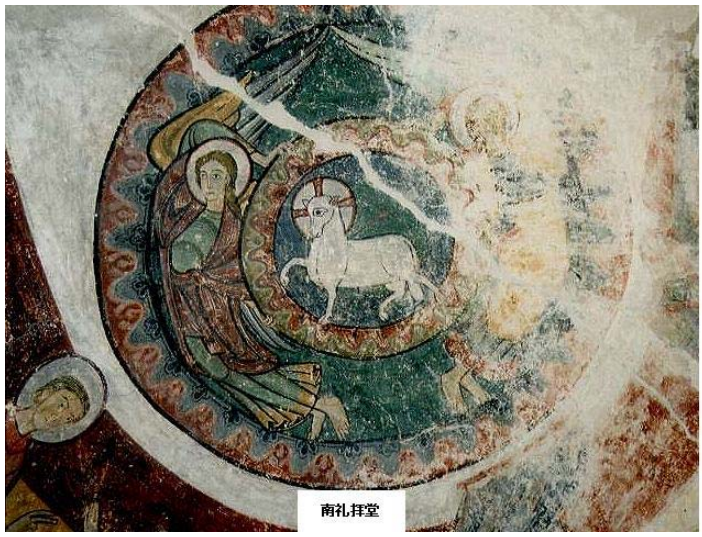
そこには淡い色調の中に、優雅でデリケートな叙情性をたたえた人物像が表現されていた。ここにはすでに盛期ロマネスクを超えた感覚が読みとれる。

今は天井には、何も描かれていないが、かっては「栄光のキリスト」と７天使で飾られていたという事である。

鍵を返しに行き、絵はがきを求め多少余分のコインを渡したら、喜んでいた。

ここから、サン・テニャンに向かう。

D760 をそのまま進み、突き当たった D675 を 18km ほど北上すればシェール川南岸にある**【サン・テニャン】**の町（シュノンソーの上流約 28km）である。



町の中心部と思われる所にある広い駐車場に車を止め、やや小高い処にある**【サン・テニャン教会】**（Église St-Aignan）に赴く。

１１，１２世紀のロマネスク様式の教会である。

中には、素晴らしい**柱頭**が多数有る。葉紋、それと人／動物の組み合わせを現したものも面白いが、「エジプトへの逃避」や「ケンタウルスの狩り」などは、ヴェズレー、オータンに次ぐ表現力を示している様に思われた。

クリプトは**フレスコ**（１２世紀～１５世紀）の宝庫である。

東礼拝堂（他と壁で仕切られている）の半ドームは中央に**「栄光のキリスト」（上左図）**があり、ひれ伏す病人／身体不自由者たちに恩寵を与えている。その両脇に「ピエタ」と「受胎告知？？」がある。他に西向き礼拝堂（axial chapel）、**南礼拝堂（上右図）**等々。いずれも色彩も鮮やかに残っている。

ここでも、夢中になってフラッシュ撮影。

教会を出て、更に高い丘の上に、立派な城（Château）がある。建物の中には入れないが、その前の広場まで行き、町を見下ろす景観を楽しんだ。

４．６　タヴァン（Tavant）、フォントヴロー（Fontevraud）

タヴァンに向かう。来た道をどんどん戻り、リジェを通り過ぎ、ロッシュの町も通り抜け（ここからは新しい道）、更にＤ７６０で西進を約５０ｋｍ続けると、ヴィエンヌ川（Vienne　これもロワール川の支流。ソーミュールの上流で合流する）だ。その橋を渡って下流方向（Ｄ７５１）へ約２ｋｍで**【タヴァン】**の町である。

Ｄ７５１から少し入ったところにある教会堂の横に駐車する。

教会の扉には、午後は１４時半から開門、とマダム・フェランが連絡先とある。マダム・フェランの家は何処かなとぶらぶら入ってきた道を戻ると、とある家の庭に８０近く（？）のお婆さんがいた。

そこで、マダム・フェランの家は何処ですかと尋ねると、いきなり大きな声で怒鳴りだした。彼女が当人で、開くのは１４時半だと言うようなことを、フランス語（方言がかなり入っているのかも知れない）の早口でまくし立てるのだ。英語は全然通じないし彼女は耳がだいぶ遠いらしい。

諦めて退散することにした。未だ午後１時半と言った処なので、何処かで昼飯でも食べながら時間を過ごそうと、探したがこの町には何も無さそうであった。車で探し回ったが、結局川を渡ったところまで戻り、サンドイッチ、ビール、カフェ・オーレで時間を過ごした。

タヴァンの教会横に戻り、フェラン婆さんの家に行くと、婆さんは又怒鳴り出した。どうも先に行って待っていろ、後から行くと言っているらしい。

扉の前で待っていると数分後に婆さんが来て、鍵を開ける。

教会内にも、良い**フレスコ**はあるのだが、ここの見物はクリプトのものだ。しかし婆さんは知らんぷりをしている。クリプトは見られるのかと尋ねると、「クリプト」だけ解ったのだろう。クリプトの錠を開けてくれる。中は写真は駄目だと言い（これは解った）、教会とクリプトは別料金だと２枚のキップを見せる。料金＋アルファを渡すと、この時だけ感謝の目つきをしていた。

クリプトは、狭く、天井も低い。ここにフレスコ（１１５０年頃）が沢山あるが、大体目の高さの処にある。これでは触られたり、フラッシュでも焚かれたら文化財が傷むだろう。保護のためには、ガイド付き参観が必要だろう。

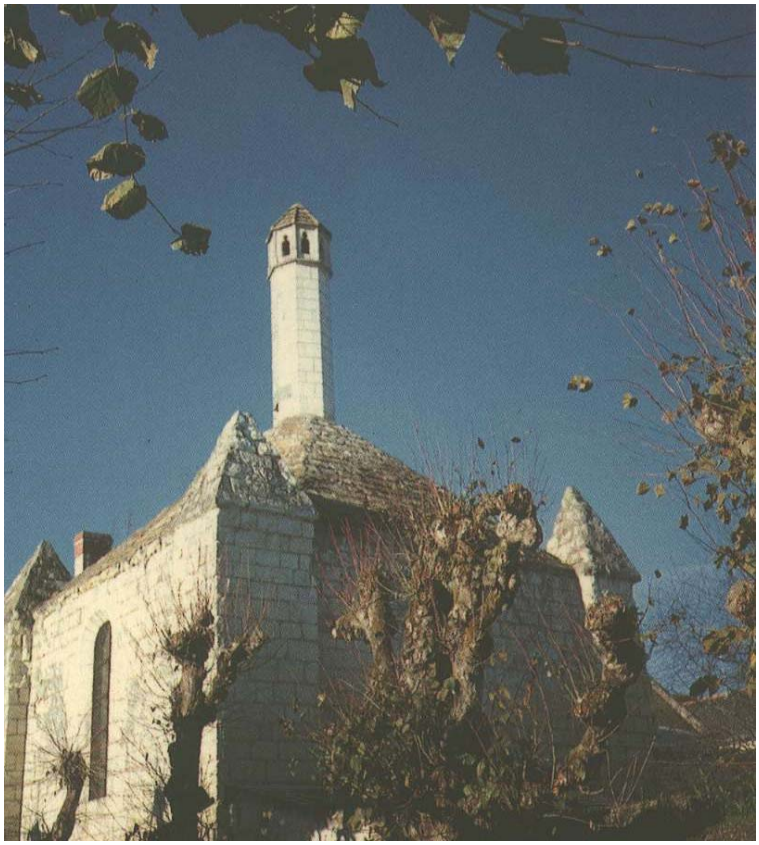
画集などで有名な**「淫乱の擬人像」（左図）**などがあったので、クリプトの外（私から４ｍ位離れていたか）の婆さんにこれらは日本でも有名だと話しかけると、又婆さんが怒鳴りだした。どうもクリプトの中では、しゃべるなと言っているらしい（?）。

クリプトの人物像は、それぞれの状況の中の「決定的瞬間」をその動きの中に一気に表現していて、筆の勢いを感じることが出来た。

婆さんに、日本語のミシュランを見せると、Chinois （中国人）だという。Japonais だと言ってもなかなか納得しなかった。

この頑固婆さんが元気な内は、ここの文化財は大丈夫だろう。

内陣のフレスコの写真を撮って教会を出た。



フォントヴローに向かう。Ｄ７５１（ほぼヴィエンヌ川沿い）を下流方向へ約２５ｋｍほど行き、奥へ少しは入ったところに**【フォントヴロー・ラベイ】**（Fontevraud-l'Abbaye）の町がある。

ここの大修道院は、見るのに２時間かかるらしい（ミシュラン）ので、そこは諦め、**【サン・ミシェル教会】**（Église St-Michel）と**【サント・カトリーヌ礼拝堂】**（Chapelle Ste-Catherine）だけ訪れる事にした。

教会は、中庭にロマネスクの絵の付いた門（１２世紀）があるとのことだったが、開いてなく、教会の中を覗くだけにした。茨の冠をつけた十字架上のキリスト（１６世紀）、キリスト磔刑図（１５世紀）などが見物だった。

そこから１００ｍほどの処に礼拝堂がある。

その建物の中に〈i〉がある。又この建物には美しい「死者のための灯明台」（Lanterne des Morts １３世紀）(前頁図)がついている。（サントンジュでも見る予定）
〈i〉の女性は暇なせいか、おしゃべりで、いろいろな資料を貰い、説明も親切にしてくれたが、長いこと相手をさせられてしまった。

４．７　アンジェ（Angers）

これからキュノー（Cunault）に寄ってからアンジェへ行く予定だったが、道を間違え、アンジェへの高速に入ってしまった。大分疲れが溜まってきて引き返すのも億劫になり、そのままアンジェに行くことに急遽変更した。
【アンジェ】の町に入り、ロワール川沿いに走る高速から町に入る場所（一ヶ所しか無い？）を通り過ぎ、あっと言う間に対岸の新興市街地に入ってしまった。試行錯誤の末やっと戻る事が出来、城塞（Château）のそばの〈i〉の前の広い駐車場に車をとめた。
アンジェは、大きな町であり、又観光の町であるためか、〈i〉も大きく、機能も充実している。
例によって、市街地図とホテルリストを貰ったが、隣の室でホテルの予約が出来ると言う。それを利用してみることにした。そこの女性は、条件を紙に書けと言う。メモ用紙に、部屋代料金４００Ｆｒ以下、バス付き、駐車可能、及び町中である事と書くと、すぐそれらしい所を見つけて、電話予約してくれた。
３６０Ｆｒだけど、駐車料が別に４８Ｆｒつくけど良いかと言うのでＯＫした。地図に駐車場からの道順をマークしてくれ、ホテルの横のここに仮の駐車をして、レセプションで正規の駐車場を教えてもらえと言ってくれる。
町中一等地にある　**Hôtel d'Anjou** ３星　である。
後で調べてみると、３６０Ｆｒはミシュランにある値段で、案内所でコミッションを取る様なことはしていないようだ。
今予約した条件を、タイプした紙をこれは大事だと言って渡してくれた。
ここの地下駐車場は、ホテルの地下に繋がっていないのが玉に傷だが、システムとしては良く出来ていて、ｶｰﾄﾞ一枚で、駐車場のドア（車用と人用）がコントロール出来、カードの無い人間は、駐車場に入ることが出来ない様になっている。
このホテルのレストラン（Salamandre）で夕食をとる。
アントレはレモン和えの冷たい鰯、メインはハーブとハシバミの実付きの子兎、チーズとデザート付きである。
ワインは、″**Château** de Passavant″ の **Anjou Villages** 赤ＡＯＣ 1994 12% フルボトル 120Fr であった。

後で「新版　ワインの知識とサービス」で調べたのだが、Anjou のＡＯＣはあるが、Anjou Villages のＡＯＣと言うのは見つからなかった。この本は１９９１年発行なので、その後に出来たのか？
ちゃんとしたホテルなのであまり変なものは置かないと思うのだが。

分厚いワイン・リストがあったので、高価なものを若干メモしてみた。
参考までに記してみる。

1) Gevrey Chambertin	1979	(Louis Latour)	490 (Fr)
2) Montrachet	1990	(Bouchaut PF.) Grnd Cru	1300
3) Château Mouton Rotschild	1975	Magnum *	4000
4) Château Chval Blanc	1949	Premier Grand Cru	4500
5) Château Yquem	1984		1900

＊：後で調べたら Magnum とは大瓶（1.5L）の事らしい。
以上の 1）はコート・ド・ニュイの赤、村名ＡＯＣ。2）はコート・ド・ボーヌの白、クリマＡＯＣ。3),4),5）はボルドーのシャトーＡＯＣで 3）は、メドツクの赤、4）はサンテミリオンの赤、5）はソーテルヌの貴腐ワイン白である。

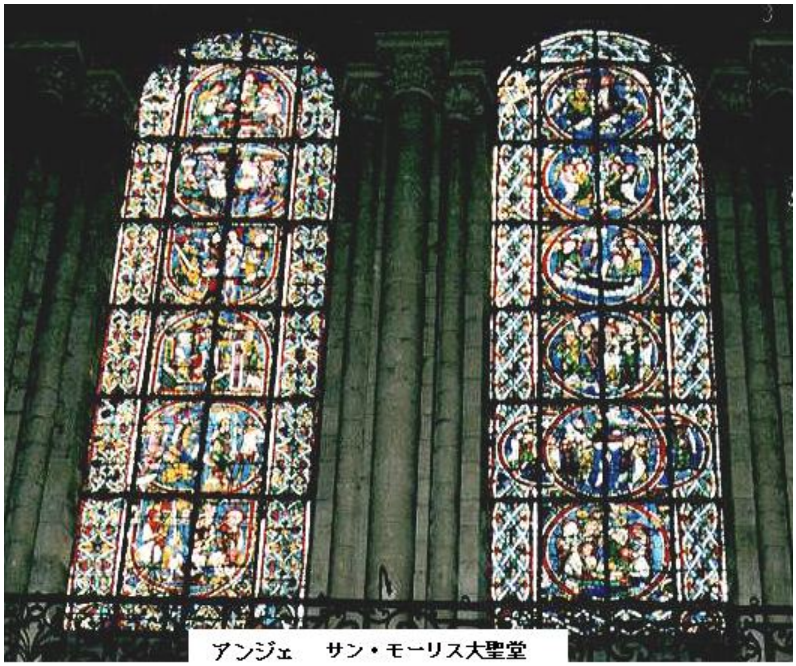
フランス紀行（ロマネスクとワイン）第１１報　　敏翁

【６月３日（火）】

朝、車を【**城塞**】入り口近くの駐車場に止める。
ここは、フランス語では同じシャトーだが、一昨日見た城館とは違って、軍事的な機能を持つ城塞である。
聖王ルイによって１２２８年から１２３８年に造営されている。周りを囲んだ深い濠に架けられた橋（昔は跳ね橋だったろう）を渡って城内に入る。
中を少し散歩した後、有名な【**黙示録の壁掛け**】(Tenture de l'Apocalypse)（左図）を見ることにした。
その保存と展示の為に作られた建物は、何重にも扉で保護され、進むに連れて段々暗くなる仕掛けだ。そして展示室に入ったとたんその余りの暗さに驚いた。長さ１０３ｍ、高さ４ｍ５０で７０枚の絵からなる、まさしく世界一のタペストリーを保存するのにふさわしい（少し大げさすぎる）展示室である。
１３７３年、フランス国王シャルルス５世は、彩色挿画入りの黙示録を弟アンジュー公ルイ１世に貸した。これがルイ１世に本タペストリーのインスピレーションを与えたらしい。１３８２年には完成していたものと考えられている。
とにかく、その規模の大きさ、描写の精密さには感動せざるをえない。
展示室を出て、もう一つの見たいもの「**千花図タペストリー**」（Tapisseries Mille-Fleurs）のある場所を探すが、標識もなければ、受付で貰った英文資料にも記載がない。受付まで戻って尋ねると、それはガイド付き参観でしか見られない事、その際の説明はフランス語しかない事、1時間かかる事、今度のスタートは１１時である事が解った。未だ１０時を少し過ぎたばかりである。それで残念ながら諦める事にして、その絵はがきを買って城を出た。
（もっと早く気が付けばもう一つ前の参観グループに参加出来たかも知れない）

【**サン・モーリス大聖堂**】（Cathédrale St-Maurice）に向かうが、もう周りの駐車場は満杯で、路傍の駐車場もどこまで戻っても一杯で結局昨日駐車した〈i〉の前の広い駐車場（ここも殆ど満杯）に戻るほかなかった。
カメラと双眼鏡とミシュランだけ持って大聖堂に向かう（うっかりして肝心な時に三脚を持って行くのを忘れてしまった）。

大聖堂（１２～１３世紀）に入ると、ここには日本語のパンフレットが置いて有った。
ここの見物は、何と言っても中の**ステンドグラス群**である。
１２世紀から現代までのものを見ることが出来るのだ。
主要なものには、見やすいところに大きな解説の看板が立っている（フランス語だが）。それらを頼りに双眼鏡で鑑賞し、写真を撮った（フラッシュ有りと無しと両方）が、旨く撮れているか心配だった。三脚を忘れた事と、実は今まで柱頭などで、持ってきたフィルム（フジＡＳＡ４００）を使い切り、一昨日シャンボールで買ったコダックがＡＳＡ１００だったからである。


アンジェ　サン・モーリス大聖堂

身廊北側の「マリアの永眠と昇天」（左図）などは１２世紀のもの。　内陣北側　１３世紀。　　翼廊の南北２つのバラ窓と北外陣　１５世紀。　などである。
北側は、光線の加減も良く、マリアなどかなり良く写っていた。

正面入り口左側にあるノートル・ダーム・ド・ピチエ礼拝堂で現代の斬新的デザインのステンドグラスを見た。

駐車場に戻り、そばの土産物屋にコダックＡＳＡ４００があり、４本購入。
こういう所だからやむを得ないが、一本６５Ｆｒ（～１４５０円）と高い。

【サン・セルジュ教会】（Église St-Serge）に向かう。
教会前に駐車出来た。ここは無料。　ここは遅ればせながら三脚も持って教会内に入る。
現在の建物は、百年戦争で崩壊したロマネスクの身廊の上に１５世紀半ばに建てたものである。
大聖堂とはひと味違った落ち着いた色調のステンドグラス（１５世紀）が、すかすがしい雰囲気を作っている。三脚を据えてじっくり撮影。細部までくっきり写っていた。一時間ほど中に居たが、参観者は私一人だった。

そばのバーで軽い昼食を取る。グリーン・サラダとビールを頼んだが、サラダが葉っぱだけなのには参った。普通はパンが付いているのだが。もっとも値段が１０Ｆｒと安すぎた。

午後２時になるのを待って、メーヌ川（la Maine）を渡ったところにある**【ジャン・リュルサと現代タペストリー美術館】**（Musée Jean-Lurcat et de la Tapisserie Comtemporaine）に向かう。美術館などがある一画とメーヌ川の間が非常に広い駐車場（無料）になっていて、そこ（がらがら）に車を止める。
美術館の周りも、古い礼拝堂があったり、なかなか趣がある。
美術館は、数日前までは、現代タペストリーの展示があったりしたようだが（そのポスターが未だ残っていた）、それも終った為か、ひっそりとしていて参観者は私一人であった。
この美術館は**リュルサの「世界の賛歌」**（Chant du Monde）と言うタペストリーのシリーズ大作の為にある様なものである。総延長８０ｍに及ぶ１０枚の作品は、彼が例の「黙示録の壁掛け」を見て感動し、製作したものという。
極めて壮大、且つ斬新的な作品であるが、私は世の中で評価されているほど（ミシュランは２星をつけている）には、感心しなかった。

これで、ロワールの旅は終わり、ポワチィエに向かうことにする。

Ⅵ．ポワトゥー、サントンジュ　ロマネスクとトラブル

６．１　ポワティエ（Poitiers）

アンジェからポワティエには高速が走っていない。道は標識がしっかりしているから、間違えることはないのだが、片側一車線のところが殆どで、前に重量運搬車がいると、なかなか追い越しが出来ず、時間がかかる。

それでも、午後５時半頃には、【ポワチィエ】の町に着いた。

地域圏（region ここは Poitou-Charentes ）の役所（**Hôtel de Region**）前に駐車する。例によって〈i〉を探し、市街地図とホテルリストを要求した。しかしここは今までで一番サービスが悪かった。地図は、Ａ４サイズで何かをゼロックスでコピーしたもので、とても見にくい。リストも電話番号が乗っているだけのもので、地図で探しようもない。弱ったなと駐車場に戻り、きょろきょろすると、目の前に Chapon Fin ２星というホテルがある。去年モワサックで泊まったとき同名で良かったホテルだった記憶があったので、行ってみる。

駐車も可能だというのでそこにする。車はホテルの裏手に止めるのだが、そこが恐ろしく狭く、ホテルの親父に納めて貰う。

しかしホテルは、モワサックのと違い、レストランが無い。

ミシュラン・レッドで探すと、歩いて直ぐの所にフォーク３つで且つ星一つのレストランが在る。

だいたい、ミシュランの星（レストランの）というのは星一つでも大変なもので、フランス全国でも４２３しかない（２星が７４、３星に至ってはたったの１８である）。

ポワティエから車で３０分以内には星１つが一軒しかないというものなのである。

今までホテルから歩いて行けるところに星付きのレストランが有ったことはなく、車で行くには帰りがワインを呑んでの運転がこわいし、タクシーで行くのも大げさ過ぎると思い行くのを止めていたのだが、ここでトライしようと言うことにした。

des 3 Piliers というレストランである。

ホテルの親父に聞いてみると、ここいらでは一番良いと奨める。行き方も教えてくれた。ちゃんとした市街地図を貰った。

ところが、このレストランでの経験は最悪だった。

ぶらりと入っていくと、一寸小生意気な女性（東洋人、日系とも思われるがそんな素振りは全く見せない）が、予約はと聞き、ホテルの推薦だと言うと、どのホテルかと聞く。名前を言うと、暫くして席に来て、又確認しあんまり聞いたことが無いというような事を言う。　うちに来るのなら、もう少しましなホテルに泊まれとでも言いたいのか？

まだ客は少なかったが、やはり星の威力なのだろう。客はどんどん入ってくる。みんな予約の客のようだ。

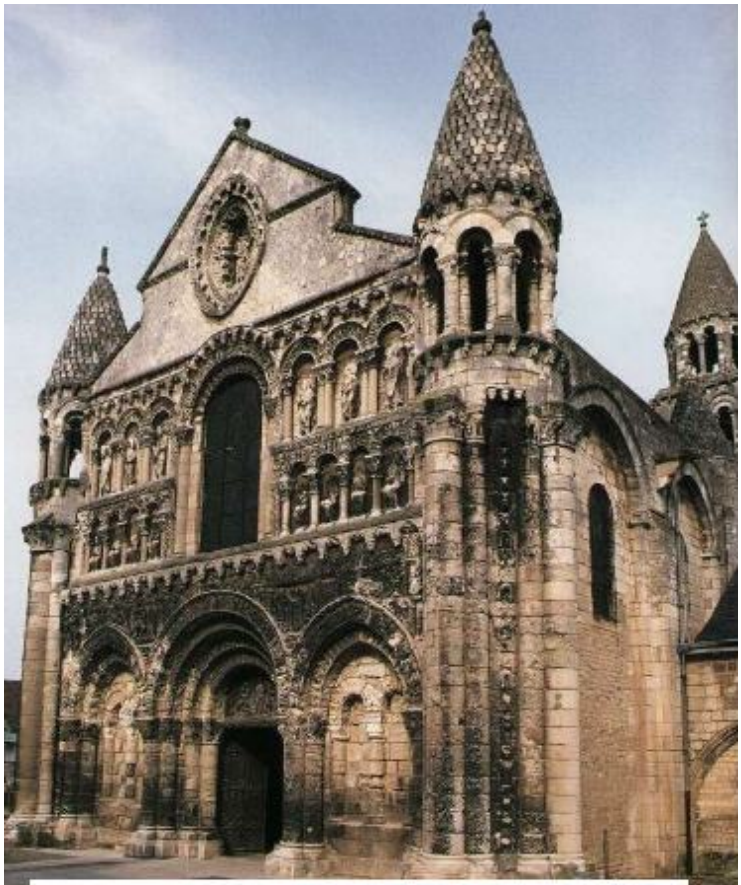
問題は、この晩は特別だったのかどうかは解らないが、この大勢の客を捌くのに、客席係りが彼女ともう一人の男しか居なかったことである。

忙しすぎて手が回らず、私の頼んだ白ワイン（フルボトル）も、グラスが空になっているのに、催促しないと注がない始末だった。しかしボトルは離れたところで氷で冷やされていて自分では注げないし、二人とも飛び回っていてめったにそばに来ないのである。デザートになっても未だ半分以上残っている始末なので、途中からいらいらしていた私は遂に彼女に、あなた達何を考えているのか？ボトルをここに置いて行きなさいと強い口調で言うような事になってしまった。

いつもは、ワインの名前などメモを取る事にしている（それで本報告のワインの項が書けている）のだが、メモを取ることも忘れてしまった。
メインも、これも人手不足のせいか熱くなければならない料理がややぬるかった事を覚えている。
この星付きのレストランの状態が、今晩だけ特別の事情で異常だったのだと思いたい。
ホテルに帰って親父には、良いレストランだったとだけ言っておいた。

【６月４日（水）】

ポワチィエには、見たい教会などがいくつか有るが、ホテルより東側にある所は徒歩で廻り、それからホテルに戻り車で市街地の西端にあるサン･ティレール･ル･グラン教会に行くという事にした。


ポワティエ　ノートル・ダーム・ラ・グランド教会

先ず、**【ノートル・ダーム・ラ・グランド教会】**（Notre-Dame-la-Grande）に行く。
西正面の前の広場に入って、西正面(左図)と向かい合う。これはポワトゥー・ロマネスク様式の典型で極めて華やかな印象を受ける。
束ね柱のような二つの鱗状のとんがり屋根を持つ小塔を両側につけたフアサードはその壁面を浮彫りで余すところなく埋め尽くしている。新・旧約聖書の物語、使徒や聖人像、「キリストの昇天」等である。それらは、残念ながら破壊されてしまっているが、最上段に置かれたマンドルラの中のキリストに収斂する構成になっている。
内部の柱は、幾何学模様に彩色されている。イソワールと比べると色彩も模様もずっと地味であるが、この方が私の感覚ではロマネスクらしい。
聖アンヌの一族(マリアとキリストその他)の彩色彫像（１５～１６世紀）、１６世紀の彩色石造の墓（市の有力者のもの）などは見事なものである。
内陣天井には、１２世紀のフレスコ（荘厳のマリアと栄光のキリスト）がある。

次に、そこからほぼ東南の方向へ歩いて５分ほどの処にある**【サン・ピエール大聖堂】**（Cathédrale St-Pierre）に行く。ここは、１２世紀の終わり頃に建て始まり、１４世紀の終わりに完成した。大修理工事中だった。
中に入ると、その広さと明るさ、天井のリブ・ボウルトの軽やかさにほっとする。

次に、更にほぼ東に２，３分の処にある**【サント・ラドゴンド教会】**(Église Ste-Radegonde)に行く。ここは、初め Radegund（メロヴィング家のクロタール１世の王妃，聖女ラドゴンド）によって５５２年に創建された。ノルマン人による破壊の後、１１世紀に元のクリプトの上に再建された。内部は彩色されており、内陣天井には、フレスコ（キリストとマリア？）がある。柱頭の彩色された彫

刻は、ロマネスクらしい幻想的な表現のものが多い(上左図)。

次に、そこから少し西に戻って大聖堂の南に当たる**【サント・クロワ博物館】**（Musée Ste-Croix）に行く。ここは元のサント・クロワ（=聖十字架）大修道院の跡に建てられたモダーンな建物である。

ここは、考古学的なものから、現代絵画まで幅広い展示を持っている。

考古学的なものでは、ポワティエで出土したミネルバの大理石像（１世紀）、やガロ・ロマンの多数の出土品などがある。

現代芸術では、ロダンの小作品、ボナール、シスレーのものなどいろいろあるが、一番の見物はギュスタヴ・モーローの大作「サイレンと詩人」だろう。

この博物館の入り口の直ぐそばに**【サン・ジャン洗礼堂】**（Baptistere St-Jean）(上右図)がある。

ここは、フランス・キリスト教建築の最も古い例である。

ここに、洗礼堂が建てられたのは４世紀だと言う。

室の中央に、洗礼を受ける水槽の跡がある。埋まってしまっていたものを１９５８年以降掘り起こしたのだという。

１０世紀に建物は再建され、同じ頃、水槽による浸礼は行われなくなり、洗礼盤による方法に変わって行った。

１２～１４世紀に教会は**フレスコ**によって飾られる事になる。これらは見事に残っている。

中は又、メロビンガ博物館と成っていて、５～７世紀の**装飾石棺**が多数展示されている。

これで徒歩による一回りは完了。ホテルに戻って一休み。

１２時に車でホテルを出る。

【サン・ティレール・ル・グラン】（St-Hilaire-le-Grand）の西正面の前に駐車する。

サン・ティレールは、ポワティエの最初の重要な僧正（３６８年死去）で、フランス中にその名の教会があるサン・マルタンは彼の弟子だった。

この教会は１０４９年に完成（木の天井）した。サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼者の宿としては極めて早い時期のものであった。今も教会の周りに、「サン・ジャック（サンチャゴのフランス名）への道」(Chemin

de Saint Jacques)と名付けられた散歩道がある。
その建物は１２世紀に焼け落ちて、石の天井に変わった。その時、その石の重量を支えるため、柱を挟んだりしたため、ヨーロッパでここだけの７廊の教会と成っている。
柱、柱頭には色が残っている。柱頭では「サン・ティレールの死」(前頁図)や「エジプトへの逃避」でも、情景の中を羽の生えた複数の天使が飛び回っているのはユニークだ。
柱の側面にフレスコがある。
教会の外に出て、サンジャックへの道を通って、東端へ廻ってみた。外から見る後陣も、落ち着いた赤い色と、安定した構成で見る人の心を和ませる。

６．２　ショーヴィニイ（Chauvigny）、車のトラブル

ポワティエの町を出て、Ｎ１５１を東に約２０ｋｍ行くと【ショーヴィニイ】である。かなり前から丘の上に、教会とそのそばに城の廃墟が見えてくる。

ショーヴィニイ　サン・ピエール教会

【サン・ピエール教会】（Église St-Pierre）のそばの路傍に駐車する。　この教会は１１～１２世紀に建てられた。
中は柱、壁とも彩色（上左図）されているが、これらは１９世紀のオーバーな彩色らしい。何と言ってもここの見物は、**柱頭**特に内陣のそれである。
石は白いのだが、浮き彫りの地は赤く塗られていて、モチーフが浮き上がってくる。又、所々に極めて限定されて用いられている例えば「マギの礼拝」(上右図)のマリアの光背の緑、「大天使ミカエルの魂の計量」のミカエルの光背の黄色などもアクセントとして成功している。
以上のような聖書、又はその外典から取った物語りの他に、柱頭の上には、人を食う怪物、悪魔、幻想的動物などが跋扈している。これらは、千年の恐怖に捉えられていた事から未だ抜け出せていない事の芸術的表現であろう。

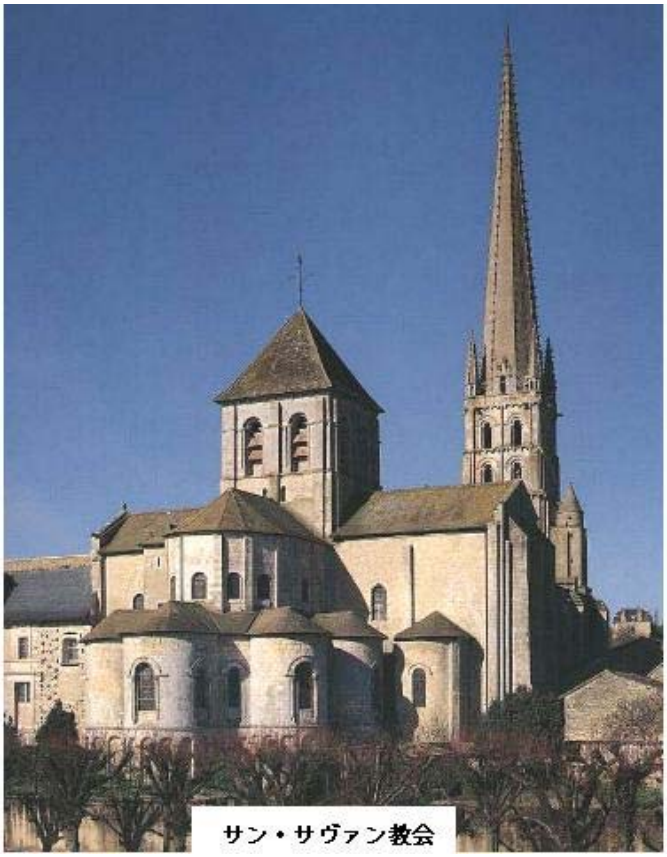
そばにある城の廃墟を一寸覗いてから、サン・サヴァンに向かう事にした。
少し走って道を間違えたらしい事に気づく。又対向車が光で合図をしてくる。どうも半ドアに成っていたらしい。そう言えば今までにも時々そう言うことがあった。路傍の空き地に駐車し、地図で道を確認し、さて出発、半ドアに注意と力を込めてドアをめると、「**ドカン！**」と大きな音。びっくりして見渡すと、左ドアのウィンドウ・グラスが粉々になって飛び散っているのだ。膝の上にも細かいガラスの破片。それを払いのけると、指先に刺さって血が出てきた。

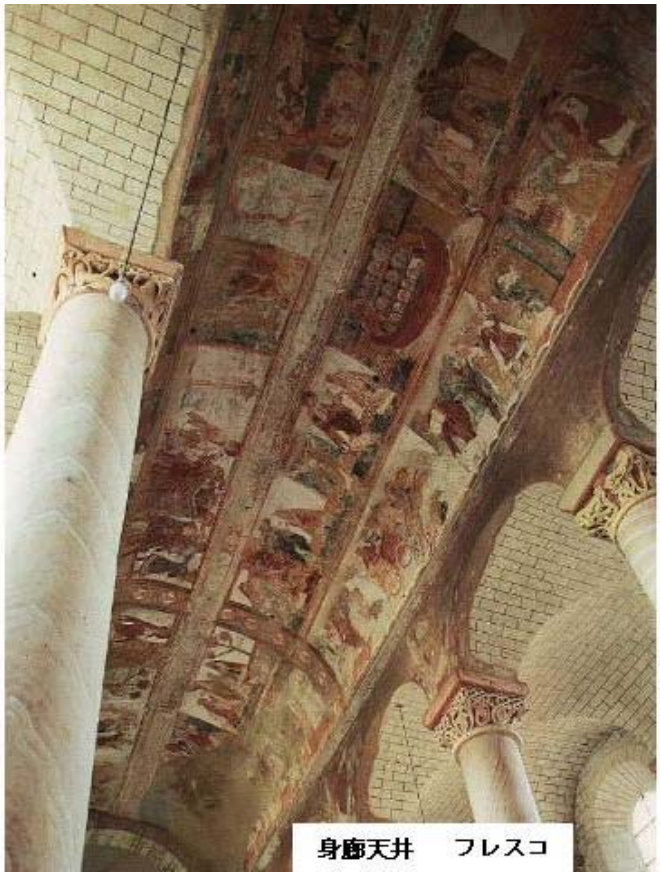
ガラスが強化ガラスだから細かく飛び散ったらしい。そして破断面が鋭利な為（鋭利であってはならない筈だが）刺さったのだろう。急いで、後ろのトランクのバックの中に入れて置いた消毒薬（マキロン）で消毒し、傷の上に絆創膏を貼る。
運転用の手袋をはめて、取りあえず座席の上など、危険な場所のガラス片を取り除く。
多分、ガラスに欠陥があったのか、又は鋭いエッジを持つ異物がガラスと何かの間に挟まっていて、それほど強いとは思われない衝撃でも応力集中が起こり、一挙に全面破壊に至ったのであろう。

対策としては、いろいろ考えられるが、取りあえずサン・サヴァンだけは済ましてしまおう。

６．３　サン・サヴァン（St-Savin）

ショーヴィニイからＮ１５１で東に１９ｋｍでサン・サヴァンである。
左のウィンドーが開けっ放しなので、スピードを出しすぎると寒い。　又、ゴミが目に飛び込む危険性があるので、上着を着て、眼鏡（バイ・フォーカル）を掛けて運転することにした。


サン・サヴァン教会


身廊天井　フレスコ

町中に入り、【サン・サヴァン教会】（上左図）のそばの広い駐車場に車を止める。
Libretto に取り込んだサン・サヴァン関係の画像（Zodiaque 叢書から１４枚＋見取り図、美術全集から１０枚＋見取り図）を見直し、頭の中を整理して、教会の南扉口から中に入る。するといきなり身廊天井いっぱいに広がった壁画（高さ１６ｍ、総面積４１２ｍ2）（上右図）が目に飛び込んできた。
たしかに今まで経験したことがない異様な迫力である。

しばらく、肉眼及び双眼鏡で鑑賞し、大体の感じを掴んだところで、先ず全体を、広角（２４ｍｍ）で２枚フラツシュ撮影した。するとナルテックスのあたりに事務所があり、そこから女性が顔を出し、ノー・フラツシュと声を掛けられた。あわてて車に戻り三脚を持って来る。その時入り口の注意書きを良く見たら、フラッシュ禁止と書いて有った。

三脚＋望遠レンズ（７０～３００ｍｍ）で狙うのだが、何枚か撮っていると首が痛くなってきて、適当なところで止めた。　ノアの箱船、バベルの塔が比較的良く写っていた。

ナルテックスにもフレスコがある。

クリプトにも良いフレスコが在る筈なのだが、行き方が解らない。探していると、修道院受付（Abbaye Accueil）と言うところがあった。そこで聞いてみたが、修道院は訪問できるらしいのだが、クリプトは見られないとの事だった。

クリプトのフレスコの絵はがきを求めた。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第１２報　　敏翁

６．４　サント（Saintes）とその周辺

車に戻り、種々の可能性を考え、サントの町まで行って泊まる事にした。

サントは、サントンジュ地方の中心地であり、かなり大きな町である。又、そこから近くに行きたい処もいくつか有り、且つ、サントそれ自身が高速に極めて近くにあるのでいろいろな対応が取りやすいと思ったからである。

Ｎ１５１をポワティエ方向に戻り、高速Ａ１０に入り南下する。

高速を約１３０ｋｍ走らなければならない。上着を着ても、暫く走っていると寒くなってきたので、パーキング・エリアで小休止する。ついでにそこの売店でスライスド・パン、生ハムとワインを買う。

ワインは、**Haut-Poitou のロゼ**　ＡＯＶＤＱＳ　12%　750CC 51Fr である。　これで今晩の夕食にしてみよう。

上着を着ているので、走っていないととても暑い。

ミシュラン・レッドのサントの市街地図を脇の見えるところに置いて、再び高速を走る。サントへの降り口を出、町に近ずく頃から大渋滞が始まった。

のろのろ（～２０ｍ／ｍｉｎ．）走っていると、道路右側の細い道の入り口に、矢印と「駐車場有り　**Hôtel Messageries**」との看板を見つけた。

このホテルは、ミシュラン・レッドにも載っている。これにしようとその細い道に入って行く。３０ｍほど入った突き当たりがそのホテルである。

まるまるとしたおばさんが居て、条件も聞かずに部屋の鍵を渡してくれる。そして車の鍵を預かると言う。あとでどこかに駐車させるのか？丁度その頃から、雨が相当強く降ってきた。

部屋に行くと、えらく立派なスイート・ルームである。足元を見られたかと部屋代が心配になって表示を見たら、

４３０Ｆｒだった。　次の間、ＴＶ２台付きだった。ミニバーの冷却能力も相当ありそうなので、さっき買ったロゼ・ワインを冷やす。持参の湯沸かし器でお茶を点て、ハム・サンドを作り、ロゼワイン付きの夕食を次の間の立派なテーブルでとった。

明日の天候が心配である。

【６月５日（木）】

朝、ＴＶで天気予報を見ると、今日は終日雨の可能性が高いらしい。
朝食にレストランに行くと、「まるまるおばさん」が、車のウィンドーのガラスどうしたのと聞く。事情を説明すると、サントの「ルノー」のオフィスの電話番号を教えてくれる。朝食後、彼女に電話を頼む。彼女は２，３ヶ所電話していたが、町の地図にルノーの修理工場の位置と、行き方を書き込んで、渡してくれた。
そこはサントの西南、郊外にあった。行ってみると、非常に大きな**【ルノーの拠点】**であった。どこに行ったら良いのか解らないので、販売展示場の受付に入っていった。日本の大きな自動車販売店と感じは良く似ている。
そこの女性が、その裏にある修理工場の受付に連れていってくれた。
そこの受付主任（？）の男性が、英語はさっぱりだったが、いろいろ面倒見てくれた。修理工場は非常に大きい。又、客もそうとう来ているようだった。
１０分ほど待ったろうか、ここには部品が無い、午後３時に用意出来るがどうするかと聞く。私は、旅行者でいろいろ行きたいところがあるので、ここで待っているなんて出来ないと言う。男は、その間代わりの車はどうかと言う。
それは有り難い。但し私はオートマティックしか運転できないよと言う。
一寸調べて来て、ここにはオーマティックは無いと言う。しかし男は親切にＡＶＩＳにも連絡してくれた。ここのＡＶＩＳには無いが、ボルドーのＡＶＩＳにはあると言う。今日ボルドーに行くのは気が進まないとくずくずしていると、助けの神が現れた。英語の良くできる男で、彼の地位は解らないのだが、その後の彼の振る舞いを考えると、ここで有る程度の地位にいる男の様な気がする。　いろいろ話した。私がこんな事は時々起こるのかと聞くと、彼は、聞いた事が無いとは言わず、rare case だと言う。多分時々は起こっているのでは無いかと想像した。日本ではどうなんだろう。聞いたことがないが。

そのうちに彼は、このウィンドーにプラスティックを貼ったらどうかと言い出す。それは良い考えだと言うと、彼は主任に話す。
ところが驚いたことに、主任は、使い古しの包装用のプラスティックの袋を持って来て、ウィンドーにあてがい、見えるかと聞く。見えないと言うと、又違うものを持ってくる。３度目のものは大分ましなので袋のまま（２枚重ね）では駄目だが、一枚ならまあまあ見えると言った。
主任は、カッターと包装用接着テープを持ってきて、ウィンドーの枠に念入りに張り付けてくれた。
主任と男に感謝の握手をし、男のあまりスピードは出すなよの言葉を聞きながら出発した。

取りあえず、ここから近い**【サン・トゥトロツプ教会】**(Église St-Eutrope)に行くことにした。
運転してみると、左ドア・ミラーがぼんやりしか見えず怖い。
それで教会の駐車場で、ドア・ミラーの処だけ直径１５ｃｍほどの穴を開けた。結果的には、この状態であとほぼ４日間運転する事になった。開けた穴から、風力により亀裂が広がることが心配だったが、この薄いプラスティックは強く、１５０ｋｍ／ｈで走ったりしたが亀裂の広がりは全く認められなかった。
（ただその時は、プラスティックが振動してもの凄い騒音の中の運転になる）

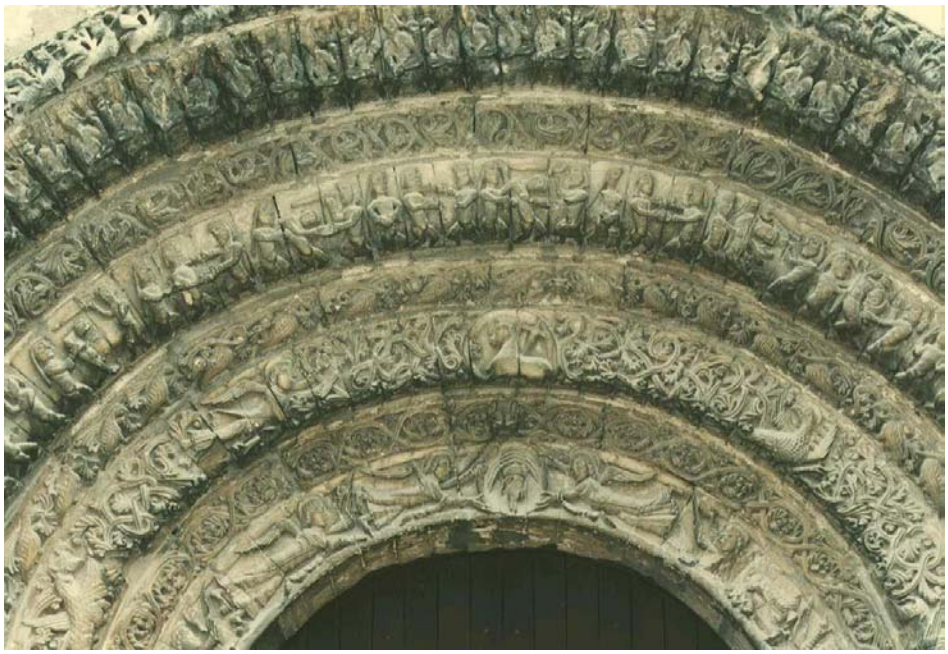
教会は１１世紀の創建。教会内は暗く、典型的なロマネスク様式である。
ここのクリプトは広い。大きな葉紋様の柱頭が目立つ。物語りを描いた柱頭にも、殆ど葉紋が組み合わされているのがここの特徴だろう。使っている石材も黒く、フラッシュ撮影したが反射率が著しく低いためか、真っ黒な写真しか撮れていなかった。

天気は、ハッキリせず雨模様である。

サントの周りには、ロマネスクの教会がいくつかある。その中から、時間の関係で近くの２つだけ訪れてみることにした。シェルミニャックとリウいずれも小さな教会である。
特にリウの教会の東端は、一つの典型とされていて、ミシュランでも、ゾディアック叢書でも取り上げているので行って見たくなったのである。

サントからＤ１２９で５ｋｍほどで**【シェルミニャック】**（Chermignac）の小さな村である。
教会の前の小さな広場に駐車する。そこに、「**ホザンナの十字架**」（Hosanna Cross)と呼ばれる、上に十字架を乗せた高い石塔がある。これは、古い慣習で、「枝の主日」(Palm Sunday)に、信者達がこの十字架の下で「ホナンザ！」と歌いながら行列を作って練り歩いたと言うものである。
教会入り口のアーチに、小さいが面白い人間や動物の模様が彫られている。
雨が激しくなってきた。しかしドアミラーの為に開けた穴からは殆ど雨は吹き込まないので助かった。もし、プラスティックを貼らなかったらと思うと、私の運は、どうやらぎりぎりの処で留まってとぎれては居ないらしい。

さらにＤ１２９を５ｋｍほど進むと**【リウ】**（Rioux）である。教会と道を挟んである店前の駐車場に車を止める。
教会のファサードを飾るマンドルラに囲まれた聖母子像は美しい**(上図)**。
東端・後陣外側も全面が彫刻で飾られていて、普通のロマネスク教会とは違う雰囲気である。これはゾデイアック叢書によると、**ロマネスク末期の退廃**、即ちバロック化を示している。



サントの町に戻る。サントの町はその真ん中をシャレント川（Charente）が流れている。泊まったホテルも、今日廻った処は総てその西側にある。

そして町の東側に**【女子修道院】**（Abbay aux Dames）がある。

ここは１０４７年に奉献されたが、１２世紀には大改造されている。かっては貴族の子女教育に使われていたものである。

大きな西正面のファサードと鱗状のとんがり屋根を持つ鐘塔にサントンジュ・ロマネスク様式を見ることが出来る。

ファサードは、タンパンが無く、４層（細かく数えれば８層）の飾り迫縁（Voussures）は、細かい彫刻で埋め尽くされている(上図)。

６．５　フェニュウ（Fenioux）

雨は時々激しく降ってくる。

これから、サントの北へ走り、先ずフェニュウに立ち寄り、それからオーネーを訪れ、サントの東に位置するアングレームに戻り、そこで泊まる事にした。

サントから N150 を 16km ほど北上し、そこから細い道をくねくねとおおよそ西北へ 8km 程度行くと D127 から少し入った**【フェニュウ】**の村に至る。

教会のそばに駐車する。雨が激しい。

先ず、そこから５０ｍほど離れたところに立っている「死者のための灯明台」(Lanterne des Morts)（左図）を訪れる。

ここのはこの種の代表的なものなのだそうである。この灯明台は、高い石の塔（ここのは７本の柱から成っている）で、中は中空であり、一番上に燈明台があり、その炎は魂の永遠の生命を象徴している。頂部はサントンジュらしく鱗状とんがり屋根を頂いていた。下には納骨堂があるが、扉も開いたままで中には何も入

っていなかった。

傘をさして写真をとった。

教会に戻る。小さな村にしては立派な教会である。記録は９世紀まで遡れるそうだ。鱗状とんがり屋根の鐘塔が付いているが、これもそのデザインはロマネスク芸術の歴史に特殊な地位を占めている物なのだそうだ。

西正面は、サントンジュ・ロマネスク様式である。

飾り迫縁に描かれた「善と悪の戦い」、「賢い乙女と愚かな乙女」は代表的な物らしい（Zodiaque 叢書）。

北側にも小さな扉があり、その飾り迫縁の葉紋模様は、実に美しい。

教会のすぐ隣が村役場に成っていて、私が傘をさしながら外側の写真を取っていると、一人の若い男が傘もささずに駆け足で役場から走り出てきて、教会の扉を開けてくれた。

教会内の両側の壁には、大きさは３０ｃｍ角ぐらいの石の薄板に、聖書中の物語を彫った物が多数飾られていた。

さっきの男への感謝の意も込めて、献金箱にコインを入れた。

Ⅶ．オーネー、アングレーム

７．１　オーネー（Aulnay）

Ｄ１２７を約８ｋｍ北上すると、St-Jean-d'Angely の町であり、ここを通り抜けるのに少しまごつく。Ｄ９５０に入り、１７ｋｍで**【オーネー】**の町である。町に入っていったが、それらしい教会が見あたらない。何回か人に道を尋ねながら到達した**【サン・ピエール教会】**（Église St-Pierre-de-la-Tour）は、町はずれＤ９５０沿いにあった。教会横に入っていく道路を挟んで大きな駐車場があったが、がらがらだった。シーズンには一杯になるのだろう。

雨は全く止んで、曇り空だが暑い。

オーネー　サン・ピエール教会　　西正面　と　ホナンザの十字架

西正面　北側のタンパン　　聖ペテロの森刑場面

教会は、１２世紀ののもので、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路の参詣地の聖堂として建てられた。ロマネスク建築の最高傑作の一つである。

西正面の前方は墓地になっていて、その中に、古い苔むした「**ホナンザの十字架**」があった。ここ

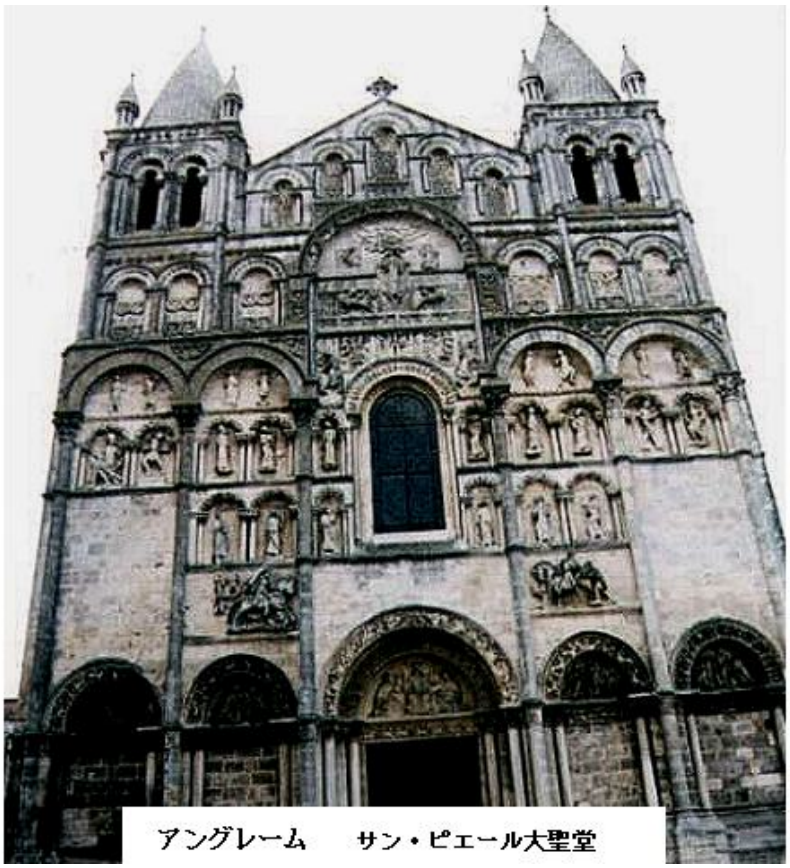
から見る西正面は全体に古色蒼然としていて、趣がある（前頁左図）。
中央扉口と、その左右にある盲扉の彫刻が、特に当初からのものである。
中央扉口はタンパンが無く、４層の飾り迫縁とそれに繋がる柱頭で飾られている。フェニュウのそれによく似た構図である。
左右の盲扉は、タンパン、３層の飾り迫縁、柱頭、まぐさで飾られている。特に**北側のタンパン**は、当聖堂が捧げられている聖ペテロの磔刑場面（前頁右図）である。
『逆さに立てられた十字架、頭を下にして磔刑にされた聖ペテロと、上下に４人の磔刑執行人が控える。右の者は体を反らせてペテロの足に釘を打ちつけるために金槌を振り上げている。すらりとした体型、優雅な動き、流麗な衣裳は、中央の重層アーチを飾る「賢い乙女と愚かな乙女」他浮彫りともどもラングドック系の彫刻家の手になるに違いいない。繊細な彫りは鋼鉄の使用による彫刻器具の改良，そして熟練した手，彫りやすく耐久性のよい良質のこの地方産の石灰岩のおかげである。多大な厚みをもつ三重の飾り迫縁は、前面と下面をＳ字形植物文様で埋め尽くし、間々に動物文様が入る。巨鳥と獅子の戦い、柱頭を飾る獅子と竜の戦い、植物文様の執拗な繰り返しはコルドバの象牙彫刻や漆喰彫刻を思わせる。』（世界美術大全集　８　「ロマネスク」）
南側の翼廊の扉口にも見事な浮彫りのある飾り迫縁層があり,「二十四長老」などが表されている。
教会内は、ロマネスクの暗さである。柱頭も素晴らしいものが多い。ミシュランで特に挙げている「小さな耳を持つ象」、「サムソンとデリラ」等を見つけてフラッシュ撮影する。石が黒くて旨く撮れていなかった。

７．２　アングレーム（Angoulême）

アングレームに向かうには、D950 を戻り、St-Jean-d'Angely　の町の近くで D939 に入ればよい。又町のあたりで道を間違え、土地の人に教えて貰う。彼は親切に私のノートに行き方を文章（フランス語だが）で書いてくれた。
Ｄ９５０をほぼ東南に６５ｋｍばかり走るとアングレームである。ここはサントのほぼ東方６０ｋｍにあり、その間に
コニャックの町がある。
アングレームに近づき、中心街の標識に随って丘をどんどん登っていく。
【アングレームの古い町】は、シャラント川岸の丘の上の城壁で囲まれた町である。市役所のそばの地下駐車場に車を止める。
ミシュラン・グリーンによると、サン・ピエール大聖堂のそばに〈i〉がある事になっているのだが、行って見ると無い。訳が解らず駐車場に戻って、念のためミシュラン・レッドを見てみると、全然別の処に有ることになっている。
又〈i〉を探す気がしなくなり、直接ホテルに行ってみることにした。
今回が、現地でホテルを探す最後である。（明日から２泊は日本でボルドーに予約済み）少し良いホテルにしようと、ミシュラン・レッドのアングレームの始めに載っているメルキュール・ホテルに行ってみる。今回の旅行で初めて、満室で断られた。しかしレセプションの女性は、近くの他のホテルを行き方を含めて教えてくれた。そこから少し坂を下りたところにある　**Hôtel Europeen** ２星である。
車を、このホテルの駐車場に入れる。
このホテルにはレストランが無い。直ぐそばにミシュランでフォーク１つの　Le Palma に行った。
サラダ、カツレツとデザートで 99Fr である。 味は、フォーク一つはこんなものなのだろう。
ワインは、SORNIN　Vin de Pays Charentais 1995 11％ 750cc 50Fr である。　この地の地酒である。

【６月６日（金）】

朝、ホテルを出発、**【サン・ピエール大聖堂】**に向かう。昨日歩いて行っているので簡単だと思ったが、この町の道は尋常ではない。あっと言う間に、一段下の町に入り込み、それも細い道（道幅は車の長さ＋２０ｃｍ？）で行き止まりになっている処に入り込み、戻るのに一苦労したりした。


アングレーム　サン・ピエール大聖堂

大聖堂西正面の道路沿いに駐車出来た。（未だ朝なので車が少ない）
道を渡って、**西正面(左図)**を見上げるようにして鑑賞する。

この建物は、１２世紀まで遡ることが出来る。しかし１５６２年カルバン派によって破壊され、１６３４年に Abadie により修復されたが１８６６年以降さらに完全に修復されている。
西正面のファサードは、全面が彫刻で飾られている。Abadie による修復以前の絵が残っていて、それと現状を見比べる事により、最上部と中央扉口のタンパンが修正でつけ加わった物であることが解っている。

このファサードは、**ポワティエ様式**（ノートル・ダーム・ラ・グランド が代表例）で、70 もの像（立像又は浮き彫り）があり、「最後の審判」を現している。
その全体は、Abadie の修復以前の最上部にあるマンドルラに入った「栄光のキリスト」（天使達や福音書記家の形象で囲まれている）が支配している。
城壁の西端の見晴らし台から風景を眺めたりした後、ボルドーに向かった。

Ⅷ．ボルドー、ワインとロマネスク

８．１　ボルドー（Bordeaux）

アングレームからボルドーは、Ｎ１０で一本道（約１１０ｋｍ）である。
ボルドーは大西洋岸フランス最大（人口２１万人）の都市である。<i> に行きたいのだが、大分苦労した。ぐるぐる周り少し土地勘らしいものが出来たとき、通りかかった警官に尋ねたのが良かった。明確な英語で、的確に教えてくれた。
<i> のそばの公園の中に駐車した。<i> の受付嬢は、可愛いフランス美人。質問に答える度ににっこりするのも嬉しい。

ワイン・ツアーの資料を貰う。ここのは立派で年間のスケジュールが出ているようだ。ホテルで研究する事にする。
市街地図を貰い、私の予約してあるホテルへの行き方を教えてももらった。
ガロンヌ川沿いに国鉄のサン・ジャン駅（Gare St-Jean）と言う道路標識をたどっていけば行けそうである。

ホテルは、Holiday Inn Garden Cout ３星で、**サン・ジャン駅**まで歩いて６～７分の処にある。
ここの駐車場も良くできていて、駐車場への出入、と部屋の鍵が同じカードで出来るようになっている。
チェックイン後、ミニバーのビールを呑みながら、ワイン・ツアーの資料を検討する。水曜と土曜（明日は土曜）に
一日コースがあり、出発が午前９時１５分、サン・ジャン駅と９時半 〈i〉（本部） からである事が解った。又サン・ジャン駅にも 〈i〉 がある事も解った。
それで、歩いて駅の 〈i〉 に行き予約をする事にした。
ぶらぶら歩いて、駅のそばに行くと、私が今までに知ったフランスの光景とは全く異なる風俗が展開していた。一寸メインの道を外れるとポルノビデオの店、ヌードショウの店などが氾濫しているのである。
駅前には、安ホテル、バー、ブラセリー、等が沢山あり、モジャモジャ頭のヒッピー姿で大きなリュックを担いだ若者達などで広場もバーも溢れていた。
このあたりは今回も私が廻ってきた様な「爺さん・婆さんコース」の観光地とは全く異なり、若いエネルギーに満ちあふれた処なのである。
ここは、大きな駅で、ＴＧＶでパリと直結（約３時間）していて、観光やこの南に展開しているピレネーへの登山などの中心拠点になっているのだろう。
〈i〉 は駅の片隅の小さな部屋で、３０歳位の男が椅子にふんぞり返っていた。先ほどのところ（あれが本部）の雰囲気とあまりに違うので、ここが 〈i〉 なのかと尋ねてしまったほどだ。
ここで、明日の一日コースの予約をした。支払いは、明朝ここからバスで本部まで行ってそこでする事になる。出発はこの 〈i〉 の前からである。ピンクのバスだからすぐ解るよと男は言っていた。

ホテルに戻り、一寸休んでから、車でボルドーの町を廻ってみることにした。

先ず、ホテルのそばにある**【サント・クロワ教会】**（Église Ste-Croix）に行く事にした。教会のそばに駐車する。

西正面のファサードはサントンジュ・ロマネスク様式である。

この教会も起源は極めて古い（７世紀）が、１０世紀の終わりから１１世紀の半ばに木天井の大きな教会が建てられたのが、現在の教会の骨格を成している。
１２世紀に相当の改修が行われ、その絵が残っているが、その後１９世紀に又大幅な改修が行われている。
その絵を見ると、大きなバラ窓があるなど現在とは違うが、扉口の飾り迫縁層等は、昔を留めている。「ゾデイアック」、「二十四長老」などである。

教会内部は暗い。３０枚にも及ぶ大きい油絵（ムリリョの「無原罪の御宿り」のコピーや、ピエタなど）が飾って有ったのが印象的だった。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第１３報　　敏翁

サント・クロワ教会から中心街の**【サン・タンドレ大聖堂】**（Cathédral St-Andres）に向かう。
裏道を通りながら近ずく。大きな通りに出て、前方に大聖堂付属のペ・ベルラン塔（Pey-Berland Tower）が見えてきた。右前を見ると、路傍に駐車していた車が一台出ていこうとしていた。これ幸いとその後に入り込んだ。
塔の横を通り大聖堂の横の入り口から教会内に入る。大修理中でカバーで覆われていたので解らなかったが、この入り口が有名な北扉口だった。

ボルドー　サン・タンドレ大聖堂　東端

この大聖堂は大きい。（パリのノートル・ダームより大きいらしい）
１１～１２世紀の建物は、町の繁栄と共に大きくなり１４～１５世紀には壮大なゴシック建築になっていった。その過程で強度上の問題が起こり、控え壁や飛び梁（Arc-boutant）が不規則な間隔で加えられた。
内部も工事中で雑然としていた。ミシュランで見るべき物としている聖アンとマリアの彫刻なども見つけられなかった。
南翼廊扉口から教会を出る。その扉口には、３つのバラ窓が付いている。
この大聖堂の西端は、１８世紀に壊されて、何の飾りも無い。
北側の**ローヤル扉口**（Royal Doorway）は１３世紀のもの。タンパンには「最後の審判」の浅彫り、その上には１２使徒の丸彫りがある。
塔のあたりから見る教会の**東端**の大ゴシック建築の偉容は見事だ。**（上図）**
疲れてきたので、見物を切り上げホテルに戻る事にした。

ガロンヌ川沿いに走る距離が、<i> から行く時より大分短い事をうっかりして、駅方向への入り口を通り過ぎ、あっと言う間に駅の裏口に行ってしまった。一方交通で逆には戻れない。人通りも少ないので、そばで遊んでいた１３～１５歳（？）の子供達に道を尋ねた。フランス語は駄目なのだと言うと、スペイン語はどうかと聞かれる。南米系の顔つきの子供達だった。
その内彼らが、ポン、ポンと言う。pont は橋なので、ガロンヌ川を渡るのかと聞くと、彼らが地図で指し示すのは、跨線橋だった。これを渡れば戻れると言っているようだ。それが解れば何とかなる。ほっとして、Muchas Gracias と礼を言ったらみんな大喜びをしていた。
跨線橋を渡ってホテルに戻った。
夕食はホテルのレストランでとった。アントレはサラダ、メインは羊のステーキ。メデイアム・レアと言ったら（私は普通牛のステーキはレアなのだが、羊のレアは一寸自信が無かった）、出てきたものは殆どレアだった。羊のレアは初めてだが、なかなか良いものだ。

ワインは、　**Cru Bourgeois の Château Castera**　MEDOC の赤、ＡＯＣ 1993

Proprietaire à St-Germain d'Esteuil　ハーフボトル　60Fr だった。

いよいよボルドー・ワインである。
『ボルドー・ワインという時は，そのワインはジロンド県の産酒に限られるが、フランス政府はジロンド県のぶどう園を１９の地区に区分している。　しかし、その中で重要なのは、次の５つであり、他は凡酒しか産しない。
1)　メドック地区（Médoc）（さらにオー・メドックとバ・メドックの２地区に細分される）
2)　グラーヴ地区（Graves）（Pessac と Léognan の２つのコミューンを含む）
3)　ソーテルヌ地区（Sauternes）（バルサックというコミューンを含む）
4)　サンテミリオン地区（Saint Émilion）（準サンテミリォン５小地区と隣接）
5)　ポムロール地区（Pomerol）（Lalande de Pomerol と Neac の２小地区と隣接）』

今回のはこの 1) である。St-Germain d'Esteuil 村は、オー・メドックから僅かにバ・メドッに入ったところにある。
『バ・メドックのバ（Ｂａｓ）は「下」、「低い」などの意味で、低地のためにつけられた名称だが、第２次世界大戦中、ここのぶどう栽培者達はその形容詞（Ｂａｓ）が“何か劣る”というイメージを与えるように思えるので、これを取り除いて単にメドツクと呼ぶことを要求した。その結果認められ、現在この地城をメドックと公式に呼ぶようになった。』
今回のメドックはこれ（昔のバ・メドック）である。

『メドック地区には、ＡＯＣ法とは別に，1855 年以来現在まで約 135 年間もの長期にわたって慣習的に認められている格付けがある。　この格付けはパリで万国博が開かれた 1855 年にフランスで初めて公式に決められたもので，いわゆる 1855 年のボルドー赤ワインの格付けとして有名なものである。これは、この地方の幾百とあるシャトーのなかから極上の赤ワイン６１シャトーを選び出し、これを格付け銘柄クリュ・クラッセ（Crus Classes），またはグラン・クリュ・クラッセ（Grands Crus Classes)と呼んで特級品扱いにした。』（さらに詳細は、後で述べる予定）

『約 500 あるシャトーのうち，クリュ・クラッセには選ばれなかったが，これに次ぐ良質ワインをボルドー商工会議所と農業会議所が中心となって 1932 年にクリュ・ブルジョワとして 444 シャトーを選び，３段階に分類した格付けを行なった。
その後 1978 年に見直しを行っている。これによるとクリュ・ブルジョワを３段階に分類，すなわちクリュ・グラン・ブルジョワ・エクセプショネル(Crus Grands Bourgeois Exceptionnels)が 18 シャトー,クリュ・グラン・ブルジョワ(Crus Grands Bourgeois)が 41,クリュ・ブルジョワ(Crus Bourgeois)が 69 の合計 128 シャトーが格付けされた。』
（以上『』内「新版　ワインの知識とサービス」より抄録）

今回のはこの最後の（ランクの低い）クリュ・ブルジョワである。
と言うわけで、単なるメドックのＡＯＣよりはましであるが、それほどのものではない。しかし味わい、香り非常に良いものであった。

【６月７日（土）】

８．２　ワイン・ツアー

朝、ビデオカメラとミシュランだけ持って、サン・ジャン駅まで歩いて行き、観光バスの到着を待

った。９時１０分頃赤い大型バス（５０人乗り）が到着。９時１５分に正確に出発。客は私一人だった。

〈i〉本部でキップを買う。客は私の他に母親と息子の組と４０歳前後の女性が一人加わった。バスの中で待っていると、背の高いひょうきんな男が肩に長い円筒を掛けて現れる。この男がガイドである。

ボルドー　ワイン・ツアー　午前の部の始まり

午前中、ボルドーの町の中のワイン関連を徒歩見学、昼はワイン・テーステイングと昼食、その後このバスでシャトー見学とその場でのワイン・テースティングになる。今日午後行くところは、グラーブ方面とソーテルヌだと言う。

シャトー見学は、いろいろコースがあって、行き先の情報を予め知る方法は解らなかった。先ほどバスの運転手が、〈i〉本部の女性に今日の行き先を聞いていた。

シャトー見学のコースには、他にメドック、サンテミリオン、アントル・ドゥ・メールなどが有るようだ。

母親と息子はアメリカ人。息子は３５歳位か？エッソの石油発掘関係の技術者で、世界中で仕事をしているが、その合間の休みに親孝行をしているらしい。一人旅の女性は、南アフリカの薬学博士であった。

ガイドの男は、先ず公園の木陰で、背負った円筒から巻物を取り出し、ボルドー・ワインの歴史を一くさり。**(上左図)**

男の英語は、フランス訛り（？）の強いもので、非常に聞き難い。

それから、そこから北に広がるボルドーの記念的建造物、**昔のワイン商人達の邸宅街、シャルトロン博物館**（Musée des Chartrons １８世紀のワイン商人の館を博物館にしたもの。昔のワインの瓶詰め、ラベリング、箱詰め、輸送等の関連を展示）等々を見て廻った。

３時間以上歩きぱなしで外は炎天下、疲れる事甚だしい。又ボルドーの町は犬の糞だらけで、注意して歩かないと直ぐ踏んでしまうのも気疲れの元だった。

しかし、良い勉強をした。例えば博物館にはＡＶ室があり、そこでのボルドーの昔の繁栄ぶりを示すスライドとその説明は、想像を絶するものがあった。

ガロンヌ川岸一杯に広がる貿易商達の店は皆ファサード（正面）を川に向け偉容を誇っている（川岸に立つと今でもその名残りがある）。その奥に長さ数十ｍに及ぶ流れ作業の瓶詰め、ラベリング、箱詰めの作業場が何十となく平行に並んでいる。そしてそこには大勢の作業人、運搬人が群がっていて、岸壁の舟の群れに箱詰めや樽詰めのワインが流れるように積み込まれて行くのだ。

この光景、ワイン商人達の全盛期は、シャトー元詰めの流行と共に消えて行ったのである。

それから、公立庭園（その中にフランス式庭園とイギリス式庭園が仲良く存在しているのはボルドー繁栄の歴史が強く英国に依存していた事を示している）を通り抜け、〈i〉に近いレストラン　Baud Millet でワインとチーズのテースティングをしながらの**昼食**となった。（このレストランは、チー

ズの専門店）<u>（前頁右図）</u>

とにかく喉が乾いていて店に入ると直ぐ水をがぶ飲みする。

ワインは、３種類のテースティングをした。
１） Grave のＡＯＣ　**Château** Plantel 白　1994
２） Pessac-**Léognan** のＡＯＣ **Château** Seguin 赤 1993
３） Lussac-Saint-**Émilion** のＡＯＣ 赤 1995

又、テースティングは、以下の昼食を取りながら行われた。
アントレは、白チーズをミルクで煮たようなもの。メインは、コンフィ。　次に、チーズが数十種類も置いてある地下蔵に降りて行く。そこでチーズを取り放題なのだが、男はこれが最高だ等と言っては私たちの皿に載せてくれる。その中には強烈な臭気のものもいくつかあった。しかし、それをパンに塗って食べると今まで経験したことのないタイプの旨さを感じた。
それに、デザート、コーヒーとなかなかなもので、今までに経験したことのない素晴らしい昼食だった。
上記のツアー参加者の経歴などは、ここでの会話からの情報である。

上のワインの説明を又「新版　ワインの知識とサービス」からの抄録でしてみる。
『**グラーヴ**地区はメドック地区の南部に位置する。すなわち，ボルドー市の北にあるエイザン(Eysins)の村から南下して，ソーテルヌ(Sauternes)を取り囲むようにしてランゴン(Langon)の町に至る約 60km の細長い地帯である。（ガロンヌ川の西岸）
グラーヴ(Graves)という語は砂利の意であり，実はこの砂利がグラーヴ地区の典型的な土壌であることからこの地区の名前が生まれたといわれる。この特殊な土壌は珪土質の小石と砂と少量の粘土が混ざり合ったもので，グラーヴのワインに独特な味わいとこくを与えている。この地区では赤ワインも白ワインも産する。赤ワインは主として北部に産し，南下するにしたがって白ワインが多く産出する。
赤ワインに使用されるぶどうの品種はメドック同様カベルネ・ソーヴィニョンが好まれるが，メルロやカベルネ・フランも多く，その結果，酒質はメドックより軽いワインとなる。グラーヴの赤は，メドックと同様に香りに富み，こくがあり，上品で，よく熟すが，ボディがメドックより軽く，メドックのもつあの強い風味と洗練性には欠ける。しかし北部のペサック(Pessac)，タランス(Talence)，レォニャン(**Léognan**)などのコミューンでできるグラーヴの最高級品には独自の秀逸性があり，ポイヤックやマルゴーの最高級品に匹敵する。』
２）の Pessac-**Léognan** ＡＯＣは、この参考書には無い。新しいＡＯＣか？

『**サンテミリオン**地区の北東部に同地区と同じタイプのワインを産出する５つのコミューンがあり、これらのワインに対してはそれぞれのコミューン名の後にハイフンでサンテミリオン（Saint-**Émilion**）の名称をつないで売買することが認められ，それぞれがＡＯＣになっている。』
３）の Lussac-Saint-**Émilion** はそれである。サンテミリオンそれ自身については、明日行く予定なのでそこで説明することにする。
テースティングの印象は、１）のグラーブの白は非常な辛口、２）の赤はタンニンの渋みが強く、私にはきつすぎる。３）の赤は非常に口当たりがよかった。
ボルドーのワインの特徴は、ワイン生産者が、いろいろな品種のぶどうからとれたワインを各自各様に混合して各ぶどう園ごとに風味の異なる特色のあるワインをつくる事である。
驚いたのは、南アの女性は、口に含んで、ぶどうの種類と組成を当てられる事であった。彼女もガイドも２）は、未だ呑むのに若すぎるとの意見であった。

昼食後、バスに戻ると、そこには午後半日コースの参加者が４０人以上乗っていた。ガイドは、同

じ男で、今度は同じ事を、フランス語と英語で説明するので、殆どしゃべりっぱなしであった。

バスは、ガロンヌ川を渡り、川の東岸を川沿いに南下し、**【キャデイヤック】**（Cadillac）に到着する。この町は初め１２８０年に築かれたバスティード（Bastide 城塞都市）で、１４世紀の町の面影も残っている。又、自分の城壁を構えた**エペルノン公爵（Duc d'Épernon）**の城がある。その中は、見事な飾り付けの付いた多数の部屋がある。その城の見学である。

午後の部　キャデイヤック城館でのテースティング

ここで、参加者の中に私の他に日本人が一人居ることにお互いに気付く。話してみると、世間は狭いもの。私と同じ大学・同じ学科の３年先輩の方であることが解った。先輩は、私の卒業した大学の名誉教授だが、現在ボルドー大学に短期滞在して「材料工学」の講義をされているようだ。意外なことだが、ボルドー大学はこの分野ではレベルが非常に高いのだそうである。

一昨年、マドリツドのホテルで学校の同級生とばったり合った事と合わせて、何か確率論だけでは説明できないような不思議なものの存在を感じた。

見学の最後に、城の一室でワイン・テースティングがあった。（上図）

キャディヤックは、非常に小さな地区だが、前述のボルドーの１９の地区の中に数えられていて、非常に甘い白ワインで知られている。

ガイドの男は、ここのワインは買い得だよ。５０～６０Ｆｒで買えるよ。次にソーテルヌに行くが、そこはもっと高く１００Ｆｒ以上するよ、と盛んに呼びかけていた。

確かに甘い良い白ワインではあるが、ソーテルヌの気品、香気はない。やはり値段相応、特級品ではないと思う。

又バスに乗り、ガロンヌ川の西岸に渡り、**ソーテルヌ**地区に入る。

『**ソーテルヌ**地区は、ガロンヌ河の左岸、ランゴン(Langon)の町から数ｋｍ離れた処にある。この地区は、石灰質またはチョーク質層土に、珪土を含んだ小石と砂、少量の粘土などがほどよく混合され、礫層を形成している。このぶどう育成上恵まれた土壌からは、なめらかできめこまやか、しかも力強く濃厚な甘口白ワインのみが生産される。使用されるぶどうの品種はセミョンとソーヴィニョン・ブランが主で、ミュスカデルも少量栽培されている。

ソーテルヌのワインは黄金色をしていて、すこぶる芳香が高く，アルコールの度数もかなり高い上に非常に甘くて濃厚である。上質のソーテルヌにはなめらかな舌触りとともに独特のこくがある。これはソーテルヌ地区の特殊な方法、即ち**「貴腐」**(La pourriture noble)状態のぶどうを摘採して用いる事で可能になっている。

１８５５年にメドックの赤ワインに対する有名な格付けが行なわれた際、ソーテルヌの白ワインに対しても同時に格付けがなされた。特選銘柄として 24 のシャトーが選ばれた（現在では２７シャトー）。メドックにおける格付けが第１級から第５級までの５つのグループに分けられたのに対し，ソーテルヌの格付けは第１級と第２級の２つのグループに分けられている。ただしシャトー・ディケムだけは品質がずば抜けて優秀であったため，第１級の首位に置かれ，これだけを別格として特１級(Premier Grand Cru)の称号がつけられた。この格付け表によれば，特１級が１，第１級(Premiers Crus)が 11，第２級(Deuxiemes Crus)が 15，合計２７のｼｬﾄｰが選ばれている。』

シャトー・ディケム（Château d'Yquem）などを遥かに見ながら、葡萄畑の中を進み**【シャトー・フィロー】**（ Château Filhot）に到着する。

これは１７世紀からのシャトーである。ワインは、上記の第２級に属する。

ここには、別のバスのグループも来ていて、総計約８０名の大人数になる。　シャトーの経営者と思われる人が、醸造所を案内、説明してくれる。フランス語でさっぱり解らなかったが、使われていた単語から推察するに、時代の好みが変わり（甘口ワインの需要は減少している）、コスト高の貴腐ワインの採算が厳しい事を盛んに訴えていたように感じた（この事は事実である）。

テースティングの部屋も狭く、ごった返しの中のテースティングだったのでゆっくり味わうどころではなかった。

価格表を見せて貰ったが、１２０～２００Ｆｒ、特別な物は４００Ｆｒ以上していた。

帰りは、グラーブのぶどう畑の中を通ってボルドーに向かった。サン・ジャン駅に近いところで降ろしてもらった。

今日のツアーでは、午前の部は満足（特に昼食とテースティング）だったが、午後の部は、やや不満足だった。

ブルゴーニュでのツァーと比べると、今日の方がはるかに良かった。　（料金も２９０Ｆｒと割安だつた）

ホテルに戻り、荷物の整理をする。

ホテルから徒歩６，７分の処にフォーク２つのレストラン **La Tupina** があり、ホテルのレセプションで予約をして貰ってから出かけた。

アントレはフォワグラ、ソーテルヌ付き（但し別料金４０Ｆｒ）と、アスパラガスの２皿（アスパラ６，７本にオリーブ油＋αがかかっている）。　メインは子羊のもも肉の白ワイン煮。鍋に入って出てきたが食べきれず。

いずれも、素材を生かした極めてシンプルなもの。

普通のフランス料理のイメージとひと味違っているが、考えは統一されていて非常に良いレストランだと思った。

ワインは、今晩がフランス最後の夜なので少しだけ贅沢することにした。

Château Cantenac Brown　Grand Cru Clasée

Margaux のＡＯＣ **1993 Proprietaire à Cantenac** フルボトル 350Fr

マルゴーは、オー・メドツクの主要コミューンの一つである。

『メドック地区は，海に近い北部低地のバ・メドック(Bas - Médoc)と南部のやや高地のオー・メドック(Haut - Médoc)に分割されるが，メドック・ワインのなかで偉大なるワインと呼ばれるような良質赤ワインは，すべてこのオー・メドックにあるシャトーから出荷される。

オー・メドックには 29 のコミューンがあるが，このなかには，マルゴー(*)，サンテステフ，ポイヤック，サン・ジュリアン，ムーリ，リストラックなど重要コミューンが含まれ，それぞれのコミューンのなかには数個ないし十数個のシャトーがある。オー・メドックだけで約５００のシャトーがあ

る。

＊：スーサン(Soussans)，**カントナック(Cantnac)**，ラバルド(Labarde),アルサック(Arsac)の４コミューンはマルゴーに隣接し，ワインの品質がマルゴー(Margaux)に酷似しているため，ＡＯＣはMargauxとなっている。』

前述（６月６日の項）の『1855年のボルドー赤ワインの格付け61シャトーは、さらにその時点での評判，値段に応じて61シャトーを５階級のグループに格付けした。第１級のグループには４シャトーが選ばれた。第２級のグループには15，第３級のグループには14，第４級のグループには10，第５級のグループには18のシャトーが選ばれたのである。』（「新版　ワインの知識とサービス」より抄録）

今回のワインは､カントナック村にあるシャトウ､カントナック･ブラウンの格付けワインであり、上記第３級に属するものである。昨晩のクリュ・ブルジョワよりは大分格が上の物である。
色はあくまでも暗い赤色で、香りも良く、フルボディで後味も極めて良いものだった。

レストランを出て、月明かりの中、人通りの全く無い町をふらふらといい気分でホテルに戻った。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）第１４報（完）　　敏翁

【６月８日（日）】

８．３　サン・テミリオン（Saint-Émilion）

今日は、帰国の日である。飛行機は、午後４時半ボルドー・メリニャック空港発なので、ボルドーから近いサン・テミリオンを訪れてみることにした。
ホテルで聞いた、リボーヌ（Libourne）を目指して走れば、その内行き先にサン・テミリオン出てくると言う通りにはいかず、リボーヌの町中に入ってしまい、一寸まごついたが、一回道を尋ねただけで、**【サン・テミリオン】**（St-Émilion）の町に着いた。
サンテミリオン地区はリボーヌから数ｋｍ離れたドルドーニュ河の右岸を見おろす斜面丘陵地帯にある。この地区から生産されるワインはすべて赤ワインである。

今日は日曜のせいか、駐車場の当たりも相当の人だかりであり、その人たちの表情や服装のせいか雰囲気も実に華やいでいた。

そこに車を止めて、緩やかな坂道を登って**【岩の教会】**(Église monolithe)**（上左図）**の麓に至る。教会の前の広場は、一杯にテントが張られ、そこのテーブルにも可成りの観光客が既に座っている。目の前には見上げるように教会の鐘塔が聳えている。教会の参観者は、上の〈i〉に行く必要が有るらしい。そこから、えらく急なごろごろ石の坂を上って〈i〉にたどり着く。そこで岩の教会はガイド付き参観でしか見られず、次のスタートは１１時だと聞く。未だ小一時間ある。キップを買ってからその周りを散歩などして時間を過ごす事にした。

先ず〈i〉の横から入れる**【共同教会**（Collegiate Church）**の回廊】**に入る。ロマネスクの香りの充分残っている美しい回廊だが、**回廊一杯に出店（上右図）**が出ている（）。ワイン、ペースト、コンフィ、牡蠣等々である。大西洋岸で、この地の名物「緑色の牡蠣」を食べたいとも思っていたのだったがチャンスがなかったので探してみたたが、それは無かった。

それでも折角なので、牡蠣を半ダースその場で賞味してみることにした。店の男は、テーブルの隅に私のための席を作ってくれた。横のテーブルを見ると、昨日行ったキャディヤックの白ワインの展示・宣伝（・販売？）をやっていた。

そこの女性に、コップいっぱいのワインを注いで貰い、それを呑み、回廊を眺めながらの牡蠣の賞味である。今回のフランスの旅も、終わったも同然だし、ゆったりして実にいい気分だった。

男に聞いたところでは、牡蠣はこの地から真西に当たる 大西洋岸 Arachon 付近の産だという事だった。男にテーブルに座っている私の記念写真を撮ってもらった。

一旦外に出て、その裏側の**【共同教会】**に行ってみる。この教会は可成り大きい。ロマネスクの身廊と、ゴシックの内陣からなっている。身廊には、１２世紀の壁画がある。内陣には、キリスト磔刑像２体などがある。教会北入り口のタンパンは、立派なものだったようだが破壊が激しい。

その前の広場には、遊覧用オープン連結車が客を待っていた。

どうもこの当たりまで車を乗り入れられるらしい。参観が終わったら、車をここまで持ってきて、回廊でお土産など買うことにしよう。

時間となり、〈i〉の若い女性の引率の下に総勢１０名ばかりの参観が始まった。説明はフランス語

だけであるる。ごろごろ石の坂を下り、先ず「岩の教会」本体の横にある、**【トリニティ礼拝堂】**に入る。１３世紀に建てられたもの。高いリブ付きの天井にフレスコ（栄光のキリスト、聖母子図、キリスト磔刑図など）が綺麗に残っている。

礼拝堂のすぐ横から、「岩の教会」の**サン・テミリオンの庵**（L'Ermitage de St-Émilion）として知られる洞窟に入る。これは又地下墓地（Catacomb）に繋がっている。

「岩の教会」は、フランスにおける最大の一枚岩から作られた教会である。
８～１２世紀に、自然の洞窟を拡張して作られた物らしい。

しかし､崩壊の危険があるのか､巨大な鋼鉄製の支持機構が埋め込まれていて､更に工事中だった。

天井に彫られた大天使像などをフラッシュ撮影したが､石が黒すぎるせいか良く撮れていなかった。

参観が終わり、駐車場に戻り、車を共同教会のそばに持ってくる。

再び、回廊に入り、お土産にコンフィ、ペーストの各缶詰を買う。

又､ワインのテースティングのコーナーがあり､３種類ほどそこの男に選択して貰ってトライする。

1) Saint-Émilion Grand Cru	**Carteau Côtes Daugay**	**1994**	**60Fr**
2) 〃	Haut Fonrazade	1990	67Fr
3) 〃	Laroque	1989	93Fr

1),2)は私には、タンニンが利きすぎてきつすぎる感じだが、3)は実に口当たりが良く素晴らしい。

それを求めようとすると、ここは展示だけで、直ぐそばの「ワイン会館」（Maison du Vin）で、上の表に示した値段で求められると言う。

早速行ってみると、残念！　昼休みになっている。午後は２時からと表示されている。２時まで待つのは、知らない土地で飛行機の出発時間から考えて一寸リスキィに思え、あきらめた。

周りの土産物屋の値段は、ものが良く解らないのだが、200Fr 以下のものはないようだった。

一般に『サンテミリォンのワインはメドックやグラーヴのワインに比べて酸味やタンニンが少なく，味に丸みがあり，肉付きがよく，柔らかで渋味が少ない。また熟成は早いが（普通４年で熟成），寿命はメドックより短い。

サンテミリオンのワインは上記のような酒質があるので「**ボルドーのバーガンデー**（ブルゴーニュの英語表現）」といわれることがある。試みにサンテミリオンとバーガンデーをそれぞれグラスに入れて比べてみても，その差異を的確に探知することはかなりむずかしい。これはある程度の経験を積んで鋭い味覚をもった人でなければできることではない。しかし，サンテミリオンのワインとメドックのワインの味の違いは，実際に飲み比べてみれば，ワインについての知識や経験の乏しい人でさえも簡単に見分けがつく。』（「新版　ワインの知識とサービス」）

参考までに､回廊で貰った価格表からワイン会館での価格を１９９８年ものを例にとって以下に示す。

a) Saint-Émilion	56-59 Fr
b) Saint-Émilion Grands Crus	59-93 Fr
c) Saint-Émilion Grands Crus Classes	112-248 Fr
d) Saint-Émilion Premier Grand Cru Classe	1000 Fr

上表からサン・テミリオンにも非常に価格の差があるが､テースティングの印象と組み合わせて考えると、ここで
１００Ｆｒも出せば、相当良い物が求められるように思われた。（ということはレストランで呑むと２５０Ｆｒ程度にはなる）

朝の駐車場のそばで、フォワグラの出店があったので、それも土産に求め、空港に向かった。非常に解りやすい道で、飛行機マークと、Merignac の標識を頼りに走り、５０分ほどで、空港に到着出

来た。２時過ぎまでサン・テミリオンに居ても全然問題は無かった事になる。

８．４　帰国へ

【ボルドー空港】の、ＡＶＩＳの駐車場で、４日間お世話になった、左ドアのウィンドーに張ったプラスティック・シートを剥がす。
ＡＶＩＳのオフィスで、トラブルについて話すと、報告書が必要だと言う。
英語でよいから、状況を書けと言う。日時、場所などを所定の用紙に記入し、一寸文章を考えていたら、早く書けと言う。今英作文(english composition)の最中だ、と私。面倒なので、簡単に
Left front window's glass crushed by the strongly door shut.
と書いて、どうだというとＯＫだと言う。　（我ながらあまり旨い表現ではない）
これで、一件落着だ。

空港のワイン・ショップで、ボルドーワインを２本求めた。
1) **Château** Clerc Milon　Pauillac の赤ＡＯＣ Grand Cru Clasee　1993
2) **Château** Rozier　Saint-**Émilion** の赤ＡＯＣ Grand Cru　1993

1) のポイヤックは、オー・メドックの主要コミューンの一つで、シャトー・クレール・ミロンは、1855 年のボルドー赤ワインの格付け 61 シャトーの内の第５級である。

ボルドー空港から、パリ・シャルル・ド・ゴール空港でトランジット。　ここの空港のＤＦＳで、ブルゴーニュ・ワインを２本求めた。
3)「Louis Max」 Meursault　Premier Cru　の白ＡＯＣ　**les Perières**　1990
4)「Joseph Drouhin」Amoureuses　Chambolle-Musigny　Premier Cru の赤ＡＯＣ　1992
3),4) の 「 」内の名前は、ネゴシアンの名前である。
3) の白ワインの第１級レ・ペリェールは，最高級ワイン（テート・ド・キュヴェ）として別格に扱われているものである。しかし、ルイ・マツクスと言うネゴシアンは、「新版　ワインの知識とサービス」で見る限り、有名ネゴシアンの中に入っては居ないらしい。

4) のシヤンボル・ミュジニィは、コート・ド・ニユイのＡＯＣである。特急のクリマが２つと、第一級のクリマが２３あるが、その一つに Les Amoureuses がある。このものは、Joseph Drouhin の Les Amoureuses と言う意味である。この Les Amoureuses は「恋する女達」と言う意味だが、ずいぶんしやれた名前をつけたものである。
尚、Joseph Drouhin は自家畑を持つ大手業者である。

以上で、今回の「ロマネスクとワインの旅」は完了した。

今年も、フランス中の大勢の人の親切によって、どうやら無事に旅が完了出来たことを深く感謝したい。

Ⅸ．その他

９．１　ブルゴーニュにおけるネゴシアンの役割り

今までの文章を読み直してみると、「**ネゴシアン**」の説明が抜けていることに気付いた。今回旅行記を書くに当たっての基本的立場は、ワインについては、初心者（具体的には、２年前の自分を想定している）にも有る程度解るように書く事であったので、それの説明も必要と思い以下に記すことにする。

『ブルゴーニュのぶどう園は、フランス革命後零細な小作人達の間で分割所有されるようになったため、ボルドーのシャトー・ワインのようにぶどう園ごとの均一したワインを産出することが不可能になった。

これら零細栽培者の１人当たりの年産量の平均はせいぜい４∵５樽程度といわれ、しかも彼等は瓶詰めする設備がないため、新酒ができるとすぐボーヌ、ニュイまたは、ディジョンなどの町にいるネゴシアン（Negociant；酒商）に売り払ってしまう状況であった。

これらの零細栽培者とは対照的に、ブルゴーニュのぶどう園の特殊な所有形態から生じるさまざまな困難な問題、たとえば個々の栽培者のあまりにも少ないワインの生産量、品質管理、その貯蔵や瓶詰め、ワインの需給・流通などの問題を解決するために派生・発展してきたのがネゴシアンと呼ばれる酒商達である。　随って、ブルゴーニュにおけるネゴシアンの役割はきわめて重要であり、ブルゴーニュ・ワインを今日たらしめたのは多数の零細栽培者の誠実勤勉なワイン作りとともにネゴシアンの無類のワインへの愛情と限りない努力に負うところが多い。

ブルゴーニュのネゴシアンはボルドーのそれと違って、ブルゴーニュの各地区や各村に自分の小さなぶどう園を分散して所有して自ら直接ワインの生産に携わりながら、他の零細栽培者からワインを買い足して自分のワインとブレンドしたものを売るのを主業としているのである。』　（浅田勝美「新版　ワインの知識とサービス」柴田書店　より抄録）

この本は、今まで何回も引用させて貰ったが、旅の中でも参考書として大いに助かった。

改めて、著者とこの書籍に感謝したい。

９．２　まとめ（ロマネスクなど）

ミシュラン・グリーンの評価システムをもじって、今回私が見た物を全くの私の主観で、４星～２星を付けてみた。見た物の殆どは１星の価値は有るように思えたので、１星は省略した。ミシュランの評価（３星～１星）は、芸術的、歴史的重要性からの客観的評価だが、私のは、見たときの印象の強さを第一の評価基準としているもので、ミシュランより狭い部分の評価が多いのも特徴だ。

私の印象評価	ミシュランの評価
【リヨン、オーベルニュ】	（番号は註）
☆☆☆　リヨンのフルヴィエール教会	X
☆☆☆　ル・ピュイ大聖堂の黒マリア	X 1
☆☆☆　イソワールのサン・オストルモワンヌ教会の内部の彩色	☆2

☆☆　　リヨンのテロー広場　　X
☆☆　　リヨンの織物歴史博物館　　☆☆☆
☆☆　　ベス･ｱﾝ･ｼｬﾝﾃﾞｽのｻﾝ･ﾀﾝﾄﾞﾚ教会にある黒マリア　　☆3
☆☆　　リオンのﾉｰﾄﾙ･ﾀﾞｰﾑ･ﾃﾞｭ･ﾏﾙｼｭﾚの小鳥を持つマリア　　☆☆☆
☆☆　　ムーランのﾉｰﾄﾙ･ﾀﾞﾑ大聖堂のトリプティック　　☆☆☆
☆☆　　ムーランの博物館にあった「アリエールの白い土」　　X

【ブルゴーニュ】
☆☆☆☆パレ・ル・モニアルのｻｸﾚ･ｸｰﾙ教会の半ドームのフレスコ　　X 4
☆☆☆　ボームの施療院　　☆☆☆
☆☆☆　クリュニーの穀粉貯蔵庫にある柱頭　　X 5
☆☆☆　ヴェズレーの柱頭　　☆☆☆
☆☆　　ベルゼ・ラ・ヴィルの小修道院のフレスコ　　☆☆
☆☆　　フォントネー修道院全体　　☆☆☆
☆☆　　オータンのローラン美術館にある「イブの誘惑」　　X 6

【ロワール】
☆☆☆☆シャンボール城館、特にその外観　　☆☆☆
☆☆☆　シュノンソー城館　　☆☆☆
☆☆☆　サン・テニャン教会のクリプトのフレスコ　　☆☆
☆☆☆　アンジェ城塞にある黙示録の壁掛け　　☆☆☆
☆☆　　モントワール･シュル・ル・ロワールのサン・ジル礼拝堂のフレスコ　　☆☆
☆☆　　ラヴァルダンのｻﾝ･ｼﾞｭﾈ教会のフレスコ　　☆
☆☆　　タヴァン教会のクリプトのフレスコ　　☆
☆☆　　アンジェのサン・モーリス大聖堂のステンド・グラス群　　☆☆☆

【ポワトゥー、サントンジュ】
☆☆☆　ポワティエのノートル・ダーム・ラ・グランド教会の西正面　　☆☆☆
☆☆☆☆サン・サヴァン教会のフレスコ　　☆☆☆
☆☆☆　オーネーのサン・ピエール教会の西正面　　☆☆
☆☆　　ショーヴィニイのサン・ピエール教会の柱頭　　☆☆
☆☆　　アングレームのサン・ピエール大聖堂の西正面　　☆☆

【註】　1: 大聖堂全体としては☆☆☆評価。
2: 内部では柱頭を☆評価。彩色は評価していない。
3: 教会として☆評価。　　4: 教会全体としては☆☆評価。
5: 旧大修道院全体としては☆☆評価。　　6: 美術館としては☆評価。

以上の評価結果を眺めてみると、私なりのテーマを持って旅行したのは、オーベルニュ、せいぜいブルゴーニュ迄で、後は評価基準がミシュランべったりの旅である事が浮かび上がってくる。

９．３　私の主観的評価（ワイン）

今回の旅行中に呑んだワインを振り返って主観的に評価してみた。それは、その時の気分、その場の雰囲気、料理などにも強く依存すると思われるし、以下は単なる私のメモである。

【白ワイン】

☆☆☆　　５月２９日、ボーヌのホテルで呑んだ　Meursault のＡＯＣ 1993 ″Les Tillets″

☆☆　　５月２３日、イソワールのホテルで呑んだ Saint-Pourçain のＡＯＶＤＱＳ　1994（楢の樽中で育成品）

【赤ワイン】

☆☆☆　　６月７日、ボルドーのレストランで呑んだ
Château Cantenac Brown　Grand Cru Clasée　Margaux のＡＯＣ 1993

☆☆　　５月２０日、リヨンのホテルで呑んだ　Beaujolais、Saint-Amour の　ＡＯＣ 1995

☆☆　　５月２８日、ディジョンのホテルで呑んだ　Chambolle-Musigny の ＡＯＣ 1991

☆☆　　６月６日、ボルドーのホテルで呑んだ　Château Castera　Cru Bourgeois MEDOC ＡＯＣ 1993

今回も、出来るだけ旅先の地元のワインを呑むように務めた。
そして以上の評価結果を眺めてみると、やはり、ブルゴーニュ、ボルドーの実力は抜きんでている事が浮かび上がってくる。

フランス紀行（ロマネスクとワイン）

『完』

追記（１１月４日）　Libretto 利用技術コンテスト　優秀賞受賞

帰国後、新聞（朝日）紙上で「東芝リブレツト誕生一周年記念特別企画」『Ｎｏ．１リブラーは誰だ！』というコンテストが始まっている事を知り、自信は無かったのですが試しにと本旅行記(【1.4.3 Libretto】が中心）を主体として『Libretto を持ってフランス旅行』と題して応募してみました。
このコンテストは、東芝、「Mobile PC」〔ソフトバンク（株）〕、「月刊 ASCII」〔（株）アスキー〕、「PC fan」〔（株）毎日コミュニケーションズ〕の共同企画のものです。
尚、リブラーとはリブレツトを持つ人と言う意味らしく、東芝の誰かの造語だと思います。

その結果、図らずもこれが**「優秀賞」**を受賞してしまい、１０月２４日夜、ホテル・ニューオータニでその表彰式がありました。応募は約１７００通あったそうで、受賞はグランプリ１名、優秀賞３名、アイデア賞１名、協賛３誌の賞各１名、奨励賞１名、エンターテイメント賞１名の計１０名でした。

受賞はみんな若い人たちで、私を除くと４０歳以上の人はいません。グランプリ受賞者は２４歳の大学院生、恋人と一緒に壇上に立ったりして、全体の雰囲気を盛り上げていました。

隣に座っていた３７歳の方に「みんな若いですね」と声をかけると、「私の父と１つ違いでびっくりしています」との返事。今更のように、自分が年を取っている事と、気だけは若いつもりですが、それが既に並外れになってきた事を感じました。　（すこしセーブしないといけないかな？）

この結果は、インターネット http://www2.toshiba.co.jp/pc/libretto で見る事が出来ます。

ホテル・ニューオータニにおける表彰式

下段左から３人目が敏翁。上段中央は東芝パソコン事業部長伴野氏。

追記　終り